

蓮池遺跡

— 福岡県柳川市東蒲池所在遺跡の調査 —

柳川市文化財調査報告書 第9集



蓮池遺跡全景（南西から）

2014年5月撮影

序

柳川市教育委員会では、平成 25 年度から平成 26 年度にかけて株式会社アスタラビスタの委託を受け、柳川市東蒲池に所在する蓮池遺跡の発掘調査を実施しました。本報告書は平成 25 年度から平成 27 年度にかけて行った、その記録です。

本遺跡は矢部川及び筑後川下流域に開けた低地に立地しています。このたびの発掘調査では、弥生時代中期をはじめ、弥生時代終末から古墳時代初頭、古墳時代後期、古代、中世と各時代にわたって人々の生活が営まれてきた遺跡であることを確認しました。木器の出土や掘立柱建物跡の礎盤の検出など低湿地の集落として特色ある調査成果とともに、この地域の歴史を知る上で欠かすことのできない貴重な資料を得ることができました。

発掘調査から報告書の作成にいたる間には関係諸機関や地元を始めとする多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月 31 日

柳川市教育委員会

教育長 日高 良

例 言

- 1 本書は、店舗建設に伴い、株式会社アスタラビスタの委託を受けて柳川市が受託事業として実施した、柳川市東蒲池所在の蓮池遺跡（遺跡略号 HAS）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は柳川市教育委員会が主体となり、柳川市教育委員会生涯学習課の橋本清美、権丈和徳が担当した。
- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は堤伴治、橋本、権丈が行った。
- 4 本書に掲載した遺物実測図の作成は橋本、権丈、西美智代、野口宏美、松本正子、湯川琴美が行った。
- 5 本書に掲載した空中写真撮影は東亜航空が、遺構写真撮影は橋本、権丈が、遺物写真撮影は橋本が行った。
- 6 遺構、遺物の製図は橋本、権丈、西、野口、松本、湯川が行い、一部（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 7 遺物の整理復元は西、野口、松本、湯川が行った。
- 8 遺構実測図台帳、遺物実測図台帳、写真台帳の作成は橋本が行った。
- 9 出土遺物、写真、実測図は全て柳川市教育委員会において保管している。
- 10 本書遺構実測図の方位はすべて世界測地系に依っている。
- 11 本書遺構の略表記は次のとおりである。
SB…掘立柱建物、SD…溝、SK…土坑、SX…不明遺構
- 12 本書の執筆、編集は橋本が行った。

本文目次

I	はじめに	1
	1 調査に至る経過	1
	2 組織	1
II	位置と環境	3
III	調査の内容	7
	1 掘立柱建物跡	7
	2 土坑	7
	3 溝	70
	4 その他の遺構出土遺物	82
	5 その他出土遺物	87
IV	総括	99
	1 掘立柱建物	99
	2 土坑	99
	3 溝	101
	4 まとめ	101

図版目次

巻頭図版	蓮池遺跡全景（南西から）	
図版 1	1. 蓮池遺跡遠景（南から）	2. 蓮池遺跡全景（上空から）
図版 2	1. 下層遺構検出状況（上空から）	2. SK-1・SK-37・SK-61（上空から）
	3. SK-155・SK-164・SK-166・SK-175・SK-255（上空から）	
図版 3	1. SK-1（北西から）	2. SK-26（北東から）
	3. SK-30 半裁（西から）	
図版 4	1. SK-37（東から）	2. SK-51（北東から）
	3. SK-83（東から）	
図版 5	1. SK-90 検出状況（東から）	2. SK-90（東から）
	3. SK-104（東から）	
図版 6	1. SK-108 検出状況（東から）	2. SK-108（東から）
	3. SK-109（南から）	
図版 7	1. SK-110 半裁（南から）	2. SK-110（東から）
	3. SK-111 半裁（南東から）	
図版 8	1. SK-132 半裁（西から）	2. SK-132（東から）
	3. SK-139 半裁（南から）	
図版 9	1. SK-140 半裁（東から）	2. SK-140（東から）
	3. SK-155 半裁（東から）	

図版 10	1. SK-168 半裁 (東から)	2. SK-170 検出状況 (東から)
	3. SK-170 (南東から)	
図版 11	1. SK-175 検出状況 (南から)	2. SK-175 (南から)
	3. SK-183 (南から)	
図版 12	1. SK-186 半裁 (南から)	2. SK-202 (東から)
	3. SK-202 (東から)	
図版 13	1. SK-238 (南から)	2. SK-240 (東から)
	3. SK-241 (東から)	
図版 14	1. SK-400 (東から)	2. SK-401 (南から)
	3. SD-40 (上空から)	
図版 15	1. SD-135 (上空から)	2. SD-135 土層 (東から)
	3. SD-161 (上空から)	
図版 16	1. SK-402・403 (東から)	2. SK-402・403 (南から)
	3. 籠出土状況 (東から)	
図版 17	SK-1・16・37・19 出土遺物	
図版 18	SK-26・30・37・51・83・104 出土遺物	
図版 19	SK-110・111 出土遺物	
図版 20	SK-111・116・126・132・140・141・148 出土遺物	
図版 21	SK-156・163・164 出土遺物	
図版 22	SK-166・171・175・183・186 出土遺物	
図版 23	SK-186・202・238・241・255 出土遺物	
図版 24	SK-255・300・302・303 出土遺物	
図版 25	SK-303・SD-40・135 出土遺物	
図版 26	SD-135・161 その他の遺構出土遺物	
図版 27	その他の遺構出土遺物	
図版 28	土製品・石製品・石塔類	
図版 29	石塔類	
図版 30	石塔類・鉄製品・木製品	
図版 31	木製品・骨角製品・貝類・獣骨	

挿 図 目 次

第 1 図	柳川市位置図	3
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第 3 図	調査区位置図 (1/2,500)	8
第 4 図	蓮池遺跡遺構配置図 (1/300)	折込
第 5 図	蓮池遺跡下層遺構配置図 (1/300)	9
第 6 図	SB-1001・1002 実測図 (1/60)	10

第 7 図	SB-1003 実測図 (1/60)	11
第 8 図	SK-1・16 実測図 (1/40)	12
第 9 図	SK-1 出土遺物実測図① (1/3)	13
第 10 図	SK-1 出土遺物実測図② (1/3)	14
第 11 図	SK-16・19 出土遺物実測図 (1/3)	15
第 12 図	SK-26・30・37 実測図 (1/40)	17
第 13 図	SK-26・30 出土遺物実測図 (1/3)	18
第 14 図	SK-37 出土遺物実測図① (1/3)	19
第 15 図	SK-37 出土遺物実測図② (1/3)	20
第 16 図	SK-51・79・83・90・104 実測図 (1/40)	22
第 17 図	SK-51・83 出土遺物実測図 (1/3)	23
第 18 図	SK-90・104・109 出土遺物実測図 (1/3)	24
第 19 図	SK-108・109・110 実測図 (1/40)	25
第 20 図	SK-110 出土遺物実測図① (1/3)	27
第 21 図	SK-110 出土遺物実測図② (1/3)	28
第 22 図	SK-111・116・117・118・126・129・132 実測図 (1/40)	30
第 23 図	SK-111 出土遺物実測図① (1/3)	31
第 24 図	SK-111 出土遺物実測図② (1/3)	32
第 25 図	SK-116・126・129 出土遺物実測図 (1/3)	33
第 26 図	SK-132・139 出土遺物実測図 (1/3)	34
第 27 図	SK-139・140・141・148・155 実測図 (1/40)	35
第 28 図	SK-140・141 出土遺物実測図 (1/3)	36
第 29 図	SK-148・156 出土遺物実測図 (1/3)	38
第 30 図	SK-163・164・166・168 実測図 (1/40)	39
第 31 図	SK-163 出土遺物実測図① (1/3)	40
第 32 図	SK-163 出土遺物実測図② (1/3)	41
第 33 図	SK-164 出土遺物実測図 (1/3)	43
第 34 図	SK-166 出土遺物実測図① (1/3)	44
第 35 図	SK-166 出土遺物実測図② (1/3)	45
第 36 図	SK-168・170 出土遺物実測図 (1/3)	46
第 37 図	SK-170・171・175 実測図 (1/40)	47
第 38 図	SK-171・175 出土遺物実測図 (1/3)	49
第 39 図	SK-183・191・202・205・218・238 実測図 (1/40)	51
第 40 図	SK-183・186・202 出土遺物実測図 (1/3)	52
第 41 図	SK-238・240・241 出土遺物実測図 (1/3)	53
第 42 図	SK-240・241・255・302 実測図 (1/40)	55
第 43 図	SK-255 出土遺物実測図 (1/3)	56
第 44 図	SK-300 出土遺物実測図 (1/3)	57

第 45 図	SK-302 出土遺物実測図① (1/3)	59
第 46 図	SK-302 出土遺物実測図② (1/3)	60
第 47 図	SK-302 出土遺物実測図③ (1/3)	61
第 48 図	SK-303・306 実測図 (1/40)	61
第 49 図	SK-303 出土遺物実測図 (1/3)	62
第 50 図	SK-306 出土遺物実測図 (1/3)	63
第 51 図	SK-310・313・316・330・349 実測図 (1/40)	64
第 52 図	SK-315 実測図 (1/40)	65
第 53 図	SK-350・351・373・400・401・433 実測図 (1/40)	67
第 54 図	SK-401・433 出土遺物実測図 (1/3)	69
第 55 図	SD-40 東側断面実測図 (1/40)	71
第 56 図	SD-40 西側断面実測図 (1/40)	72
第 57 図	SD-40 出土遺物実測図① (1/3)	73
第 58 図	SD-40 出土遺物実測図② (1/3)	74
第 59 図	SD-40 出土遺物実測図③ (1/3)	75
第 60 図	SD-135・161 断面実測図 (1/40)	76
第 61 図	SD-135 出土遺物実測図① (1/3)	77
第 62 図	SD-135 出土遺物実測図② (1/3)	78
第 63 図	SD-135 出土遺物実測図③ (1/3)	79
第 64 図	SD-161 出土遺物実測図① (1/3)	80
第 65 図	SD-161 出土遺物実測図② (1/3)	81
第 66 図	その他の出土遺物実測図① (1/3)	83
第 67 図	その他の出土遺物実測図② (1/3)	84
第 68 図	その他の出土遺物実測図③ (1/3)	85
第 69 図	土製品・骨角製品実測図 (1/2)	88
第 70 図	石製品実測図① (1/2)	89
第 71 図	石製品実測図② (1/3)	90
第 72 図	石製品実測図③ (1/3)	91
第 73 図	石製品実測図④ (1/3)	92
第 74 図	石塔類実測図① (1/6)	93
第 75 図	石塔類実測図② (1/6)	94
第 76 図	石塔類実測図③ (17 は 1/8・他は 1/6)	95
第 77 図	木製品実測図① (1/3)	96
第 78 図	木製品実測図② (1/3)	97
第 79 図	鉄製品実測図 (1/2)	97

I はじめに

1 調査に至る経過

柳川市は筑後川と矢部川とに挟まれた筑後平野の南西部に位置し、有明海に面している。中世には市北西部の蒲池地区を中心に蒲池氏、市南東部の鷹ノ尾地区を中心に田尻氏らの豪族が割拠し、近世初頭には筑後 33 万石を治めた田中氏、次いで柳川 12 万石の藩主立花氏の城下町として栄えた。市南部には近世以前から戦後まで造られた広大な干拓地が広がる他、本市を含む筑紫平野南部一帯には、水田の灌漑排水用の水路が網のように巡り、独特の景観を形成している。

店舗建設に先立ち株式会社アスタラピスタ代表取締役から、平成 25 年 6 月 6 日付で文書により埋蔵文化財の有無についての照会を受け、平成 25 年 6 月 17 日から 18 日に柳川市教育委員会が確認調査を行った。調査はバックフォアを用いて 12 本のトレンチを設定した。調査の結果、弥生時代中期から後期の土器を伴う土坑等の遺構が広範囲にわたり検出され、弥生時代の集落遺跡の存在が考えられるため、照会者に本調査を実施する必要があることを伝えた。

数次の協議を経て、事前調査により遺構が確認された店舗建設範囲については遺跡の保存が困難なため記録保存の発掘調査を行うこと、調査費用は原因者が負担すること、発掘調査は平成 25 年 12 月から開始することを合意し、文化財保護法による諸手続きを経て株式会社アスタラピスタと柳川市は、蓮池遺跡埋蔵文化財発掘調査に関する契約を締結した。

2 組織

発掘調査の関係者は次のとおりである

平成 25 年度 (平成 26 年 3 月 30 日まで)

総括	柳川市教育委員会	教育長	黒田 一治
		教育部長	高崎 祐二
		生涯学習課長	石橋 正次
		生涯学習課長補佐	松尾 強
		文化係長	堤 伴治
		文化係	武藤 一也
			須崎 精一郎
			橋本 清美 (調査担当)

平成 26 年度 (平成 27 年 3 月 30 日まで)

総括	柳川市教育委員会	教育長	黒田 一治
		教育部長	石橋 正次
		生涯学習課長	松尾 強
		生涯学習課長補佐	古賀 和明
		文化係長	堤 伴治
		文化係	須崎 精一郎
			橋本 清美 (調査担当)
			権丈 和徳

平成 27 年度

総括	柳川市教育委員会	教育長	日高 良
		教育部長	樽見 孝則
		生涯学習課長	袖崎 朋洋
		文化係長	野田 学
			堤 伴治
		文化係	須崎 精一郎
			堤 智一
			橋本 清美 (調査担当)
			権丈 和徳
株式会社アスタラピスタ		代表取締役	松永 修

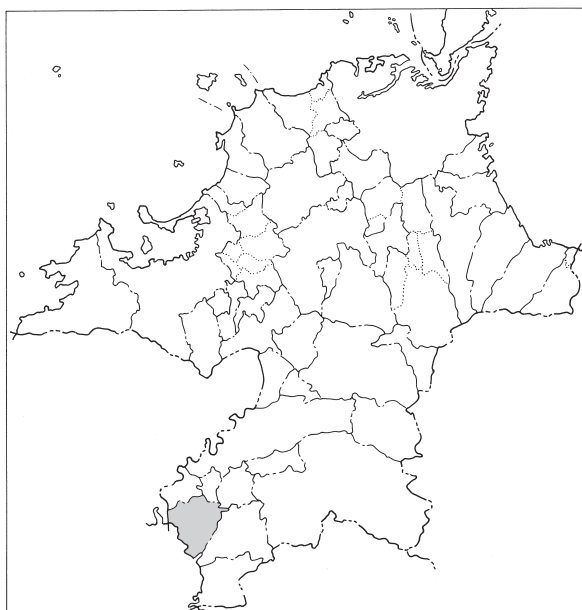
なお、発掘調査及び報告書の作成期間中、大変多くの方々のご指導ご協力をいただきました。
以下に機関名を記し、感謝の意を表します。(順不同、敬称略)

福岡県教育庁総務部文化財保護課、九州歴史資料館、みやま市教育委員会、大牟田市教育委員会、別府大学

Ⅱ 位置と環境

地理的環境

蓮池遺跡が所在する福岡県柳川市は福岡県西南端の人口69,000人、面積77平方キロメートルの地方都市である。有明海北部沿岸に開けた筑紫平野は筑後川左岸の福岡県側を筑後平野と呼び、柳川市は九州山地から有明海に注ぐ筑後川下流域左岸と矢部川下流域右岸とに挟まれた筑後平野南端の三角州に立地する。地形は平坦で、標高0m～6mの低地である。また、柳川市が面する有明海は最大で5～6mにも及ぶ干満差があり国内有数の干潟を有し、沿岸部には中世以降営まれた干拓地が広がる。これら平野部には、矢部川及び同水系の沖端川、塩塚川等の河川を水源として隈無く水路がつくられ、治水、利水、貯水等の機能により流域の土地利用を可能にしている。



第1図 柳川市位置図

柳川市の大半は水田が広がり、環境省の自然環境基礎調査では水田雑草群落に分類されている。森林は認められず主な緑地は寺社境内の樹叢であり、大型の樹木としては公園や住宅地にクスを中心としてエノキ、マキ、モチ、マツ等がみられる。このほか農村部の水路岸にヤナギやメダケ等の灌木がみられ、一部の河川堤防には藩政時代に植栽されたハゼが残る。また、特に近世柳川城の城堀は大半が現役の水路として残されており、堀岸のクスやマツ等の大型樹木と豊かな水面が往時の水景を止めている。

水面が多い本市では水際の植生に特徴がある。河川の汽水域にはヨシやオギが広範囲に群生しており、筑後川河口域のイセウキハガラや塩塚川下流域のヒロハマツナ、シチメンソウなど塩生地の希少植物群落がみられるほか、内水面では沖端川や二ツ川、太田川に希少種のオグラコウホネが群生している。

有明海北部沿岸の広大な干潟と大きな干満差は干拓に適しており、戦国期には在地領主により干拓による耕地拡張が進められたと考えられている。慶長6年(1601)に田中吉政が筑後国主として柳川に入部すると、現在の大川市からみやま市高田町に至る既存の干拓堤防を補強のために再整備し、慶長本土居と通称されている。以降、近世から現代まで当地では干拓事業が繰り返された。

柳川市の基幹産業は農業と漁業である。筑紫平野は日本有数の穀倉地帯であり、柳川市域においても戦後の大和干拓・昭代干拓や圃場整備事業により農業基盤の充実が図られてきた。稲の裏作としてい草、麦、大豆等が作られるほか、野菜のハウス栽培や干拓地での果樹栽培が増加している。内海である有明海は良好な漁場であり採貝も盛んであったが近年は漁獲量が減少している。一方で昭和30年代から飛躍的に発展した海苔の養殖が盛んであり全国有数の生産地で



1. 蓮池遺跡 2. 北古賀遺跡 3. 鬼古賀遺跡Ⅱ 4. 三丸東田口遺跡 5. 宮ノ前遺跡 6. 園田遺跡
7. 鬼古賀遺跡Ⅰ 8. 中村遺跡 9. 西門前遺跡 10. 坂井長永遺跡 11. 西蒲池古塚遺跡
12. 西蒲池将監坊遺跡 13. 西蒲池古溝遺跡 14. 扇ノ内遺跡 15. 西蒲池下里遺跡
16. 東蒲池大内曲り遺跡 17. 東蒲池榎町遺跡 18. 矢ヶ部町屋敷遺跡 19. 矢ヶ部五反田遺跡
20. 矢ヶ部南屋敷遺跡 21. 玉垂命神社遺跡 22. 阿弥陀屋舗遺跡 23. 蒲船津江頭遺跡
24. 蒲船津水町遺跡 25. 蒲船津西ノ内遺跡 26. 徳益八ツ枝遺跡 27. 今古賀城跡 28. 蒲船津城跡
29. 浮島天神遺跡 30. 逆井出遺跡 31. 南矢ヶ部遺跡Ⅰ 32. 磯鳥フケ遺跡 33. 南矢ヶ部遺跡Ⅱ
34. 京町遺跡 35. 柳川城跡

第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

ある。

また、前述の柳川城下の掘割を「どんこ舟」と呼ばれる小舟で巡る川下りや鰻の蒸籠蒸しで知られる観光都市であり、詩人北原白秋や第10代横綱雲龍久吉の出身地としても知られる。柳川藩の藩祖が祀られる三柱神社の秋季大祭「おにぎえ」や、当地特有の吊るし雛「さげもん」が町中を彩る春季には多くの観光客で賑わう。

歴史的環境

現在のところ、柳川市域および近隣市域で最も古い時期にさかのぼる遺跡は、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する、大川市下林西田遺跡である。ここでは弥生時代前期前半から中期中頃の土坑が確認されており、刻目戸突帯文土器や彩文土器の他、朝鮮系無文土器と思われる土器片や猪牙製装飾付腕輪といった注目すべき遺物も出土している。なお、この遺跡からは古代・中世の土坑も多数見つかった。また、同市酒見貝塚でも前期の土器片が採集されている。柳川市内では、徳益八枝遺跡で弥生時代前期から中期初頭にかけての遺構が見つかった。柱が軟弱な地盤に沈み込まないように礎盤を敷いた掘立柱建物の他、同時期の井戸も検出された。弥生時代中期になると、遺跡数は大幅に増加する。柳川市域でも北部に位置する蒲池地区では多くの遺跡が確認されており、広い範囲にわたって散布地や貝塚が確認されている。西蒲池地区の扇ノ内遺跡では、支石墓の上石とみられる巨石と甕棺墓の存在が確認されており、また三島神社楼門前の石橋に使用されている一枚岩も、支石墓に使用された上石と言われている。

市西部では、柳川市教育委員会が平成16・17年度に発掘調査を実施した、柳川市三橋町磯鳥の磯鳥フケ遺跡が挙げられる。ここでは弥生時代中期後半にほぼ限定される時期の土坑、井戸、礎盤を据えた掘立柱建物が確認され、当該期の市内の集落様相がかなり明確になった。柳川市一帯の地盤はおおむね肌理の細かい粘土質で形成されており、地下水位も高いため、概して遺物の遺存は良好で、磯鳥フケ遺跡でも木製品が数点遺存していた。また、近年は有明海沿岸道路大川バイパス建設と、その付帯工事に伴う発掘調査によって、同時期の遺跡も大幅に事例が増加している。平成21・22年度に発掘調査が行われた柳川市西蒲池の西蒲池池淵遺跡では、中期の土坑や溝がまとまって確認された。この遺跡ではほかに弥生終末～古墳初頭の礎盤敷き掘立柱建物・土坑、古墳時代～古代の土坑、中世の土坑・溝も多く見つかった。やはり遺物の遺存状況の良さが際立っており、複数の木製品の他、弥生終末～古墳前期のト骨も数点見つかった。平成20年に発掘調査が行われた東蒲池蓮池遺跡でもやはり弥生終末～古墳初頭の溝が確認されている。

古墳時代、柳川市域は古代豪族水沼氏の勢力下にあったものと思われる。この水沼氏は海上交易を生業の基盤とし、宗像神を祀り、本拠を現在の久留米市三潞地区に構えていたとされ、久留米市大善寺にある5世紀代の首長墳、御塚・権現塚古墳がその奥津城に比定されている。従来、柳川市域には古墳はもとより古墳時代の遺跡自体ほとんど知られていなかったが、近年の発掘調査の進展により当時の様相が急速に明らかになりつつある。上述の遺跡の他、平成17～19年度に発掘調査が行われた、蒲船津江頭遺跡がある。ここでは弥生終末～古墳初頭を中心に、礎盤敷き掘立柱建物、土坑、溝が数多く確認された。掘立柱建物は確認された数だけでも140棟

を数え、出土遺物も遺存状態が良く数も非常に多い。5世紀～9世紀の遺物も数は多くないが確認されている。

律令制下では柳川市北部が三瀧郡に、南・東部が山門郡に属していた。平安時代末期には三瀧郡域を中心に三瀧庄、山門郡域を中心に瀬高庄が成立する。「和名抄」の郷としては、筑後国下妻郡の中に鹿待郷があり、これが旧三瀧郡の蒲池に通ずるとされる。この時期、市内では上述の遺跡の他、平成15年度に発掘調査が行われた東蒲池榎町遺跡で8・9世紀の土坑、溝が確認されている。この遺跡では他に若干の弥生時代中期や13世紀の遺構、遺物も見つかっている。

中世、鎌倉後期の永仁4年(1296)注進の「玉垂宮並大善寺仏神事次第写」(御船文書)の中に見える三瀧庄関係の村の中に蒲池村、築川村などが見える。この築川村が「やながわ」の史料上の初見である。また、柳川市蒲池を本拠とする在地領主蒲池氏が、戦国期にはいわゆる筑後の国人15人衆の旗頭として南筑後地方に勢力を振るった。蒲池氏の系譜については諸説ありはつきりしたことは分かっていない。戦国期の後半、蒲池氏は2家に分かれ、蒲池鑑盛が築川に築城して下蒲池を称した。この築川城が近世柳川城の先駆をなすものである。天正8年(1580)、肥前の竜造寺隆信は蒲池鑑盛の子、鎮並を築川城に攻めたが、要害堅固のため落城せず和平に及んだ。しかし鎮並は島津氏との内通が露顕して翌9年佐賀に誘殺され、そのあと柳川城は竜造寺氏の手に属すこととなった。

中世前期の遺跡は、上述の下林西田遺跡で13世紀を中心とする時期の土坑、西蒲池池淵遺跡で13世紀以降の土坑と溝が確認されている。その他、平成17年度に発掘調査が行われた柳川市東蒲池の東蒲池大内曲り遺跡では11世紀後半から13世紀の掘立柱建物、土坑、溝が確認された。中世後期の遺跡はやはり蒲池氏の隆盛に伴ってか遺跡数が多い。平成18、21、22年度に発掘調査が行われた柳川市東蒲池、西蒲池の東蒲池門前遺跡では、15、16世紀の土坑や溝が確認された。平成18年度から24年度に柳川市教育委員会が発掘調査を実施した、柳川駅東部土地区画整理事業関係の発掘調査では、14世紀から17世紀までの土坑、溝が数多く確認された。他にも西蒲池池田遺跡、矢加部南屋敷遺跡、矢加部五反田遺跡などで当該期の遺構や遺物が見つかっている。

豊臣政権下の天正15年から慶長5年(1600)まで、柳川市は立花宗茂の城下だったが、関ヶ原の合戦で立花氏は改易となり、代わって慶長6年から徳川氏により田中吉政の居城となった。田中氏が2代で断絶後、元和7年(1621)からは奥州棚倉に在った立花宗茂が再び旧領柳川に復封せられ、以後、明治維新まで柳川藩立花氏の城下として発展した。

近年、柳川市では開発事業に伴って柳川城郭跡内各地区の発掘調査が進んでいる。平成20年に発掘調査を実施した京町遺跡では、地割りを示す溝や石列、杭列、丸太基礎が検出された。遺物は18世紀代を中心に、一部17世紀台にまで遡るものもみられた。平成22年度に発掘調査を実施した上町遺跡では、地割りに沿った溝や石組遺構、竹製導水管や土坑が検出され、17世紀末から幕末までの遺物の出土をみた。城外地区では平成16・18・19年度に発掘調査が実施された、柳川市蒲船津の矢加部町屋敷遺跡がある。ここでは17世紀中葉以降、特に18世紀中葉以降の遺構、遺物が数多く見つかっており、当時の街道沿いの町屋敷の様相が明らかになった。中でも鑄造関連遺物の出土は注目される。近年の発掘調査成果の整理、報告書刊行が進めば近世柳川城郭の様相も次第に明らかになるだろう。

Ⅲ 調査の内容

蓮池遺跡の発掘調査は平成 25 年 12 月 9 日に調査区南西隅から重機による表土除去に着手した。表土除去後は手作業による遺構確認・遺構掘削作業を行い、全体の遺構配置図を作成すると共に、個別遺構の実測と写真撮影、遺物の取り上げ等を随時行い、6 月 30 日に機材を撤収して現地での作業を完了した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物・土坑、溝・ピットである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の他、石塔・木器等がある。時期は弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世と多岐にわたる。

1 掘立柱建物跡

SB-1001 (第 6 図)

調査区中央付近に位置する 1 × 1 間の建物で、SB-1002 の東側に位置する。礎盤 494、495、496、527 からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの礎盤の組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。長軸 3.35m、短軸 2.7m を測り、床面積は 9.045m² 程度となる。

SB-1002 (第 6 図)

調査区中央付近に位置する礎盤 572、492、493、518 からなり、1 × 1 間の建物である。柱根は 10cm 程度である。長軸 2.45m、短軸 3.35m を測り、床面積は 8.207m² 程度となる。

SB-1003 (第 7 図)

調査区西端に位置する 1 × 1 間の建物である。南西隅の柱は調査区外へと続くため、3 つの礎盤しか検出していない。礎盤 574、508、580 からなり、また 508 と 580 の間に横木が確認されたため東柱として拾っている横木の形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの礎盤の組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。柱根は 10cm 程度である。長軸 2.6m、短軸 2.2m を測り、床面積は 5.72m² 程度となる。

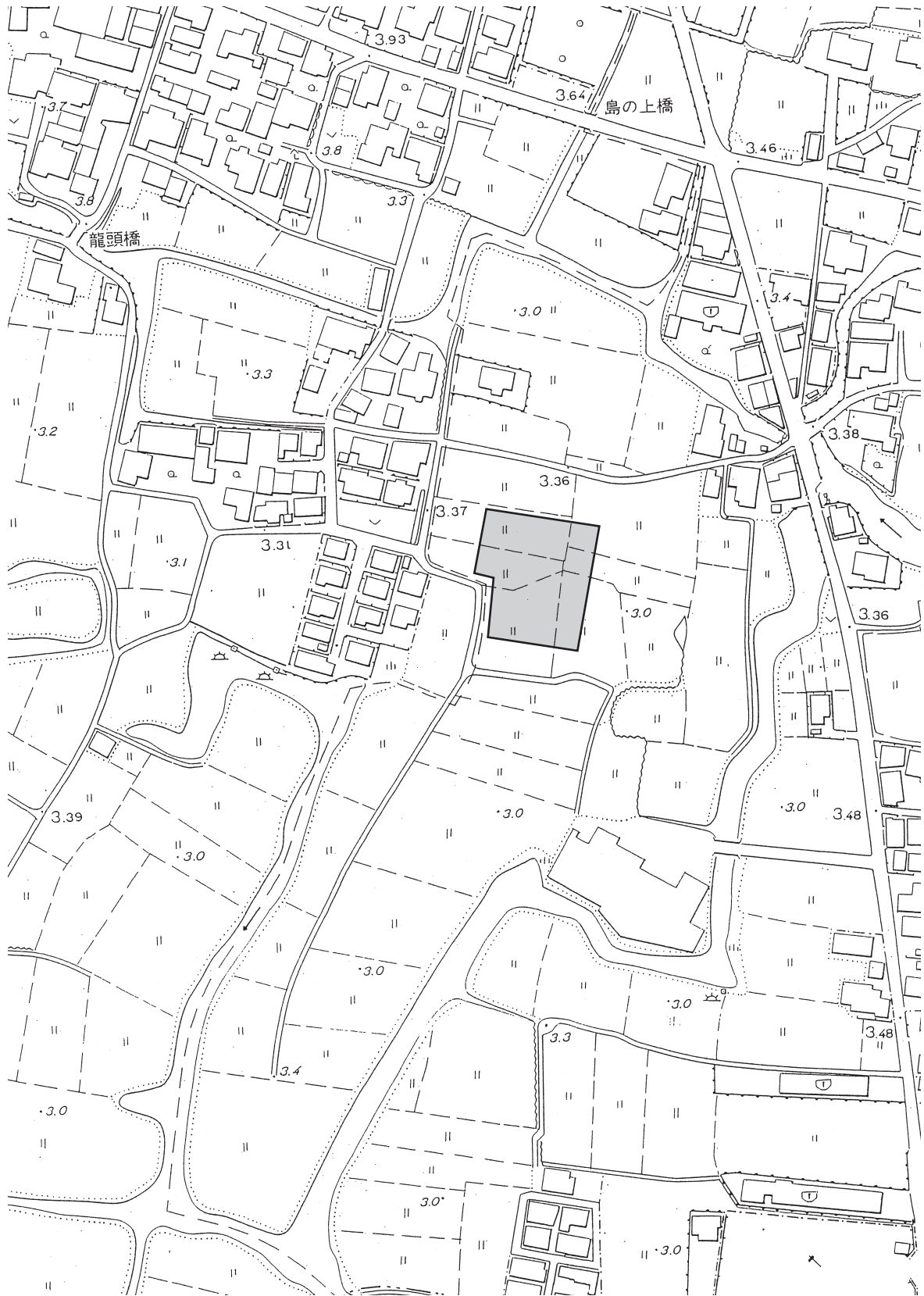
2 土坑

SK-1 (図版 2・3、第 8 図)

調査区中央に位置する土坑である。長軸 360cm × 短軸 350cm の円形で、深さ 130cm である。壁の立ち上がりは急な角度で、底部までの深さは 140cm を測る。中央は不整形のピット状に深くなる。ピットの深さは 50cm。埋土の上層は黒色土、下層に向かって灰色土となる。底部付近では第 78 図 12 の漆器椀が出土。

出土遺物 (図版 17、第 9・10 図)

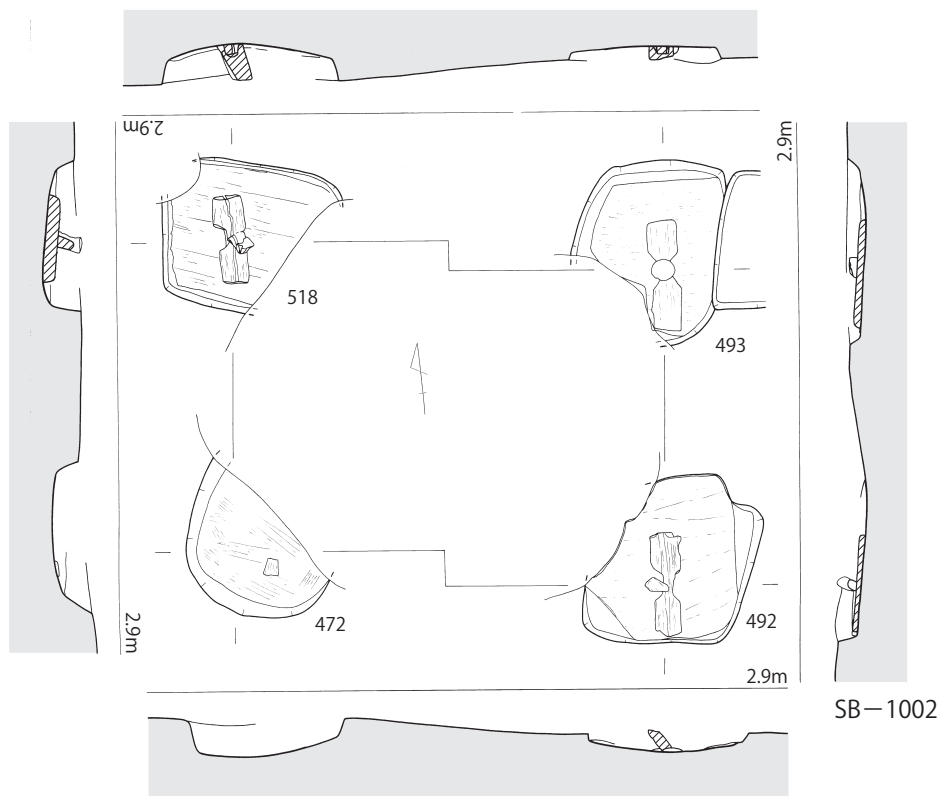
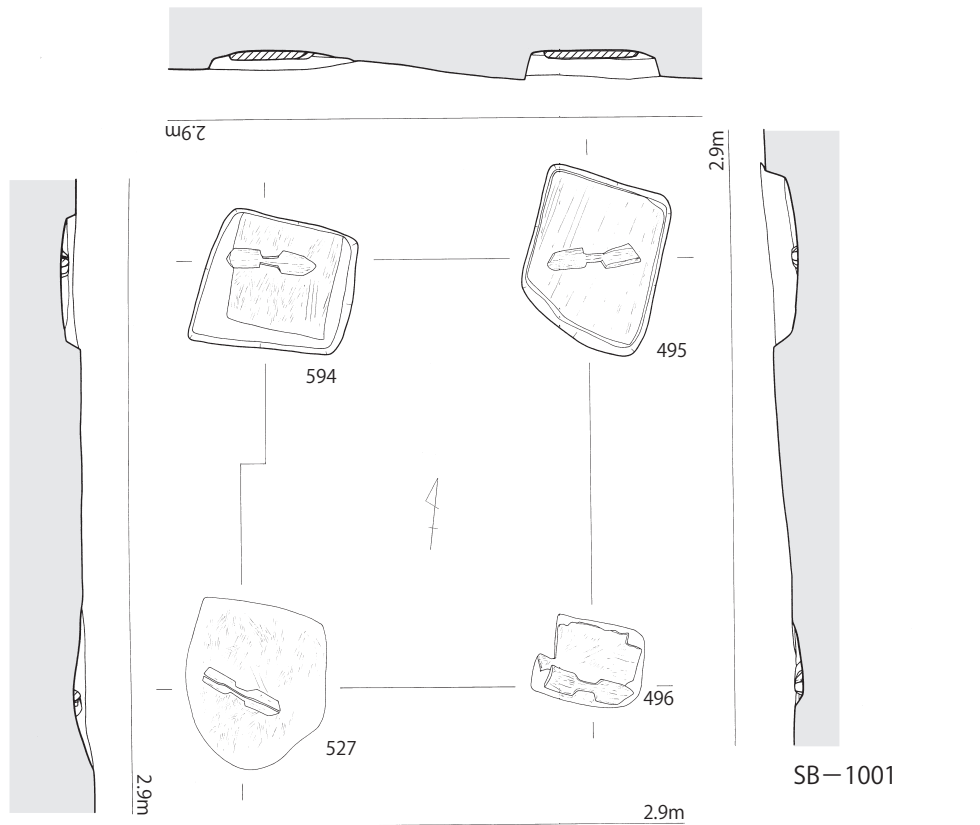
1～11 は弥生土器である。1～4 は壺。1 は外反する口縁部となる。下端部を断面三角形状につまみ出す。外面には丹塗りの痕跡あり。2～4 は若干の上げ底の底部である。3 は外面に縦方向のヘラ磨き調整がなされる。5～10 は甕。5 は鋤先状口縁を呈し、幅の広い上面があり、内面



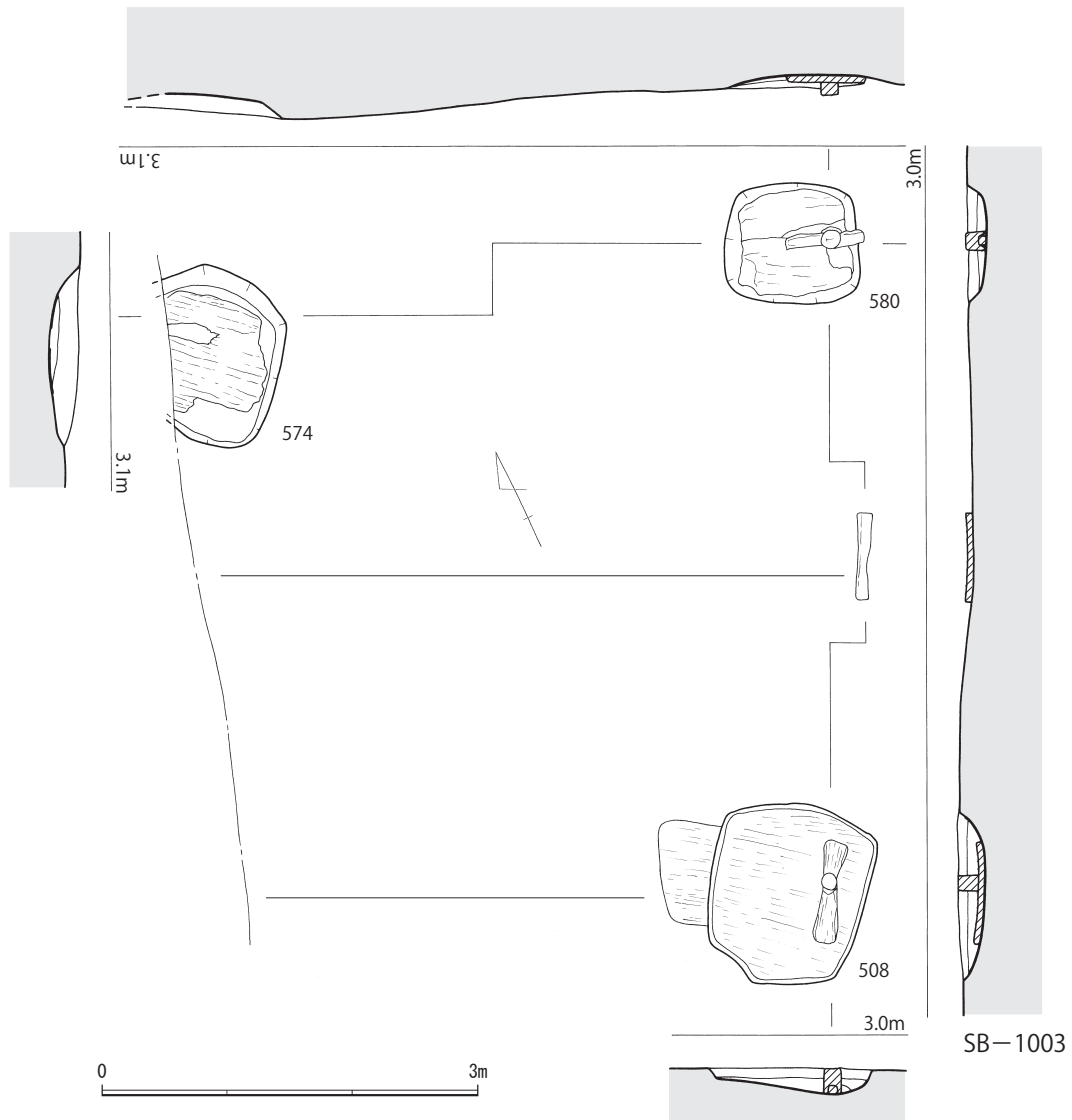
第3図 調査区位置図 (1/2,500)



第5図 蓮池遺跡下層遺構配置図(1/300)



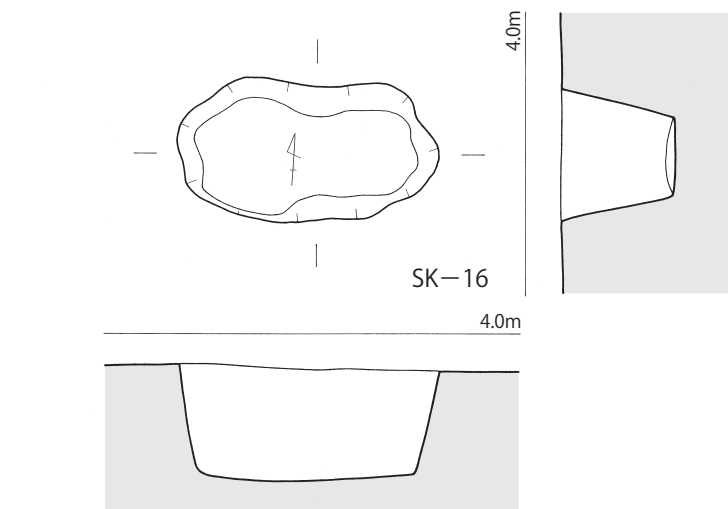
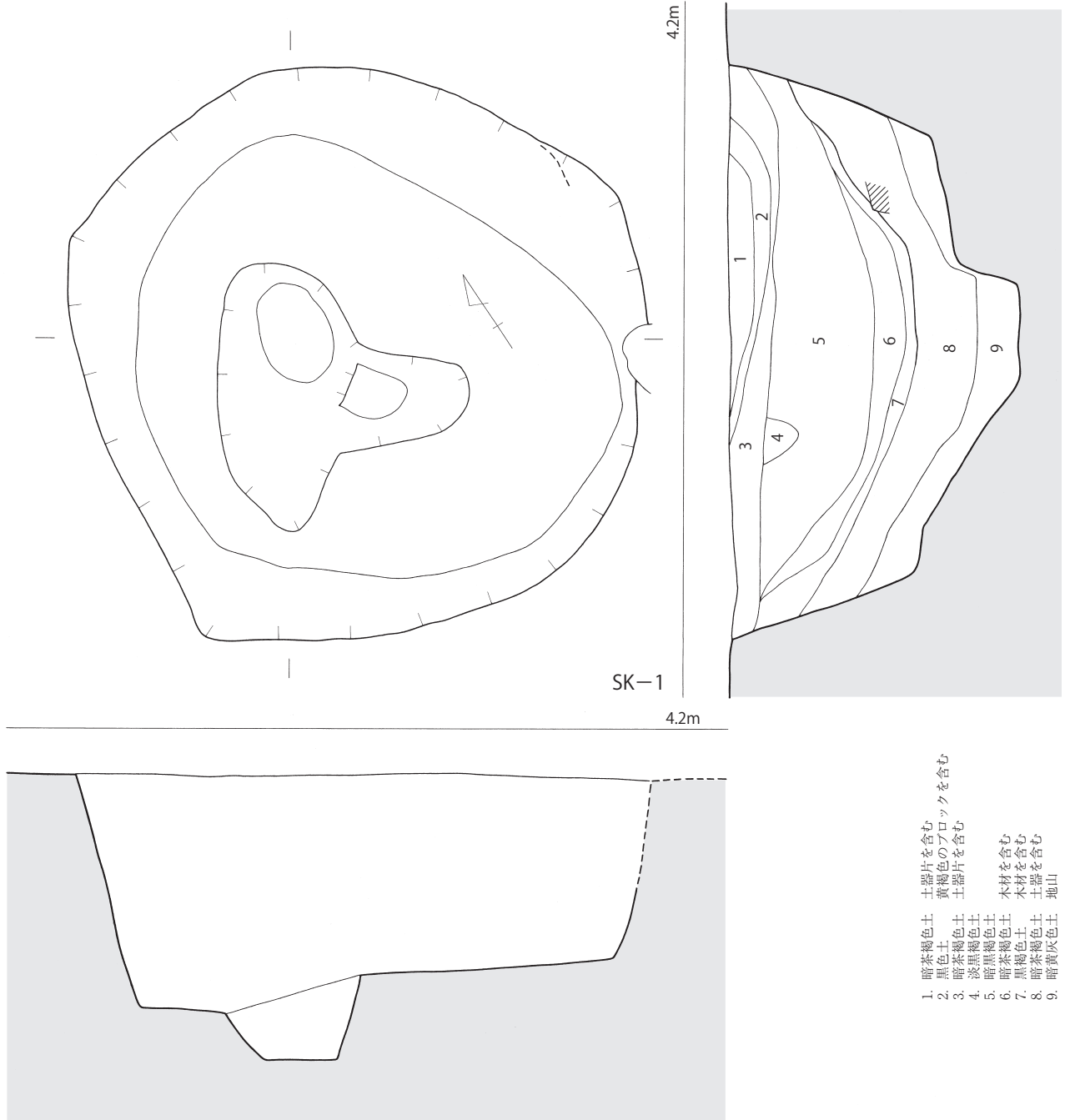
第6图 SB-1001·1002 实测图 (1/60)



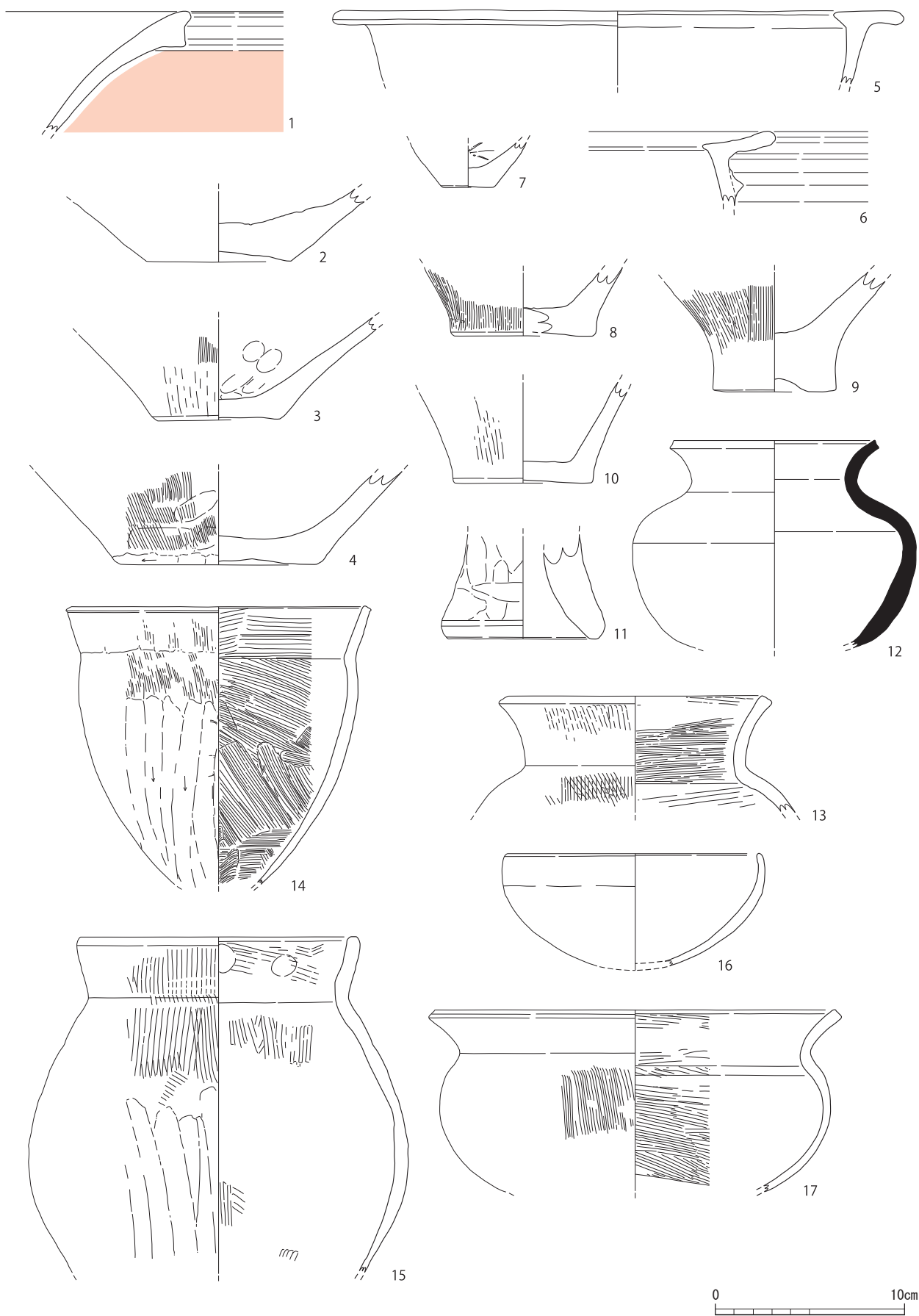
第7図 SB-1003 実測図 (1/60)

へわずかに突出し外端部は丸みをもって収められる。6は口縁部が逆「L」字状を呈し、口縁上面は非常に幅広で外端部は丸みをもって収められる。口縁平坦部がわずかに内湾しながら内傾するのが特徴的である。口縁部直下に三角突帯を巡らせる。7は小型の甕で平底となる。8は平底の底部で、外面はハケ目調整。9は上げ底の厚い底部をもち、外面はハケ目調整。10は平底の底部で外面ハケ目調整。11は支脚で、上半部が欠損する。外面に指による雑なナデを施す。

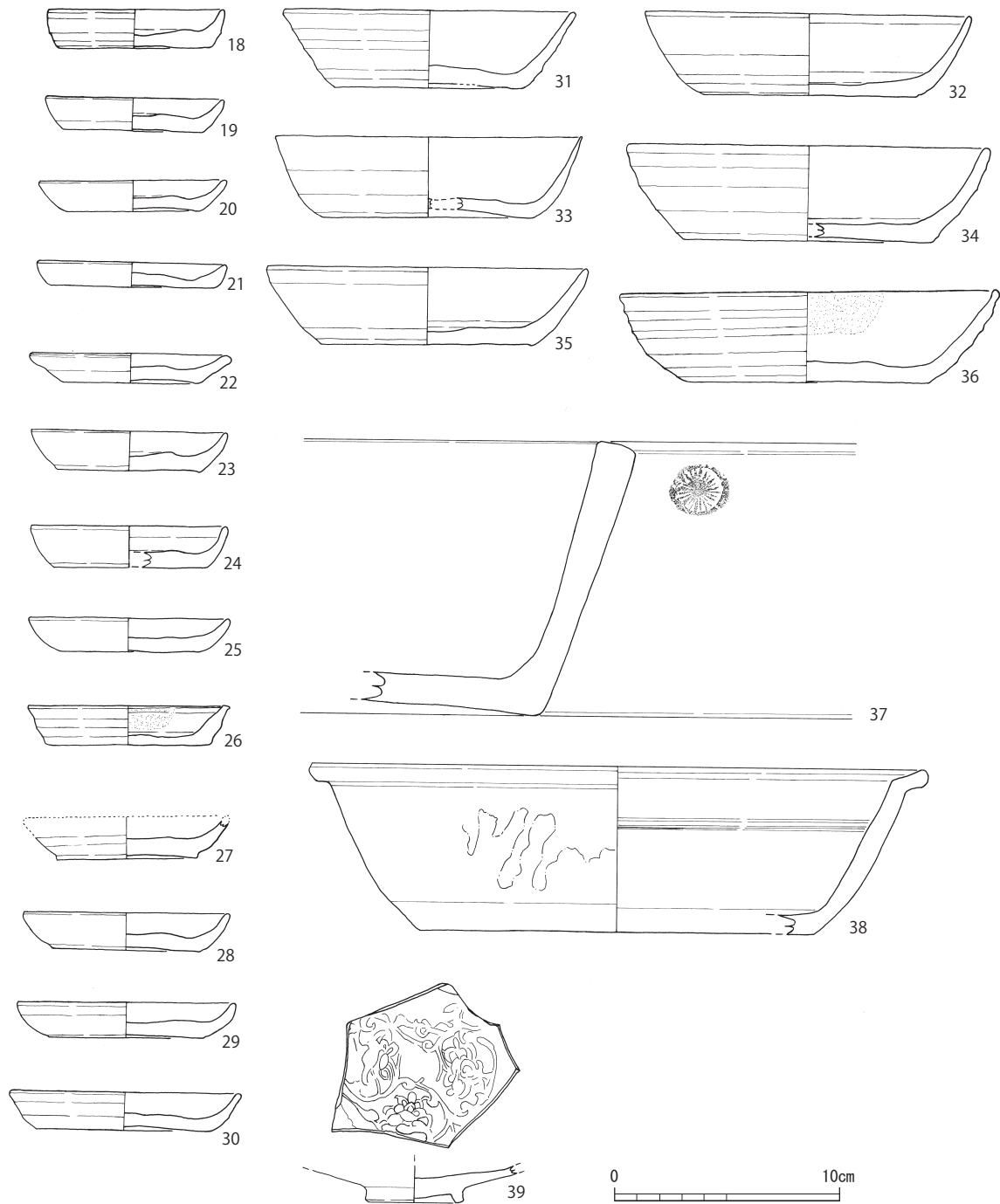
12は須恵器壺。肩が張り、口縁部は強く外反し端部は鋭い稜をもって明瞭な面をなす。調整は内外面ともナデ調整。13は土師器壺。口縁部はあまり開かず端部は明瞭な面をなす。口縁部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目を行った後に横ナデを行う。体部内面は粗い横ハケ目。外面頸部付近に煤の付着が見られる。14～15は土師器甕。14は口縁部が短くあまり開かず立ち上がり、頸部はほとんど締まらない器形となる。口縁部内面は横ハケ目、体部内面は斜ハケ目調整を行う。外面は縦ハケ目後体部下半に縦方向のヘラ削りを行う。15は14と比較すると幾分頸部が締まった器形となる。口縁部はあまり開かない。口縁部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目。体部内面は縦ハケ目、外面は縦ハケ目後下半部に縦ヘラ削りを行う。16・17は土師器鉢で



第8図 SK-1・16 実測図 (1/40)



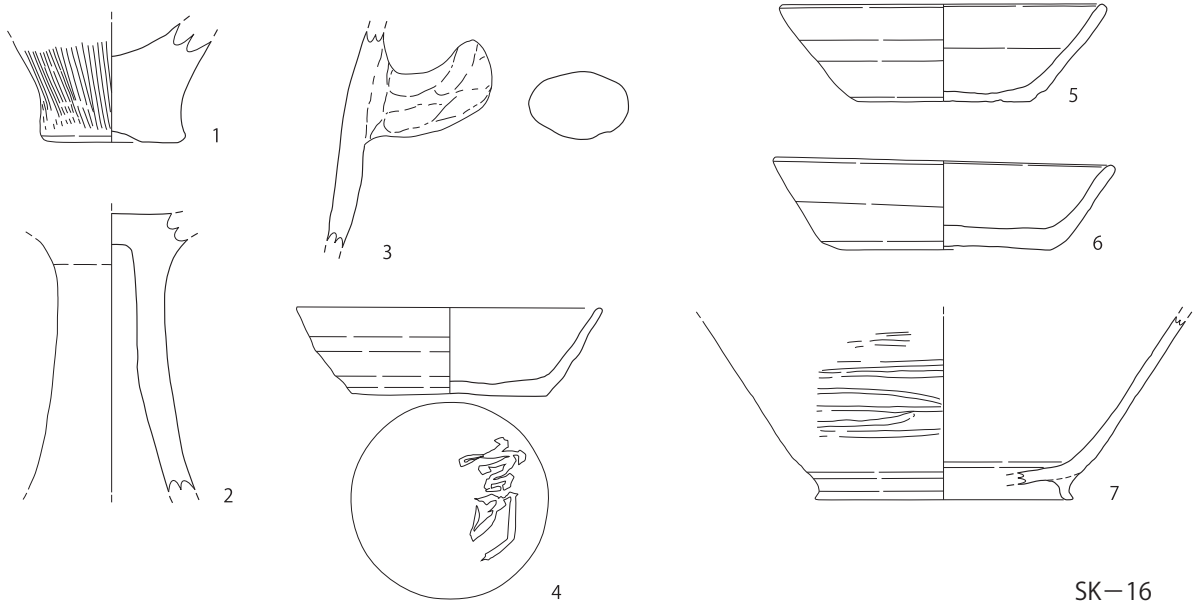
第9图 SK-1 出土遺物実測図① (1/3)



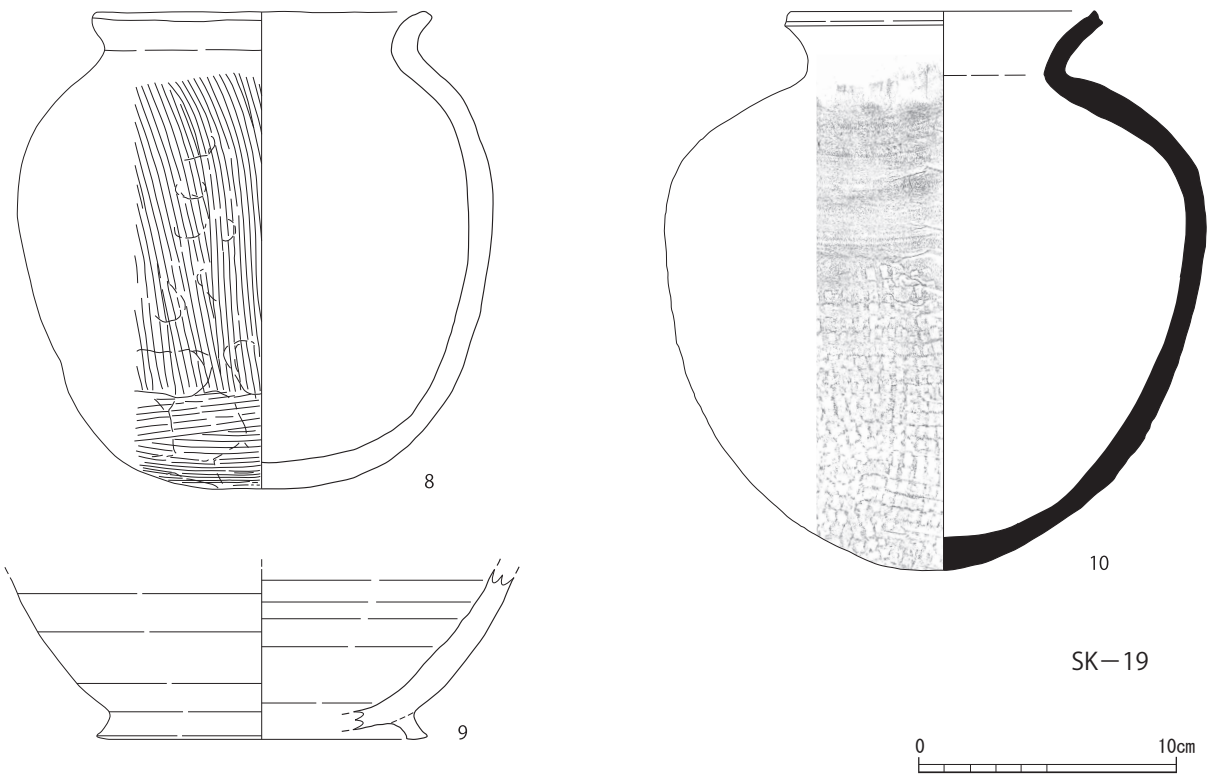
第10図 SK-1 出土遺物実測図② (1/3)

ある。16は半球形状の器形となる鉢。内面、外面にナデを施す。17は扁平な胴部で肩が張り、口縁部が外側に緩やかに外反しながら開く。口縁端部は四角くおさめる。口縁部はハケ目後横ナデ、体部は内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。

18～30は土師器小皿で底部は全て糸切りである。口径8.2cm～10.6cm。23と24は同一個体である。26は内面に油煤が付着する。31から36は土師器坏で、糸切り底。口径13.4cm～17.0cm。31は体部が直線的に開く。36は内面に油煤が付着する。37は瓦質焼成の火鉢で、体部はあまり開かず直線的に延び、口縁端部は若干肥厚し端部は明瞭な面をなす。外面は横ヘラ磨き、内面はナデが施され、また煤の付着とみられる黒色部分がある。外面には花文を印刻する。38は青磁鉢である。体部はわずかに内湾しながら開き、口縁部は短く強く外折する。外面下半は横ヘラ削り、外面上半から内面は横ナデを行い、内面上部には一条のクシ目が施される。39は白磁皿の底部で、見込みに唐草の文様を施文する。



SK-16



SK-19

0 10cm

第11図 SK-16・19 出土遺物実測図(1/3)

SK-16 (第8図)

調査区南東に位置する土坑である。長軸140cm×短軸70cmの長楕円形で、深さ60cmである。壁の立ち上がりは急角度で、底面はほぼ水平である。埋土は暗茶褐色で、底部直上から第11図4の墨書土器が出土。

出土遺物(図版17、第11図1~7)

1は弥生土器甕である。底部は厚い上げ底で、外面はハケ目を施す。

2は土師器高坏で、内面、外面にナデを施す。3は土師器甕の把手である。指成形時の痕跡が明瞭に残る。4~6は土師器坏である。4はSK-16床面直上より出土。外面に「宮頭」の文字を墨書する。内面には全体の1/5程度油煤が付着する。5は剥離が激しいため調整は不明である。6の底部は回転ヘラ切りが施される。7は土師器鉢である。体部は直線的に開き、高台部は細く

外側に開いた形状となる。外面には横方向のヘラ磨きが施される。

SK-19

出土遺物 (図版 17、第 11 図 8～10)

8 は土師器甕で、口縁部は短く外反する。胴部はやや肩が張って丸みのある器形である。内面横ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。9 は陶器壺で、高台部は外側に開いた形状となる。外面は灰釉を施釉し高台内から畳付けにかけては露胎。10 は須恵器甕で、頸部の屈曲は強く、口縁部は直線的に大きく開く。胴部はかなり肩が張った器形となる。外面は格子タタキが施され、内面は同心円当て具痕が認められる。

SK-26 (図版 3、第 12 図)

調査区南側の中央に位置する土坑である。長軸 190cm × 短軸 130cm の不定形で、最深の深さは 150cm である。壁の立ち上がりは垂直に近い。西側から東側にかけて 2 段のテラス部が認められるが、東側の楕円形の土坑を西側の円形の土坑が切ったものと考えられる。埋土は暗茶褐色土である。

出土遺物 (図版 18、第 13 図 1～12)

1～8 は弥生土器である。1～3 は壺の底部である。1 は外面に縦位の磨きが残る。4 は鋤先口縁となる甕の口縁部。5～7 は甕の底部である。8 は鉢で、端部が丸く平底となる底部である。外面及び内面はナデ調整が施される。9 は土師器甌の牛角状の把手である。10 は瓦器塚で、下位部のみが残存する。断面三角形の高台が貼付され、横位の磨きが残る。11 は陶器皿で、見込みには非常に小さな目跡が 4ヶ所あり、重ね焼の痕跡とみることができる。12 は陶器壺で、口縁部は短い鋤先状を呈す。頸部は寸詰まりとなり短く目立たない。外面に施釉。

SK-30 (図版 3、第 12 図)

調査区南西に位置する土坑である。長軸 90cm × 短軸 80cm の円形で、深さ 40cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、底部にはテラス部が認められる。埋土は暗茶褐色土で、遺物は弥生土器が多く出土する。

出土遺物 (図版 18、第 13 図 13～15)

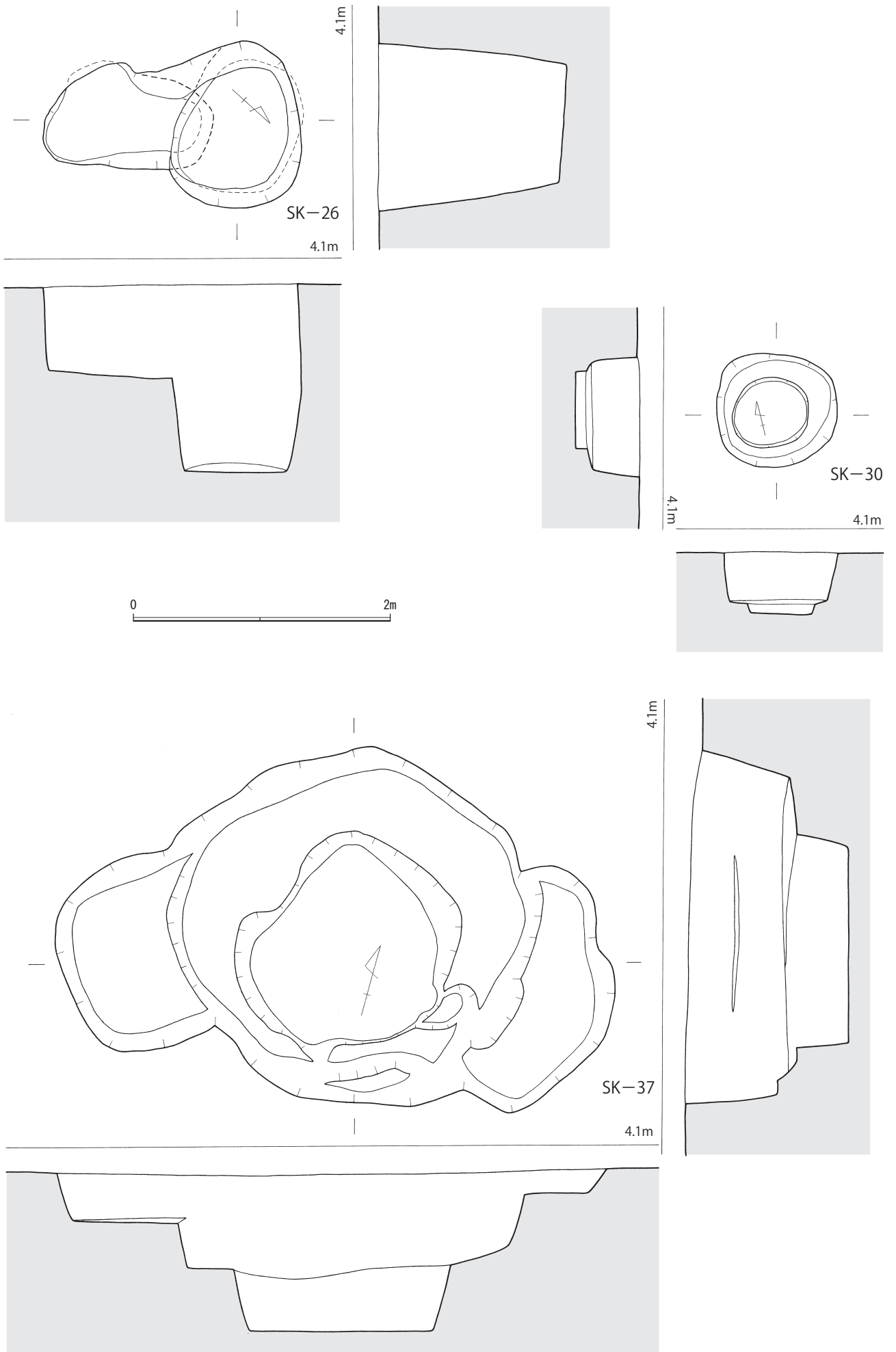
13～15 は弥生土器である。13 は内面ナデ、外面ハケ目を行う。14・15 は甕の口縁部である。14 はほぼ水平に伸びる鋤先口縁で内面にもわずかに突出する。15 はくの字口縁。

SK-37 (図版 2・4、第 12 図)

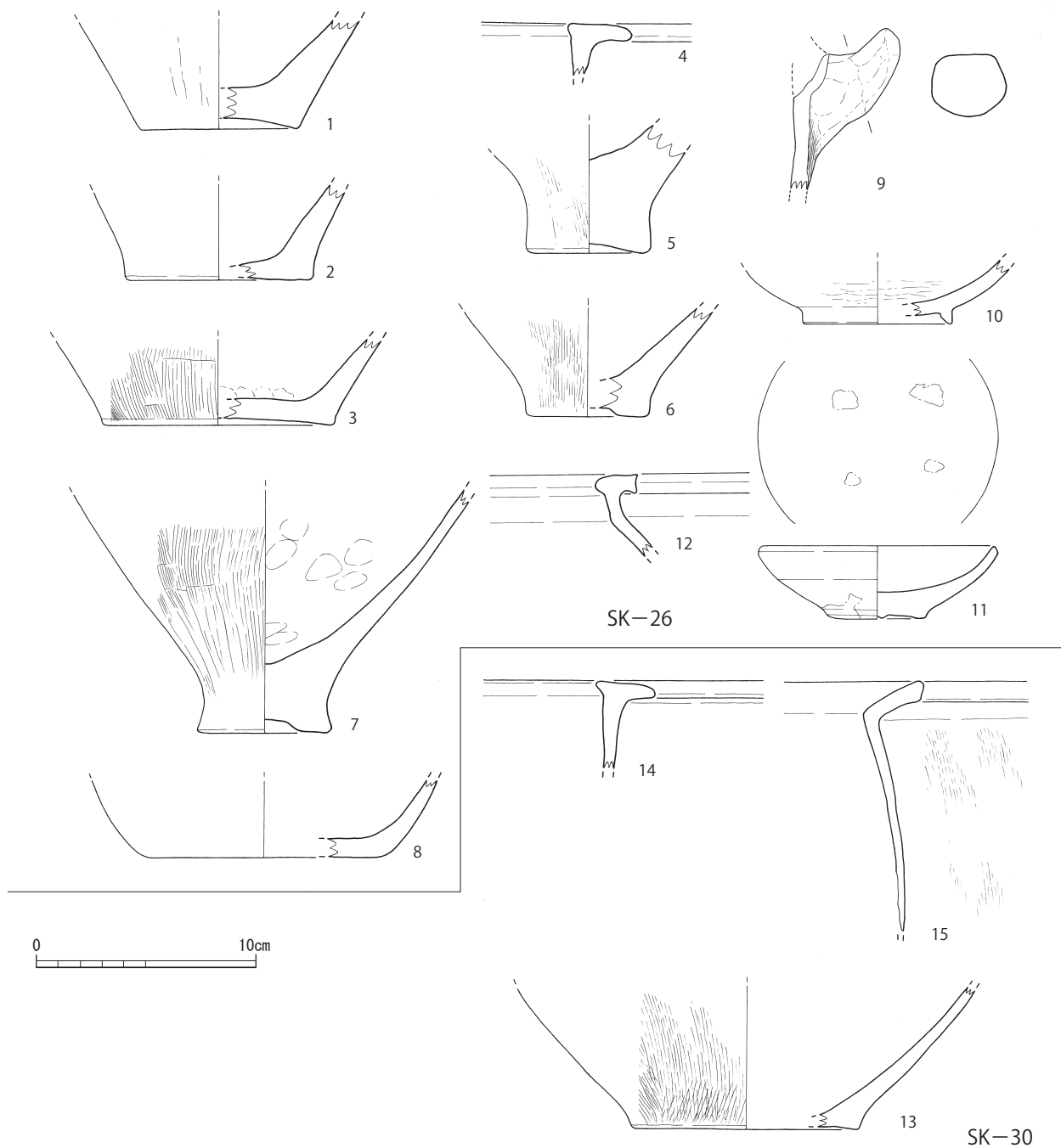
調査区中央に位置し、SK-1 の西側に位置する土坑である。長軸 420cm × 短軸 270cm の不定形で、深さ 120cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、東と西に 2 段のテラス部が認められるが、恐らく本来は径 270cm 程度の円形の土坑であろう。埋土は上層が黒色土で、下層に向かって灰色土になる。

出土遺物 (図版 18、第 14・15 図)

1～25 は弥生土器である。1 と 2 は口縁部が素口縁となる壺である。2 は内面に横位のヘラ磨

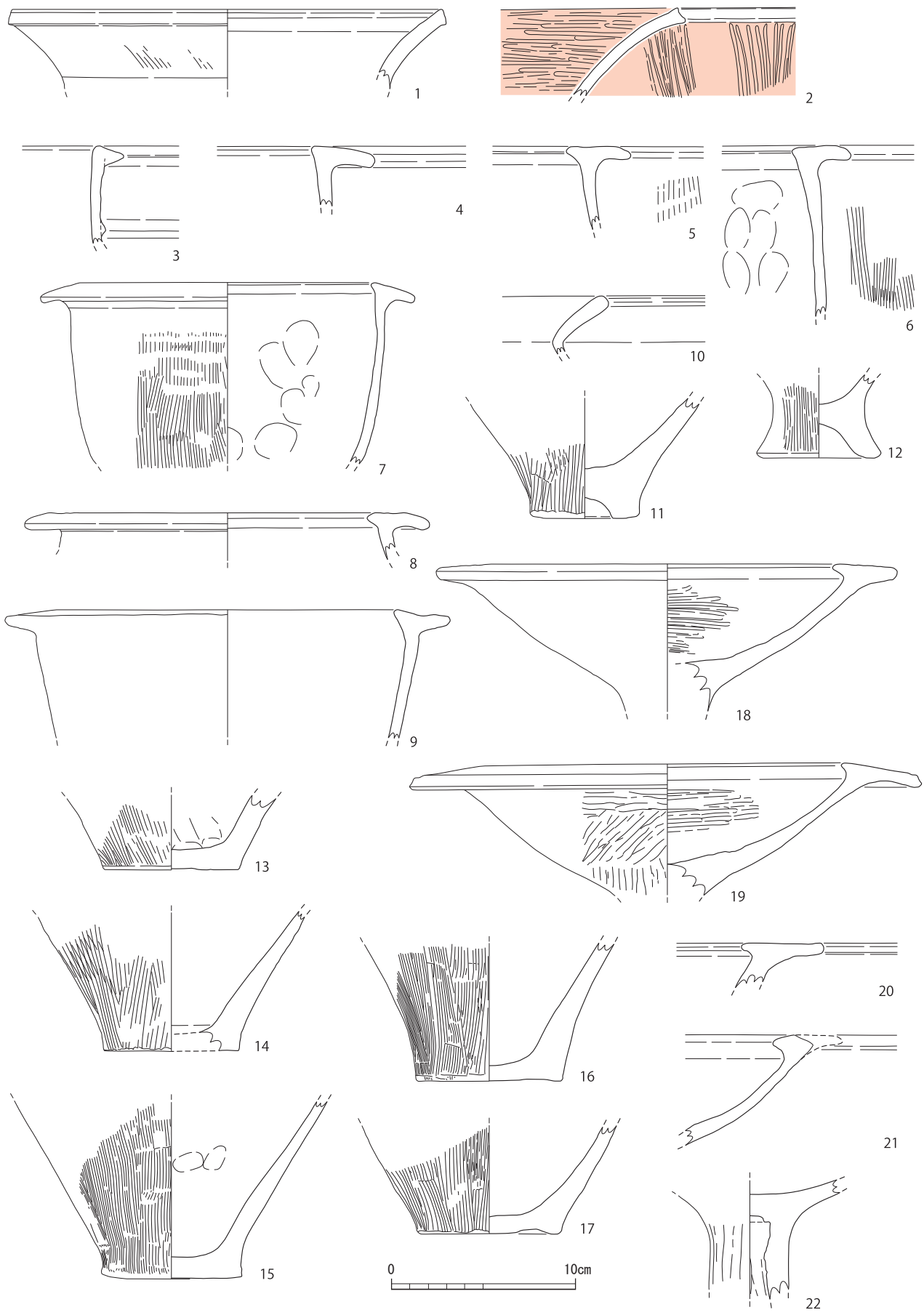


第 12 図 SK-26・30・37 実測図 (1/40)

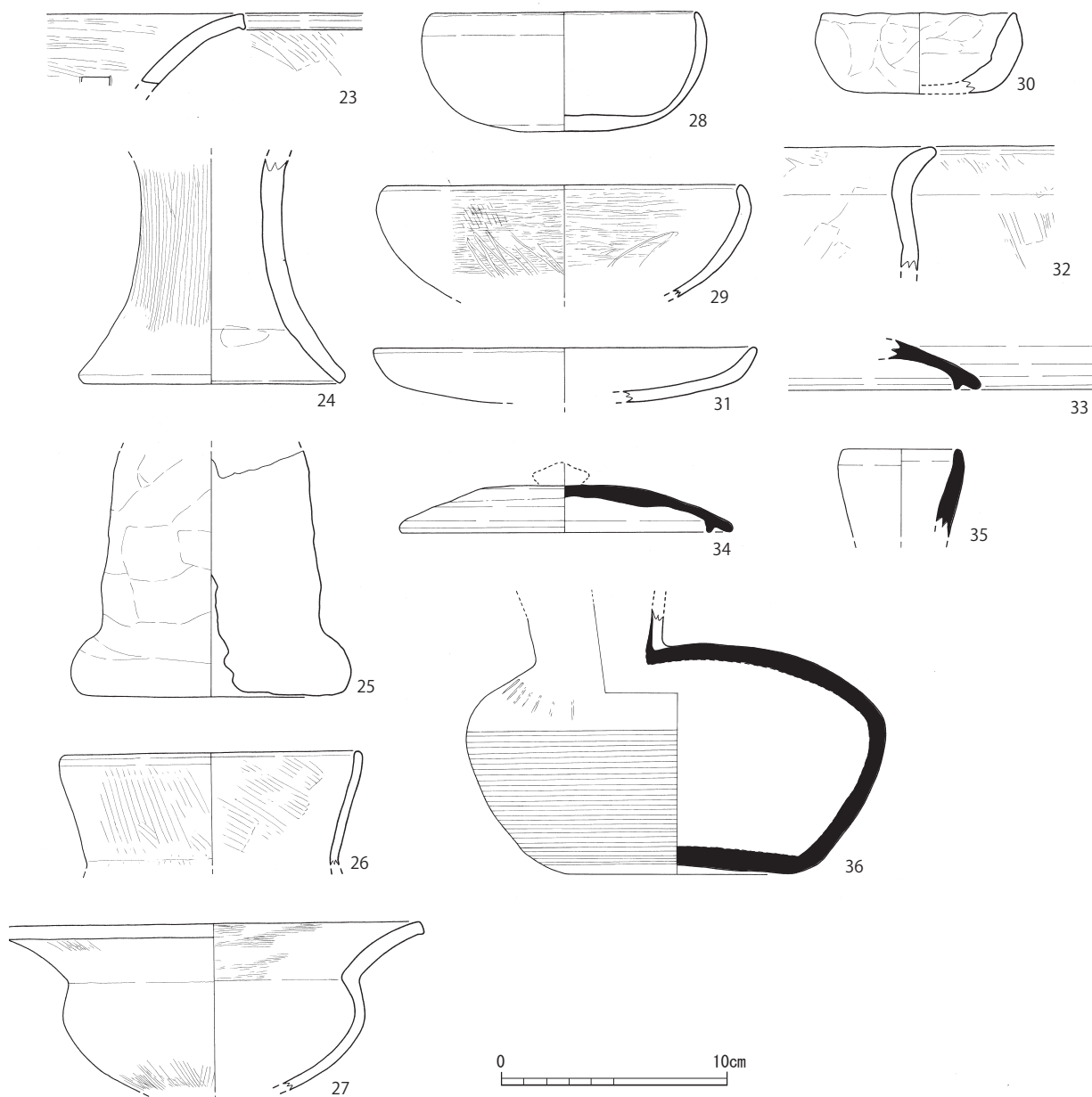


第13図 SK-26・30 出土遺物実測図(1/3)

き、外面に縦方向の暗文を施す。内外面丹塗りをを行う。3～17は甕である。3は口縁部が三角形を呈す亀甲系の甕である。口縁部下には三角突帯を巡らせる。4～8は、鋤先口縁となる口縁部。5、9はT字に近い形状で端部は外傾する。10の口縁部は屈曲して外反気味に延びて開き、端部は丸く収められる。11～17は底部片。11は上げ底の厚い底部をもち、外面はハケ目調整を施しているが摩滅しておりやや不明瞭。12は脚台状になる。13～15の底面は平底。14、16



第 14 图 SK-37 出土遗物实测图① (1/3)



第15図 SK-37 出土遺物実測図② (1/3)

は内面に黒色部分がある。17は平底で底部の器壁が薄い。外面ハケ目調整で内面には指圧痕が残る。18～22は高坏である。18～20は鋤先口縁となる。19は口縁端部が長く、外傾する。18、19の外面及び内面はヘラ磨きによる調整が施されている。21は外端部が接合面で剥離しているが18～20同様の鋤先口縁の可能性が高い。22は脚部上部から坏部底部が残存しており、脚部外面は磨耗しているが、ハケ目調整が確認できる。23、24は器台で、23は口縁部の下に方形の透かし孔が確認できる。外面及び内面はハケ目後横ナデによる調整が施される。24は外面にハケ目調整、内面にナデによる調整を施す。25は指整形の支脚で、上部は欠損する。底部にかけて脚部が外反し端部は丸身を帯びる。

26～32は土師器である。26は壺で、口縁部が直上に伸び外面及び内面にハケ目調整が施される。27は高坏で、下半が扁球形に近く、口縁部は屈曲して外側へ直線的にのびる。28、29は土

師器塚である。28は平底気味で口縁部が直上に立ちあがる。ナデ調整を行う。29は口縁部がわずかに内湾する。内外面とも丁寧な磨きを行う。30は手づくねによるものである。31は土師器皿で、外面及び内面にナデによる調整が施される。32は甕で、口頸部で内面に削りを施す。

33、34は小さなかえりのある須恵器坏蓋で、口縁部は丸みをもって収められる。34には欠損したつまみの付された痕跡が残存部の端にある。35、36は須恵器平瓶で、35は口縁部のみの残存。36は頸部下に列点文が施文され、外面下半はカキ目が施される。

SK-51 (図版4、第16図)

調査区南東に位置する土坑である。長軸170cm×短軸60cmの長楕円形で、深さ100cmである。壁の立ち上がりは、西側壁面が直線的な急傾斜を呈し、東側の壁面は深さ30cmのところで屈曲し、急傾斜で底面へと続く。南北の壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。底部付近より第17図2の土師器高坏が出土。

出土遺物 (図版19、第17図1～3)

1は土師器甕で、頸部の屈曲は緩やかで短い口縁部は外反する。胴部はやや張って丸みのある器形である。2は須恵器を模倣した土師器高坏で、坏部の段から上の口縁部が短い。外面及び内面に回転ナデ調整が施される。3は弥生土器甕で、鋤先口縁となる口縁部。

SK-79 (第16図)

調査区中央の南側に位置する土坑である。長軸200cm×短軸130cmの不整長楕円形で、深さ20cmである。壁の立ち上がりは非常に緩やかで、東西にテラス部が認められる。

SK-83 (図版4、第16図)

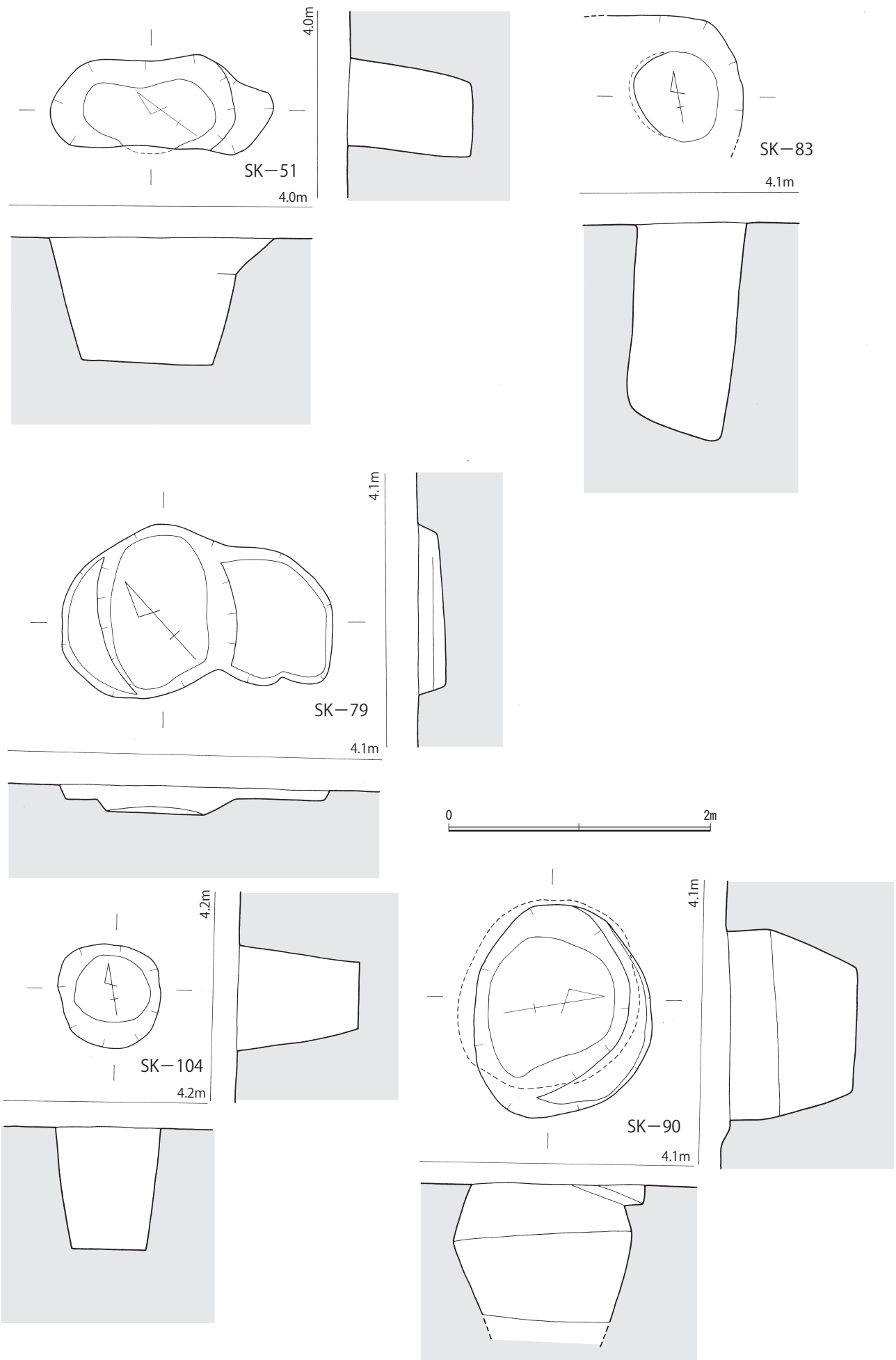
調査区中央に位置しSD-161を切る土坑である。長軸90cm×短軸70cmの円形で、深さ160cm、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は上層が暗灰茶色で、下層に向かって灰色土となる。

出土遺物 (図版18、第17図4～18)

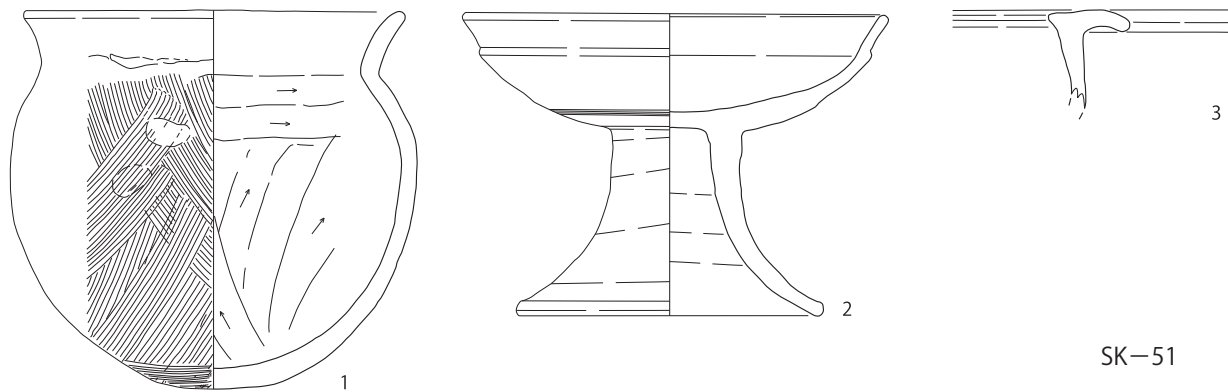
4は弥生土器の小型脚付壺で、口縁部は欠損する。胴部は扁球状となる。脚部は直線的に開き端部が外折する。外面は丁寧な横ヘラ磨きが施される。外面と脚部内面には黒色顔料が塗られている。

5、6は素口縁の広口壺である。5は口縁の端部がシャープな面をなし、ハケ目原体押圧による刻目が施文される。内外面ハケ目調整。6もやはり端部が明瞭な面をなす。内面横ハケ目、外面縦ハケ目。7は弥生土器甕で、平底の底部。外面はハケ目による調整が施され、内面は摩滅しており調整は不明である。

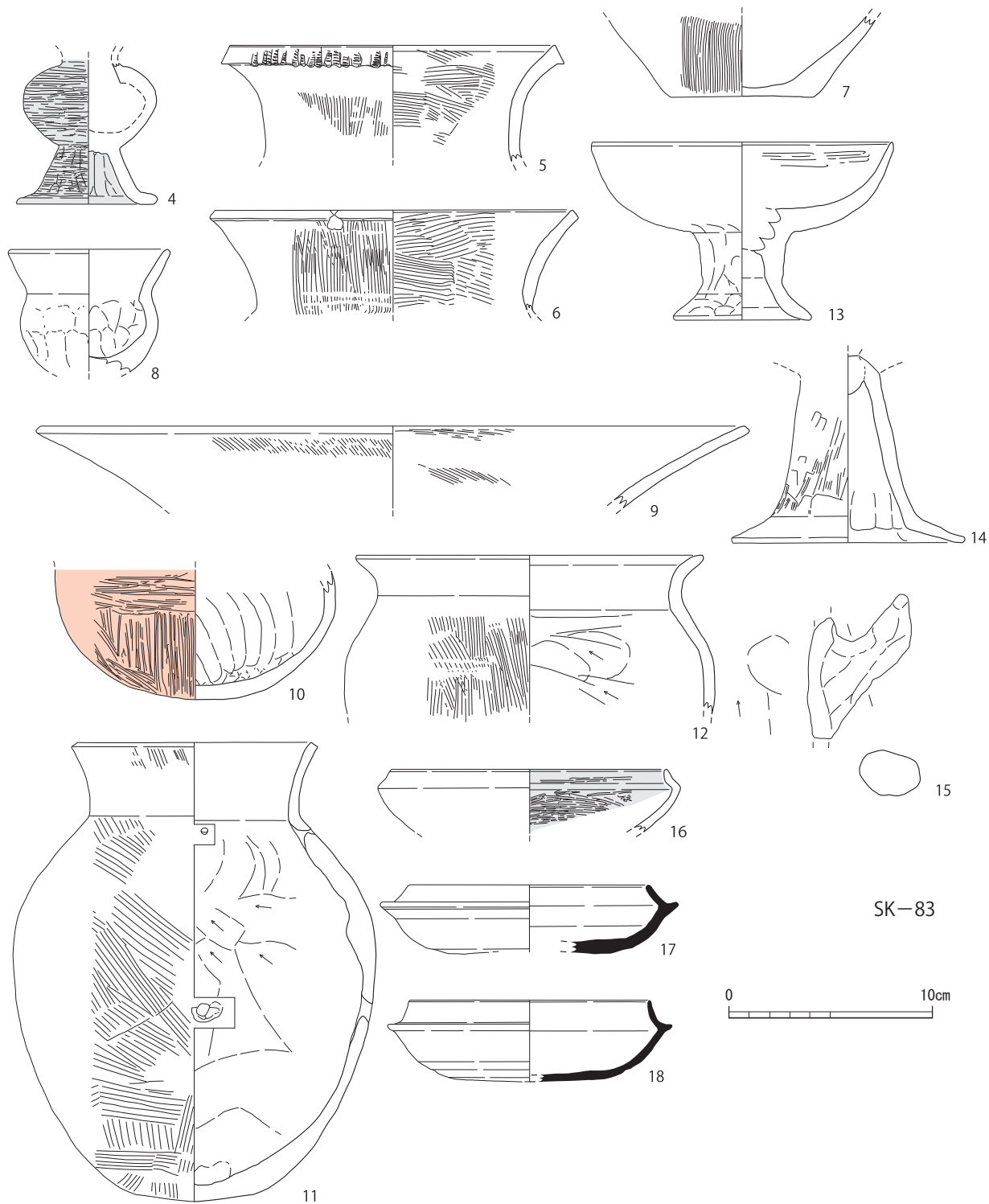
8～16は土師器である。8は雑なつくりの小型丸底壺で、外面及び内面にナデによる調整が施される。9は口縁が大きく外反する壺口縁部である。外面及び内面にハケ目が残るが摩滅しておりやや不明瞭である。10は中型の直口壺胴部である。外面にヘラ磨きによる調整が施され、内面はナデによる調整が施される。外面丹塗り。11、12は甕である。11は長胴で頸部が良く締まり、口縁部があまり開かない。頸部及び胴部下位に穿孔が施される。12は肩部が丸味を帯びた形状の甕である。口縁部は緩やかに外反する。13、14は高坏である。13は丸味を帯びた



第16図 SK-51・79・83・90・104実測図(1/40)

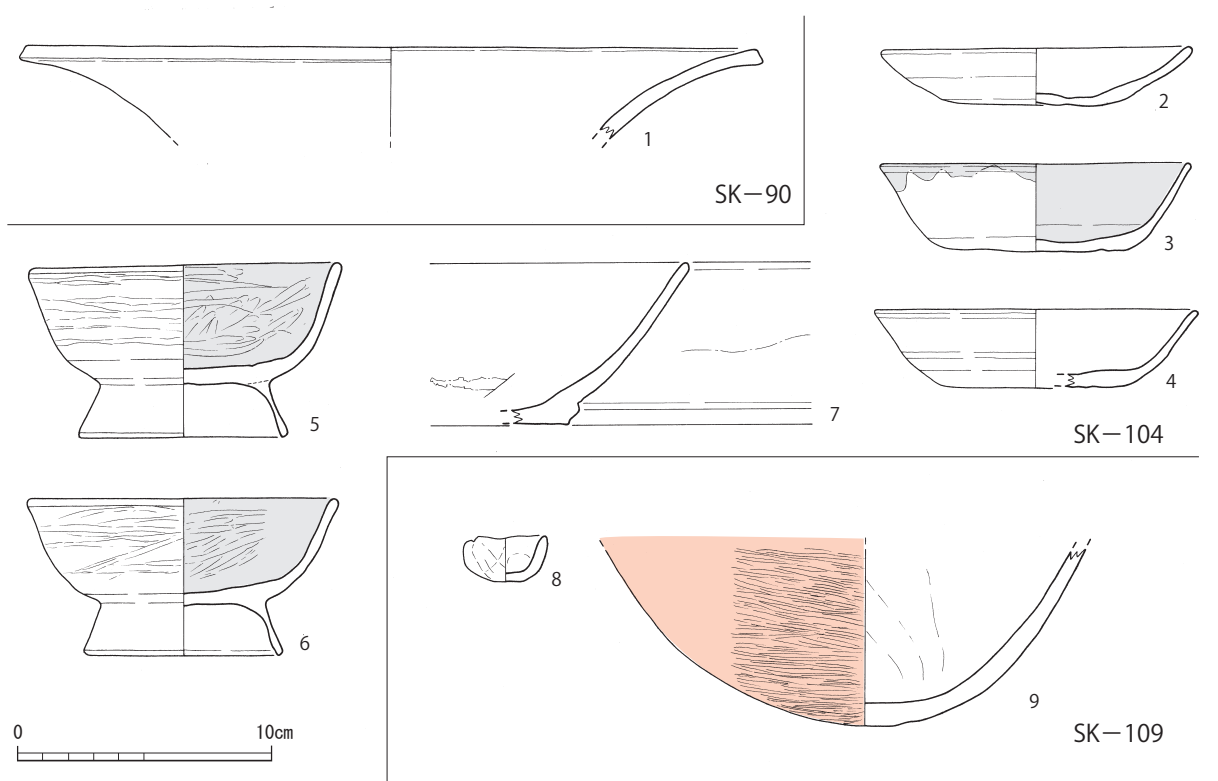


SK-51



SK-83

第17图 SK-51·83 出土遺物実測図 (1/3)



第 18 図 SK-90・104・109 出土遺物実測図 (1/3)

坏部で、脚部は短く裾はあまり開かない器形となる。坏部内面は横ヘラ磨き、脚部ナデによる調整が施される。14 は高坏の脚部で、脚柱部は緩やかに開き、裾部はくの字に屈曲して開く。外面及はハケ目による調整が施される。15 は甌の牛角状の把手で、指ナデによる調整が施される。16 は坏で、口縁部にかえりを有する模倣坏である。内面は磨き調整を行い黒塗りが施される。

17、18 は須恵器坏身である。口縁はやや短く、内傾する。体部は直線的になり、深さは厚い。17 は器壁が厚い。

SK-90 (図版 5、第 16 図)

調査区中央の南側に位置し、SK-26 の北に位置する土坑である。長軸 160cm × 短軸 130cm の円形で、深さは 120cm を超える。壁面は深さ 30cm 付近で稜をもってオーバーハングしており、そこから下は直線的に底部へと伸びている。埋土は上層が暗茶褐色土で、下層に向かって埋土の粘質が強くなる。

出土遺物 (第 18 図 1)

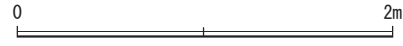
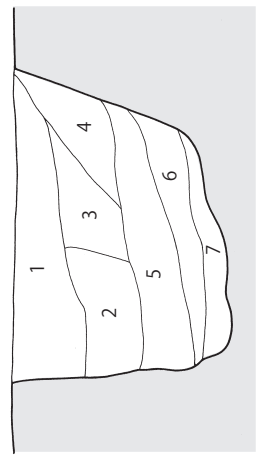
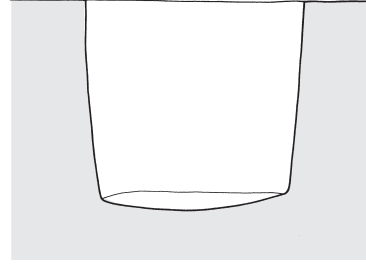
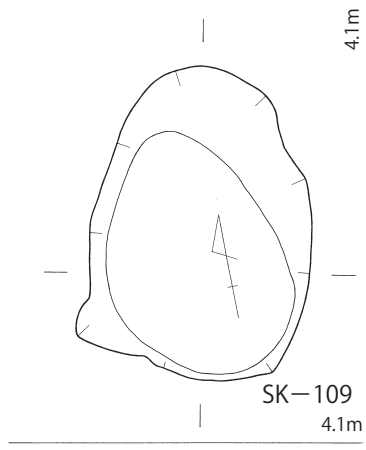
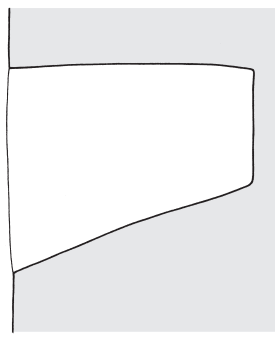
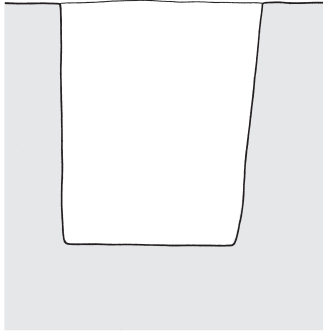
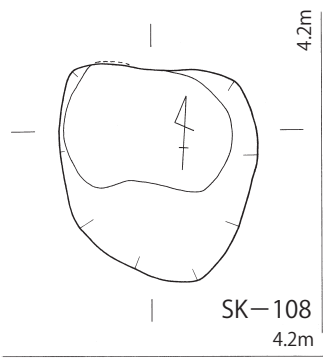
1 は弥生土器壺で、口縁が大きく外反する素口縁となる。外面及び内面にナデ調整が施される。

SK-104 (図版 5、第 16 図)

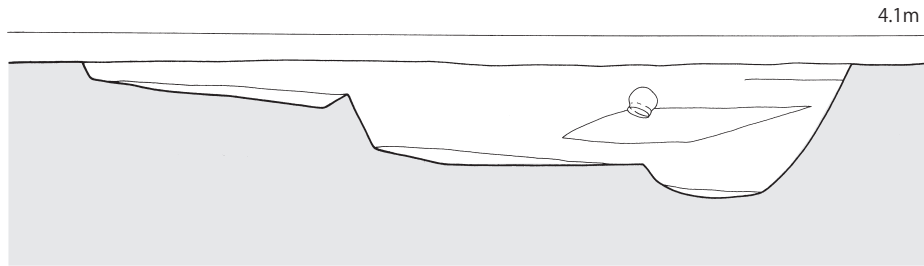
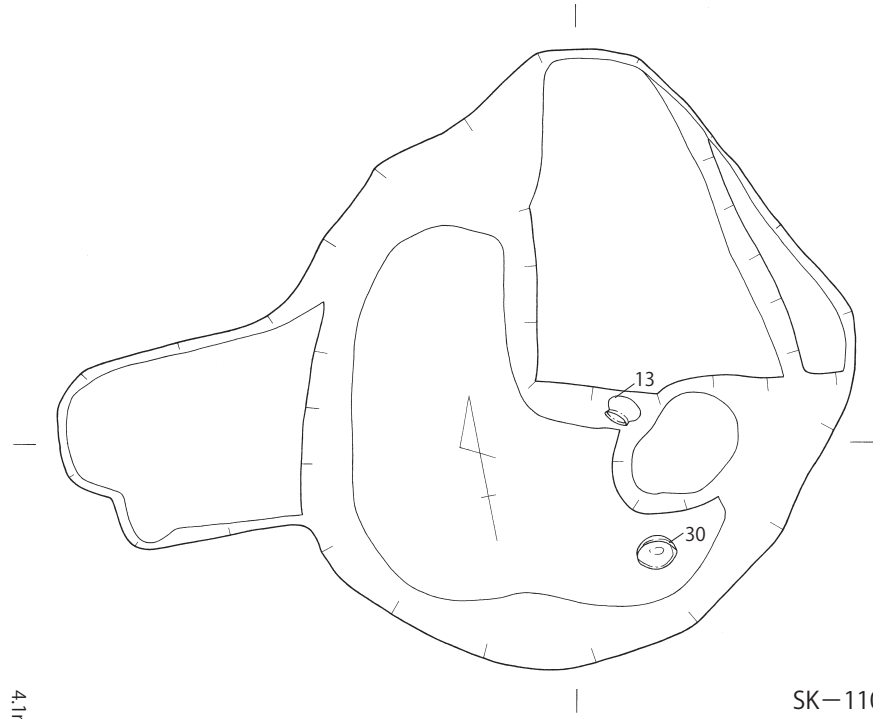
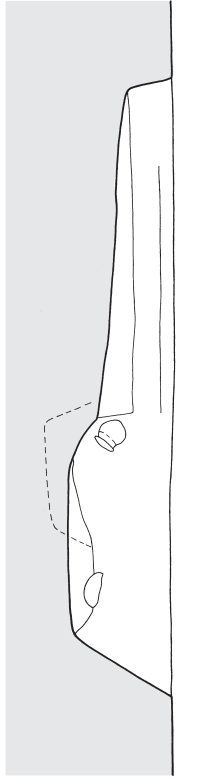
調査区南西に位置する土坑である。長軸 80cm × 短軸 80cm の円形で、深さは 90cm。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、底面は平坦である。埋土は上層が暗茶褐色土で、下層は黄色灰色土となる。

出土遺物 (図版 18、第 18 図 2~7)

2~4 は土師器坏である。底部は回転ヘラ切り、調整は回転ナデによる。2 は器高が低く器壁



- 1. 黑色粘土 有機物を含む
- 2. 褐色粘土 黒色有機物をブロック状に含む
- 3. 暗茶灰色粘土 カミの目状のブロックを含む
- 4. 暗茶色粘土 褐色の粒状のブロックを含む
- 5. 黒色粘土 褐色土のブロックを含む
- 6. 黒色粘土 カミの目状を含む
- 7. 暗茶色粘土 灰色土褐色土をブロック状に含む



第19図 SK-108・109・110 実測図 (1/40)

が薄い。3、4の体部下位はやや丸みを持って器高が高い。3は内面及び外面口縁部付近に漆が付着する。5、6は黒色土器碗である。高台は高く、内外面はヘラ磨きによる調整が施され、内面にのみ黒塗りが施される。7は陶器の鉢で、底部から口縁部にかけて外反し、器高は低い。内外面に釉が施され、外面下半は無釉である。

SK-108 (図版6、第19図)

調査区南西側に位置する土坑である。長軸110cm×短軸100cmの不整円形で、深さ128cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、南側が若干緩傾斜となる。埋土は暗茶褐色粘土。

SK-109 (図版6、第19図)

調査区中央の北側に位置する土坑である。長軸170cm×短軸120cmの楕円形で、深さ110cmである。壁の立ち上がりは垂直に近く、北東側が若干緩傾斜となる。埋土は上層が暗茶褐色粘土で下層は黒色土となる。下層には牡蠣の殻を多く含む。

出土遺物 (第18図8・9)

8は手づくねによる小型鉢である。9は丸底の土師器壺で、外面は磨きによる調整が施され赤色顔料が塗布される。内面は、ナデによる調整が施される。

SK-110 (図版7、第19図)

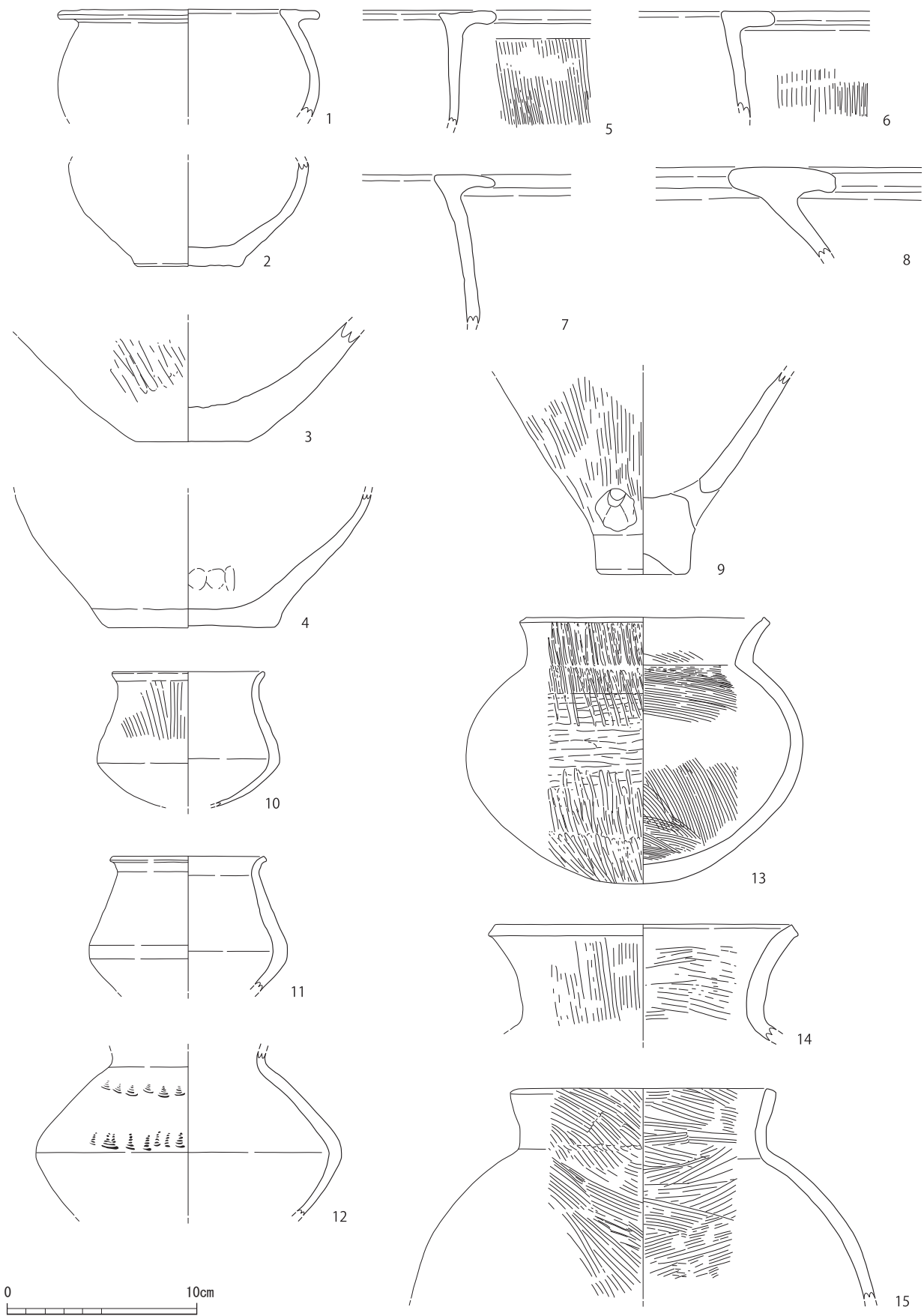
調査区中央に位置し、SK-109の北側に位置する土坑である。長軸400cm×短軸330cmの不定形で、東側がピット状に深くなっており、ここまでの深さは70cmである。西側はテラス状に高くなる。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土は上層が暗茶褐色粘土で、下層に向かって灰色土となり粘質が強くなる。

出土遺物 (図版19、第20、21図)

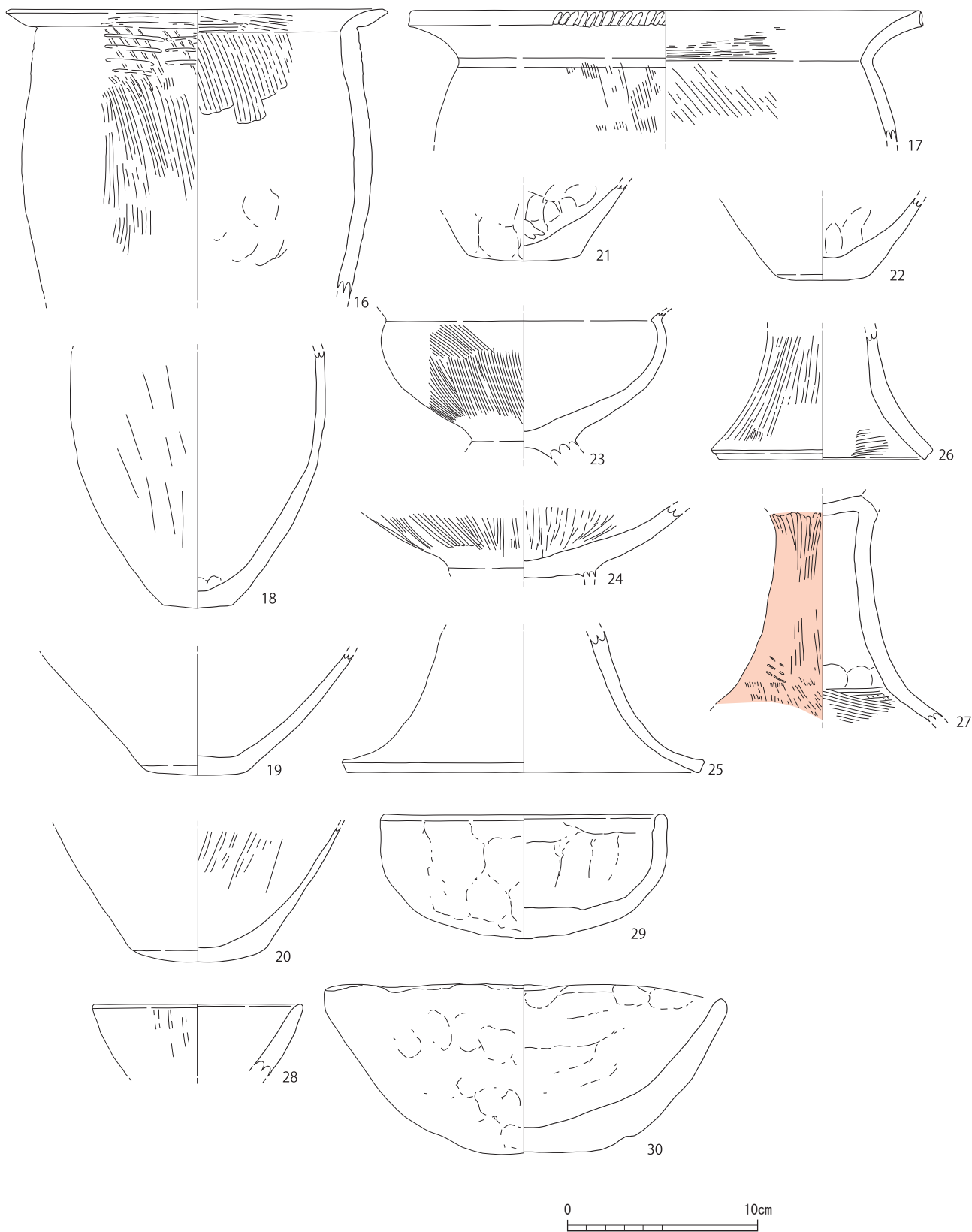
1～9は弥生中期の土器である。1、2は丸味を帯びた胴部となる無頸壺である。口縁部は水平に開く鋤先口縁となる。2～4は壺底部片。3は外面に斜方向のヘラ磨きが残る。4は外面の摩滅が著しく調整不明。5～9は甕である。5～7は短い鋤先口縁となる。9は上げ底の厚い底部をもち、外面はハケ目調整を施し、底部付近に黒斑がある。底部より若干上がった位置に外面からの穿孔を伴う。

10～30は土師器である。10～15は壺。10、11は胴部の最大径が中位より若干下にあって不明瞭な稜をなし、頸部があまり締まらない巾着形の短頸壺で、口縁部は短くゆるやかに外反する。外面はハケ目後ナデ、内面は横ナデによる調整が施される。12は算盤玉状の胴部となる長頸壺の胴部で、外面に櫛描の円弧文が廻る。13～15は短頸壺である。13は、短い口縁部がわずかに外側に開き、端部はシャープな面をなす。胴部は扁平で強く肩が張った器形となる。外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整が施される。14は、やや長い口縁が外反し頸部で緩やかに屈曲する。外面はハケ目、内面は横ハケ目による調整が施される。15は、口縁部があまり開かず、肩があまり張らない器形となる。内外面ハケ目による調整が施され、外面肩部には黒斑が認められる。

16～22は甕である。16は長胴で口縁部は短く外折する。外面は縦ハケ目による調整が施さ



第 20 图 SK-110 出土遺物実測図① (1/3)



第21図 SK-110 出土遺物実測図② (1/3)

れ、頸部下には先行する横タタキ目が残る。内面はハケ目後にナデによる調整が施される。17は頸部が明瞭な稜を有して屈曲し、口縁部は外反しながら開く。口唇部にはキザミを施す。内外面ともハケ目がみられる。18～22はレンズ状の底部を有する。18は長胴の甕下半部である。外面には縦方向のヘラナデが認められる。19～22はナデ調整を行う。23、24は脚付鉢である。

23は坏部が丸味を帯びた堦型で、口縁部との境目には明瞭な稜を有す。脚部は大きく開くようである。調整は内面ナデ、外面ハケ目。24は内面縦ヘラ磨き、外面縦ハケ目調整を行う。25～27は脚部である。26は内面裾部付近に横ハケ目、外面は全面縦ハケ目調整を行う。27の外面には磨きが施され、赤色顔料が塗布される。28～30は鉢である。28はハケ目後ナデによる調整が施される。29、30は指整形による粗製の鉢である。

SK-111 (図版7、第22図)

調査区中央の西側に位置する土坑である。長軸190cm×短軸140cmの楕円形で、深さ90cmである。北西壁面はオーバーハングしており、他の壁面は急傾斜である。南側は検出面直下にテラス部が認められる。埋土は暗茶褐色粘土。

出土遺物 (図版19・20、第23・24図)

1は弥生土器壺である。底部は平底で、内外面にナデによる調整が施される。

2～11は土師器である。2、3は土師器模倣坏で、口縁部にかえりを有する。内外面黒塗り。調整は全面ヘラ磨きを施す。4、5は丹塗を行う長頸壺で、外面には密に磨きが施される。6～11は甕である。6は肩があまり張らず口縁部は短く外反する。7、8は胴部が丸く、口縁部は緩やかに外反する。内面はヘラ削り、外面はハケ目調整。9は平底気味の底部で、口縁部はあまり外反せずに開く。10は頸部が直立気味に伸び、口縁部が大きく開く。11は肩の張りが弱い。

12～17は須恵器である。12、13は坏身。13は口縁がやや内傾気味で、器壁は薄い。体部の丸みは緩やかで深さはやや浅い。

14～16は甕である。14は口縁端部内面が丸く肥厚し、外側口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。15はやや肩が張った器形となる。口縁部はあまり湾曲せずに開く。外面格子タタキ、内面ナデ調整を行う。16は胴部最大径がやや上位にある。口縁部は緩やかに開き、端部は丸味を帯びる。胴部外面はクシ目、内面はナデによる調整が施される。17は提瓶で、口縁部から口頸部の破片である。口縁部は直線的に開き、外面にヘラ記号が見られる。

SK-116 (第22図)

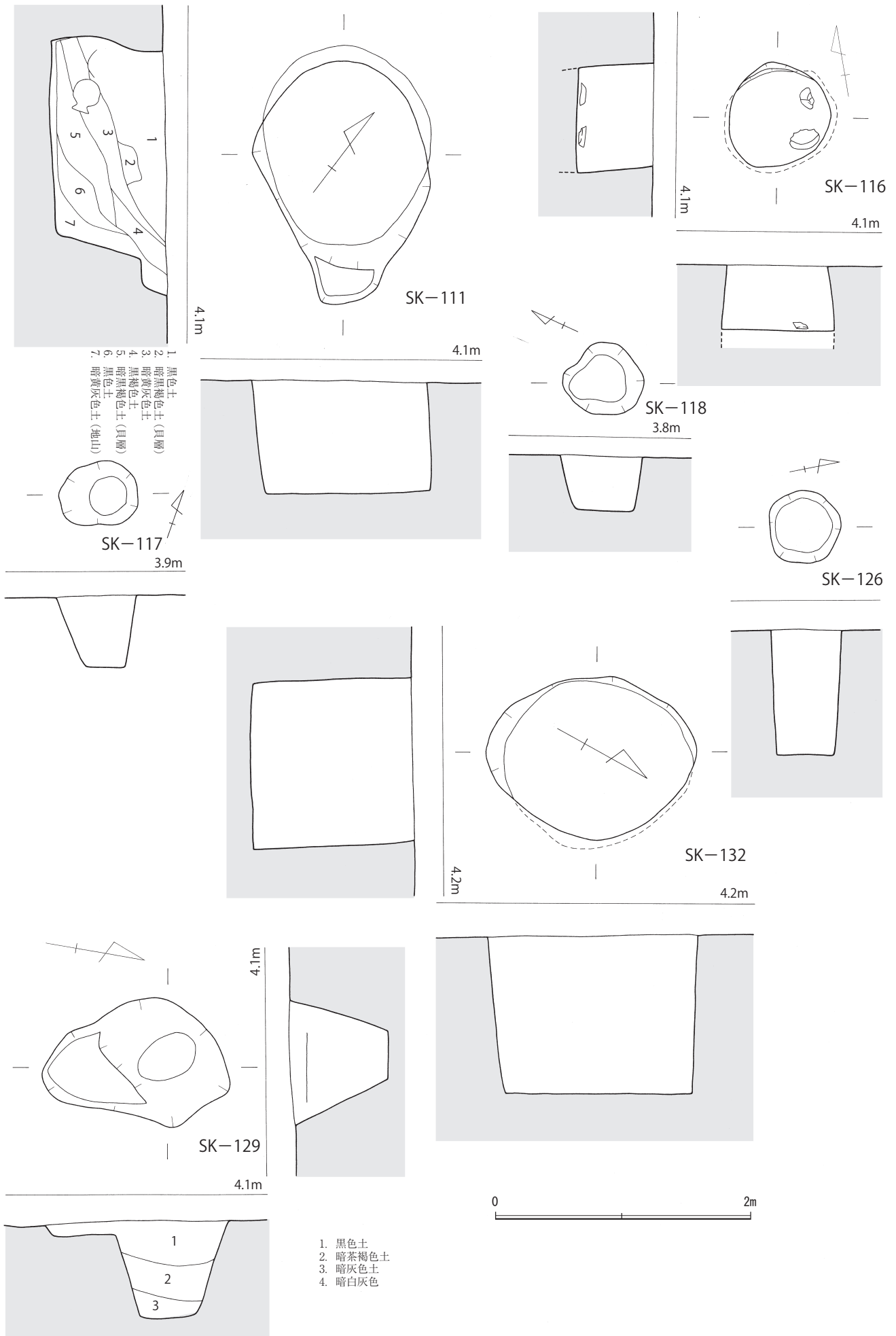
調査区南西にあり、SK-30の南西に位置する土坑である。長軸80cm×短軸80cmの円形で、深さ60cmを超える。埋土は暗灰色土で、底面からは25図1の土師器皿が出土。

出土遺物 (図版20、第25図1～3)

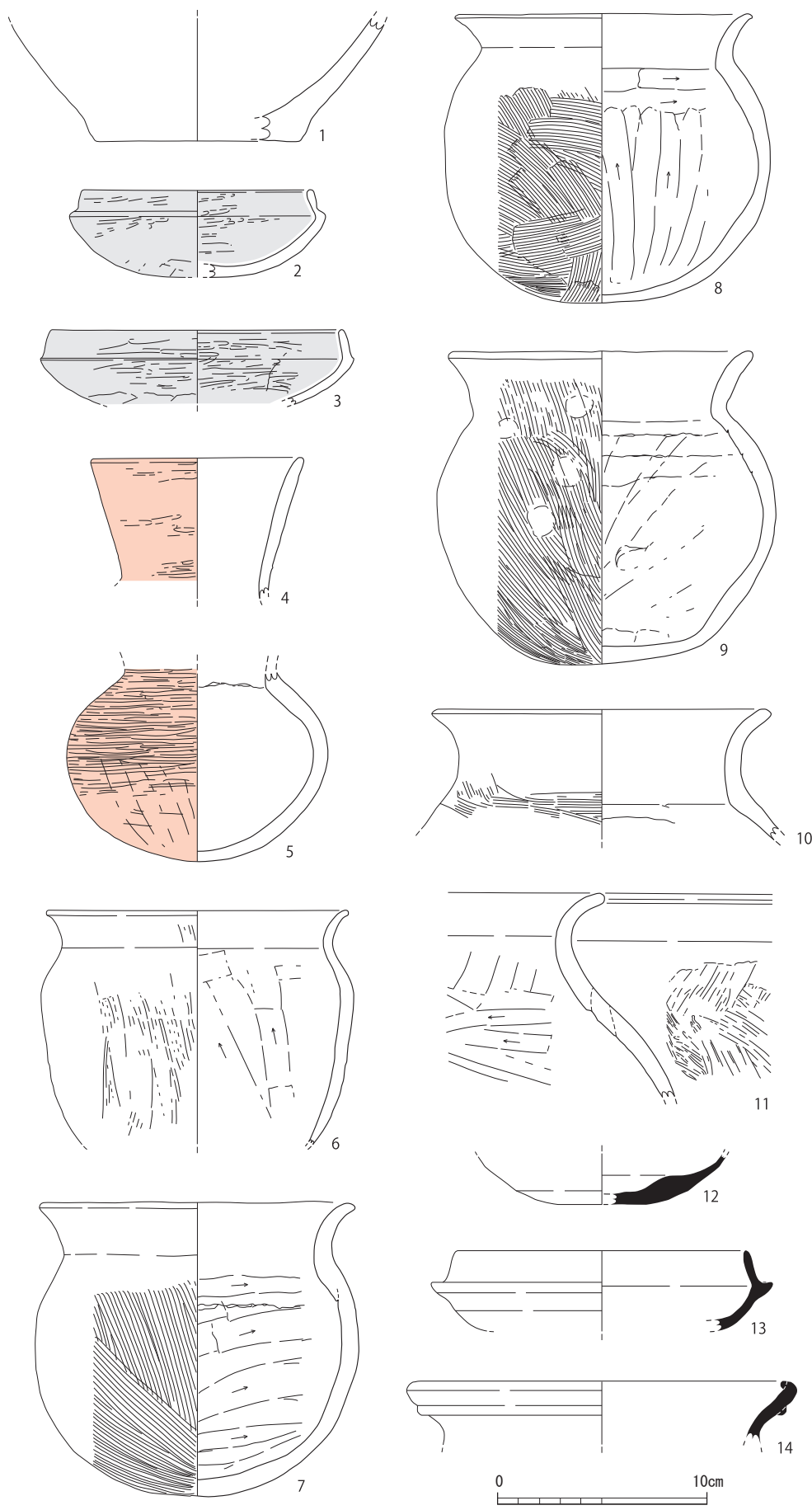
1は土師器皿である。底部はヘラ切り後に静止ナデを行う。体部はわずかに内湾し、大きく開く。内面に一条の沈線を施す。2は瓦質土器火鉢で、体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して内側へ短く伸びる。底部は3ヶ所に脚部が付される。3は陶器碗である。見込みに文様を描くが不明瞭である。

SK-117 (第22図)

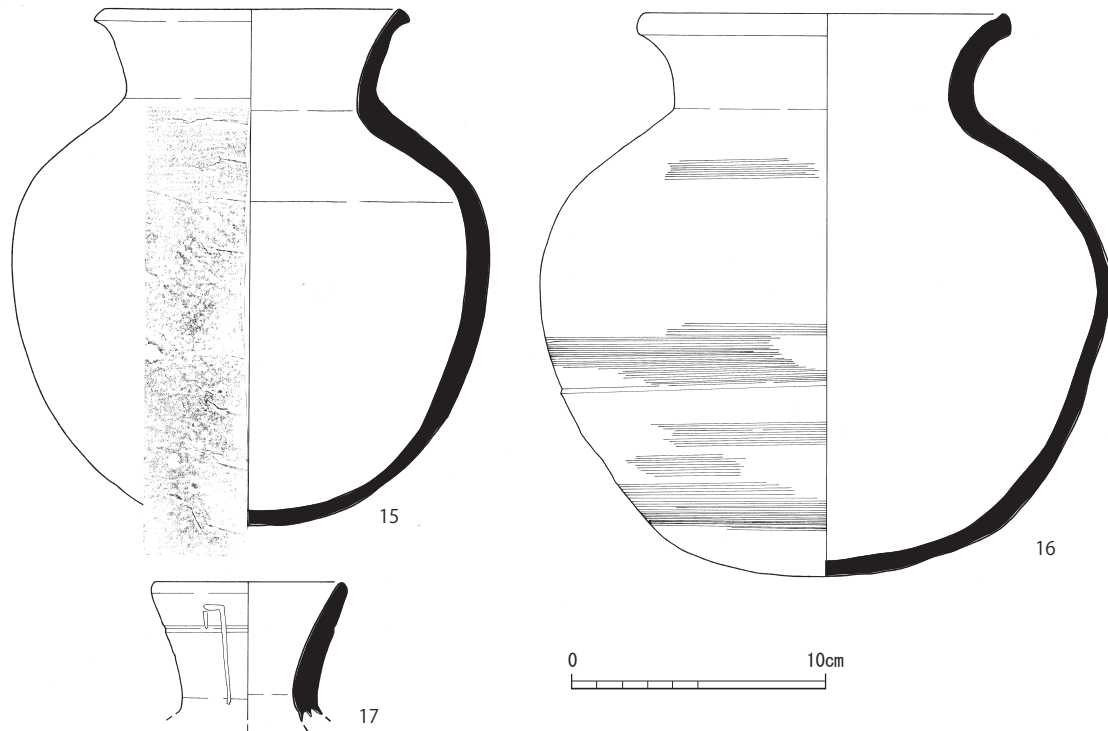
調査区南東に位置する土坑である。長軸60cm×短軸50cmの円形で、深さ50cmである。壁の立ち上がりは急角度である。埋土は暗灰色土である。



第 22 图 SK-111·116·117·118·126·129·132 实测图 (1/40)



第 23 图 SK-111 出土遺物実測図① (1/3)



第24図 SK-111 出土遺物実測図②(1/3)

SK-118 (第22図)

調査区南東にあり、SK-117の南側に位置する土坑である。長軸60cm×短軸50cmの円形で、深さ40cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土は暗灰色土である。

SK-126 (第22図)

調査区南東にあり、SK-118の南側に位置する土坑である。長軸60cm×短軸50cmの円形で、深さは100cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土は暗灰色土である。

出土遺物 (図版20、第25図4)

4は瓦器塊である。稜の鋭い断面台形の低い高台が貼付され、内外面に横位の磨きが残る。

SK-129 (第22図)

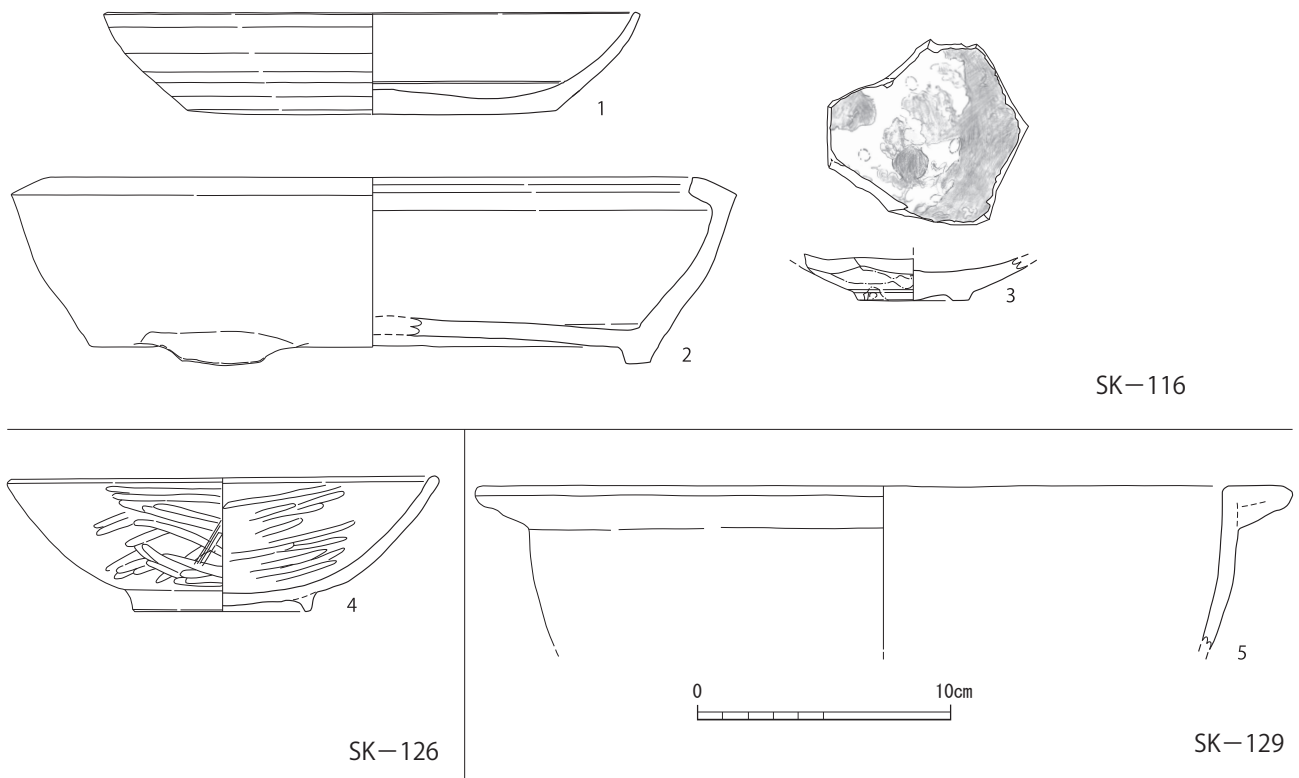
調査区中央の南西側に位置する土坑である。長軸140cm×短軸100cmの不整形で、深さ80cmである。壁の立ち上がりは比較的急傾斜で、南に幅広のテラス部が認められる。埋土は上層が黒色土、下層は黄灰色土である。

出土遺物 (第25図5)

5は弥生土器甕の口縁部である。断面が厚い三角形の口縁となる。内外面横ナデ調整を行う。

SK-132 (図版8、第22図)

調査区西側に位置する土坑である。長軸160cm×短軸130cmの楕円形で、深さ120cmであ



第 25 図 SK-116・126・129 出土遺物実測図 (1/3)

る。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土は黒色土である。

出土遺物 (図版 20、第 26 図 1~20)

1、2 は弥生土器甕である。平底の底部となる。

3~7 は土師器である。3、4 は底部糸切りの土師器皿。5~7 は土師器坏で、5 は深い器形となる。6、7 は糸切り底で同一個体である。

8~10 は瓦器埴で、8 の内面には横位の磨きが残る。9 は断面三角形の低い高台が貼付される。10 は断面台形の高台を貼付する。

11、12 は陶器である。11 は瀬戸系陶器甕で、口縁部外面に櫛状工具による波状文を施す。12 は陶器碗で、高い高台を有する。

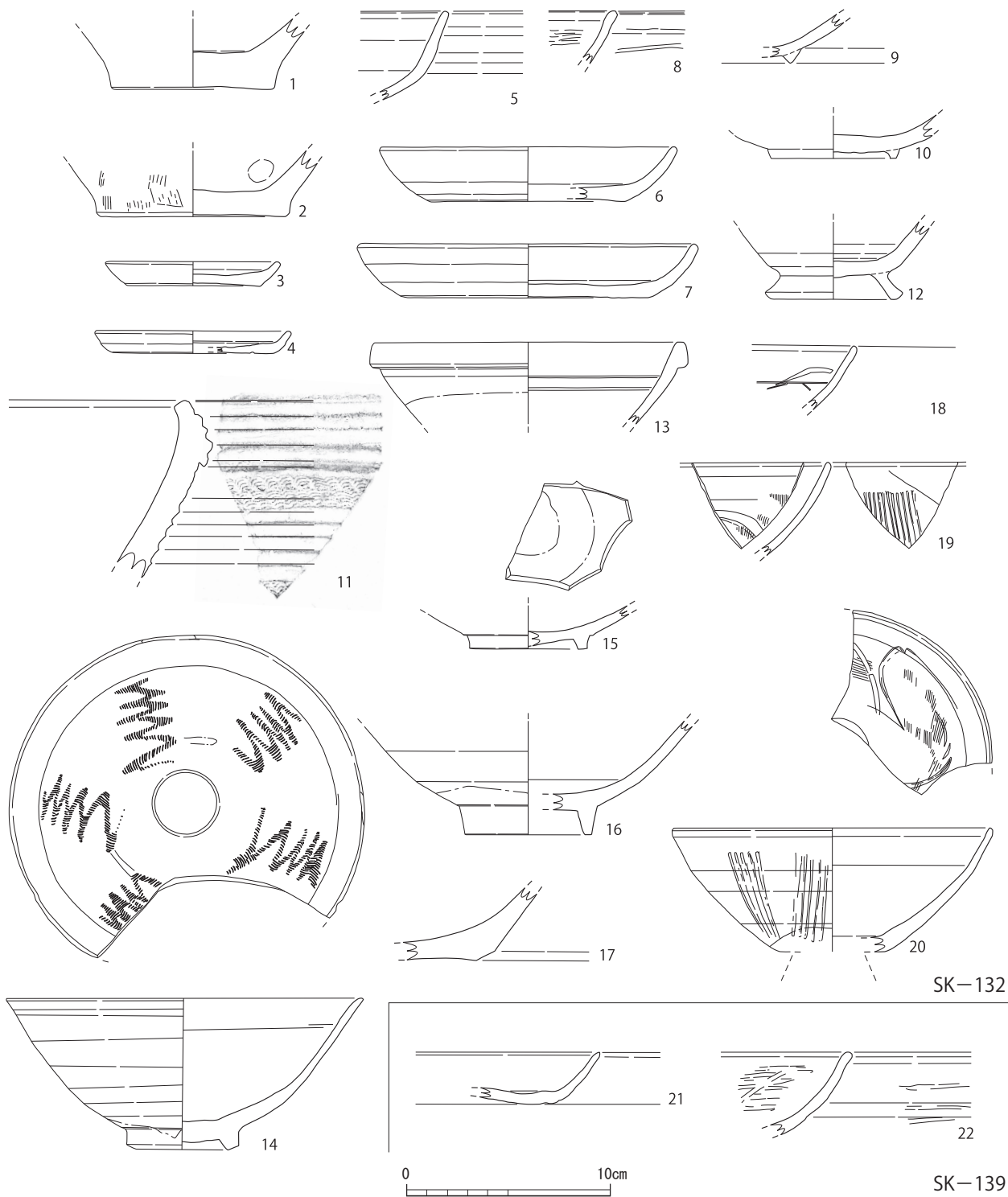
13~20 は磁器である。13~16 は白磁碗。13 は口縁部が肉厚な玉縁で器壁は厚く、内外面にヘラ削りを施す。14、15 の高台部外面は直に、内面は斜めに削る。体部は内湾し丸味を帯びている。体部外面口縁部以下は削りの際の稜線が明瞭に残る。14 は内面に櫛目による花文を描く。16 の高台は細く高く直立する。17 は白磁皿または鉢であろう。器壁が厚く大型品になると思われる。18~20 は同安窯系青磁で、外面にヘラ状の施文具による略化した花文を施す。20 は、内面底部に櫛状の施文具により花文を描く。

SK-139 (図版 8、第 27 図)

調査区中央の西側に位置する土坑である。径 100cm の円形で、深さ 110cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。西側にはテラス部が認められる。埋土は暗茶色土である。

出土遺物 (第 26 図 21・22)

21 は土師器坏で、器高は低く口縁の器壁は薄い。22 は瓦器埴で、内外面に横位の磨きが残る。



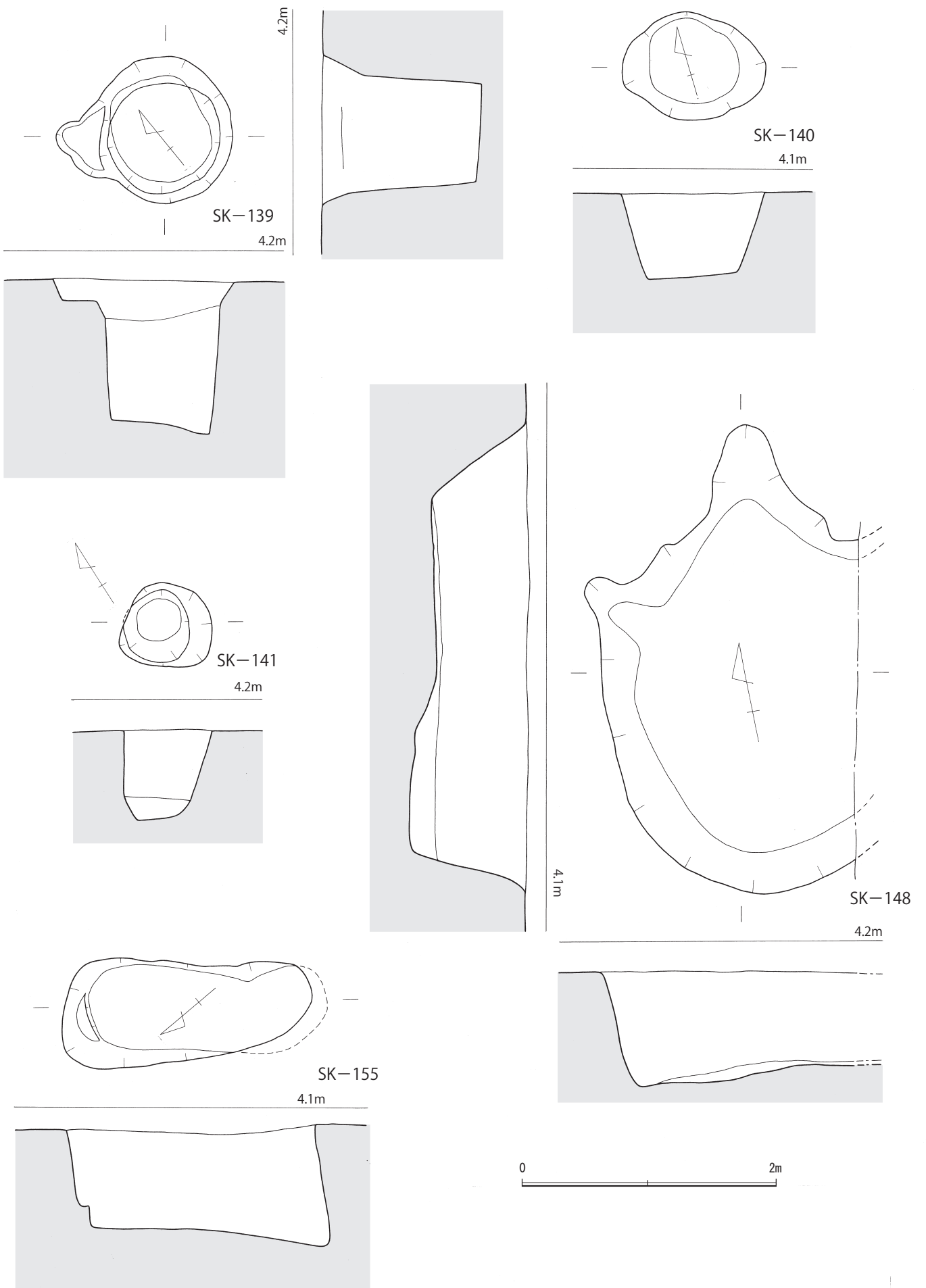
第26図 SK-132・139 出土遺物実測図(1/3)

SK-140 (図版9、第27図)

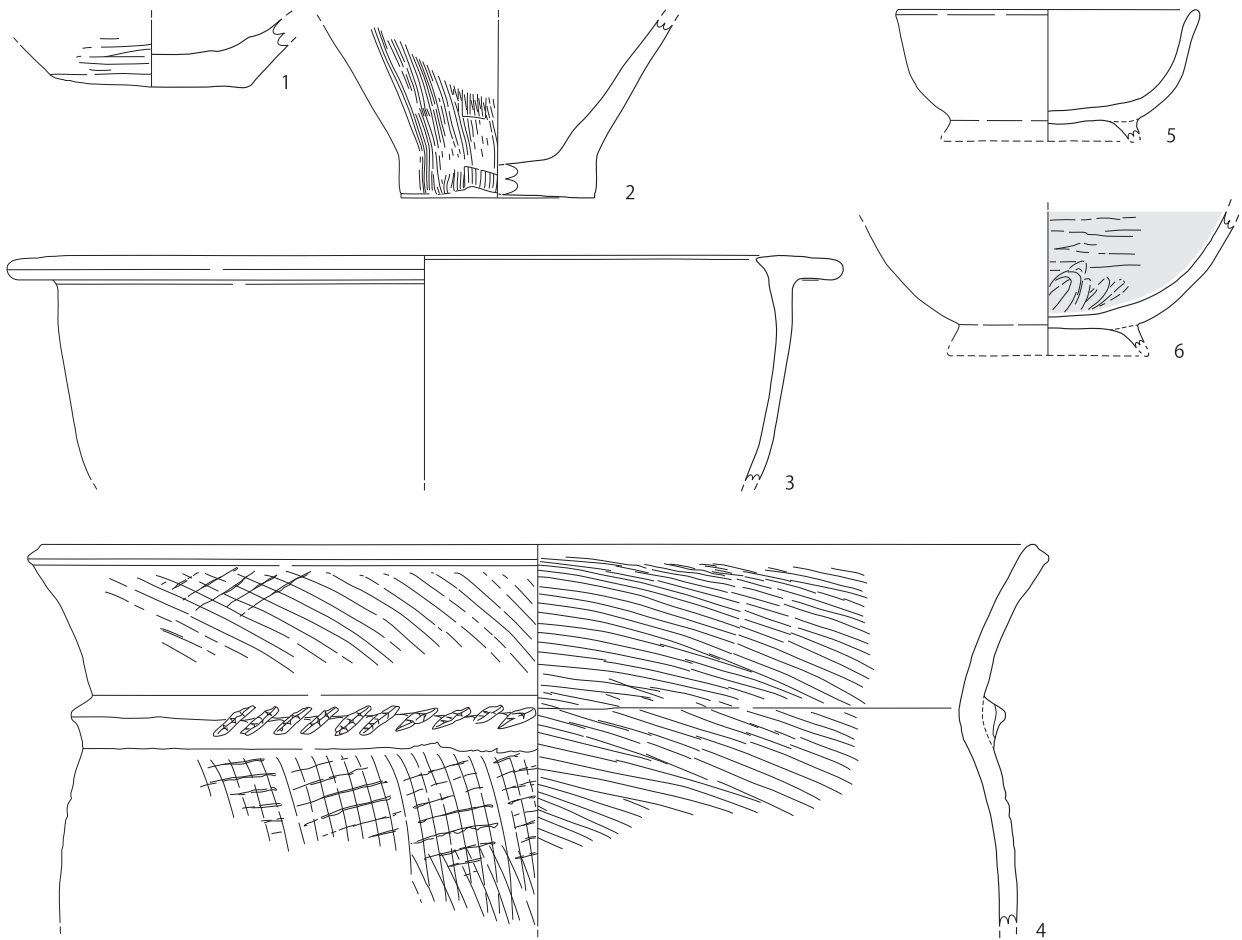
調査区南西側に位置する土坑で、SD-135を切っている。長軸110cm×短軸90cmの楕円形で、深さ60cmである。壁の立ち上がりは急傾斜である。埋土は黒色土。

出土遺物(図版20、第28図1~6)

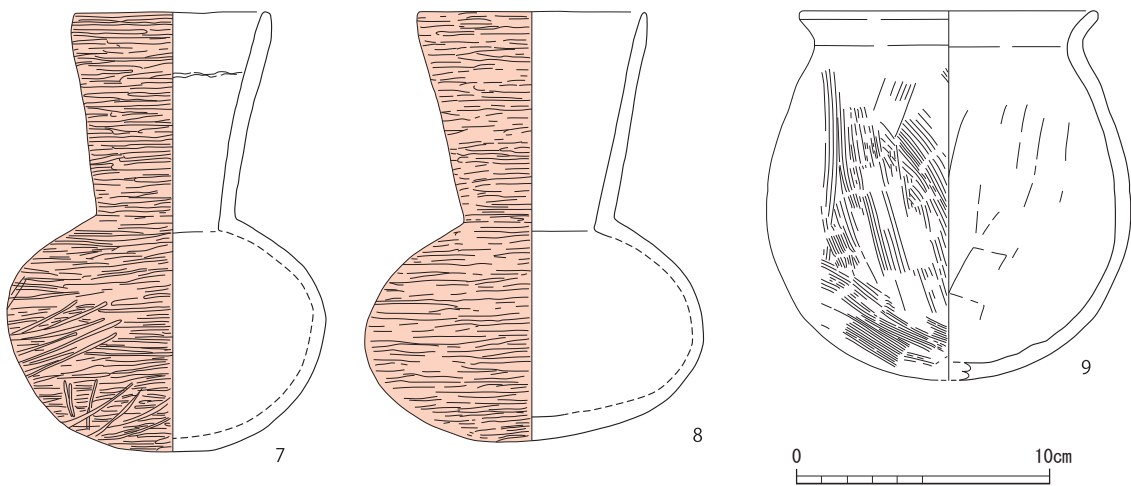
1~4は弥生土器である。1は壺底部で外面の一部に黒斑が伴う。外面には横ヘラ磨き調整が認められる。2~4は甕である。2はやや厚みのある底部。内面ナデ、外面縦ハケ目調整を行う。



第27图 SK-139·140·141·148·155 实测图 (1/40)



SK-140



SK-141

第28図 SK-140・141 出土遺物実測図(1/3)

3は鋤先口縁の甕。口縁部は幅の広い上面があり、内面へわずかに突出し、外端部は丸みをもって納められる。4は大型甕の口頸部で、古墳初頭まで下るか、屈曲する頸基部には低い断面三角形の突帯が付される。突帯上からハケ状工具による刻目を施文する。5は土師器碗で低い高台を有す。6は内面黒色土器である。やや高い高台を有し、内面にヘラ磨き調整が認められる。

SK-141 (第27図)

調査区西端に位置する土坑である。長軸70cm×短軸60cmの円形で、深さ70cmである。壁は急傾斜で立ち上がり、埋土は暗灰土である。底面から第28図7の長頸壺が出土。

出土遺物 (図版20、第28図7～9)

7、8は土師器長頸壺である。胴部は扁球形に近く、頸部が締まり、口縁部は直線的に長く伸びる。内面はナデ、外面には密に磨きが施され赤色顔料が塗布される。9は土師器甕で、頸部の屈曲は緩やかで短い口縁部は外反する。胴部は丸みのある器形である。

SK-148 (第27図)

調査区北西端に配置する土坑で、一部調査区外に延びる。長軸360cm×短軸200cmの不整形で、底面は南側が最も深く、90cmを測る。壁の立ち上がりは急傾斜である。埋土は暗灰色土。

出土遺物 (図版20、第29図1～11)

1、2は弥生土器である。1は口縁部が断面三角形状に肥厚する甕である。2は裾が開かない分厚い底部となる甕である。

3～5は土師器小皿である。すべて底部糸切り。6～11は土師器坏である。6は器壁が厚く体部が丸みを帯びる。7～10は体部下半が直線的に開き、上半がわずかに内湾する器形となる。10は底部に穿孔がみられる。11は器壁が非常に薄く、体部は直線的に大きく開く。外面には轆轤目が明瞭に残る。

SK-155 (図版2・9、第27図)

調査区北西側に位置する土坑である。長軸180cm×短軸90cmの長楕円形で、底面は南西側が最も深く、80cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、北側にテラス部が認められる。

SK-156

出土遺物 (図版21、第29図12～19)

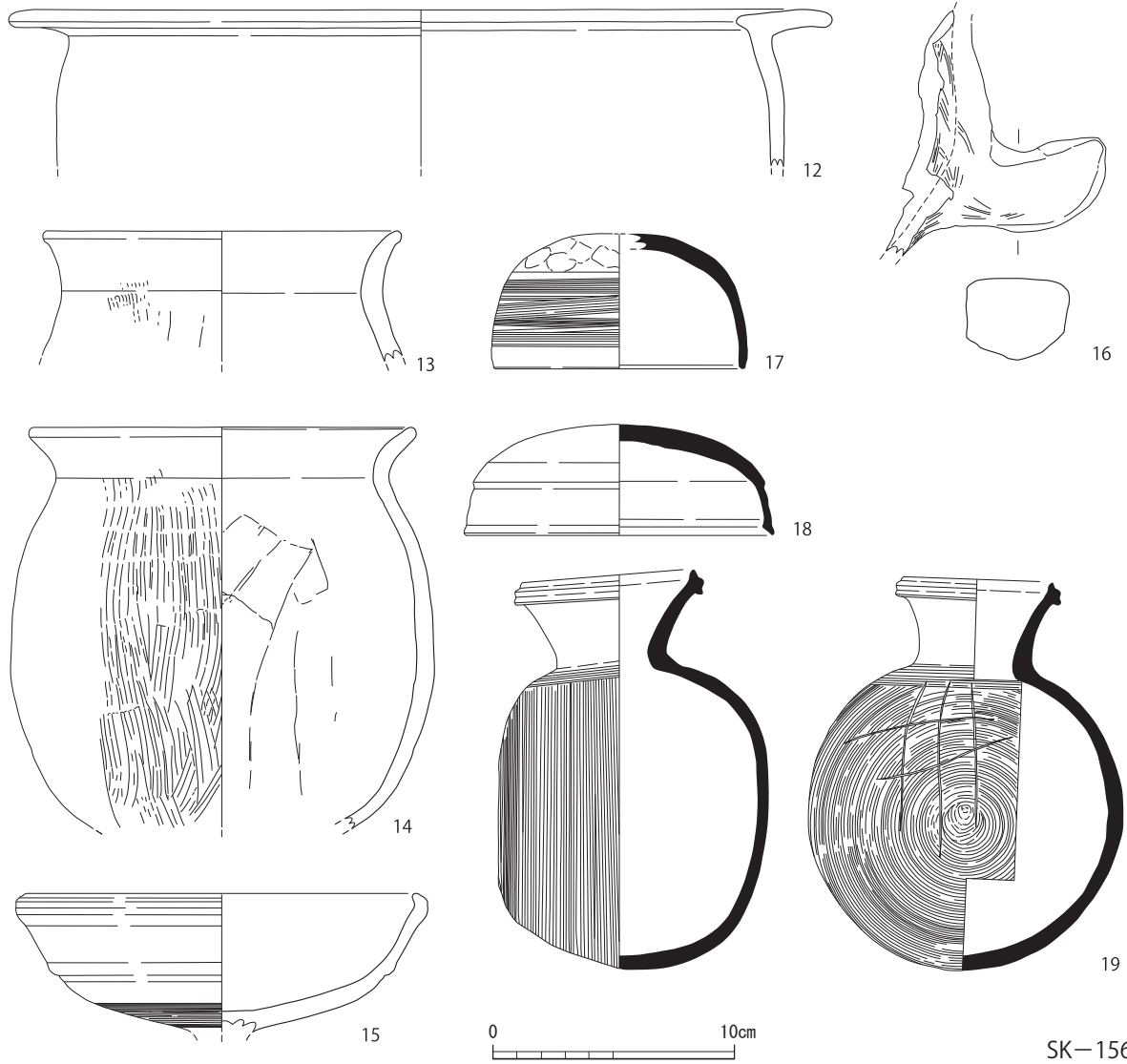
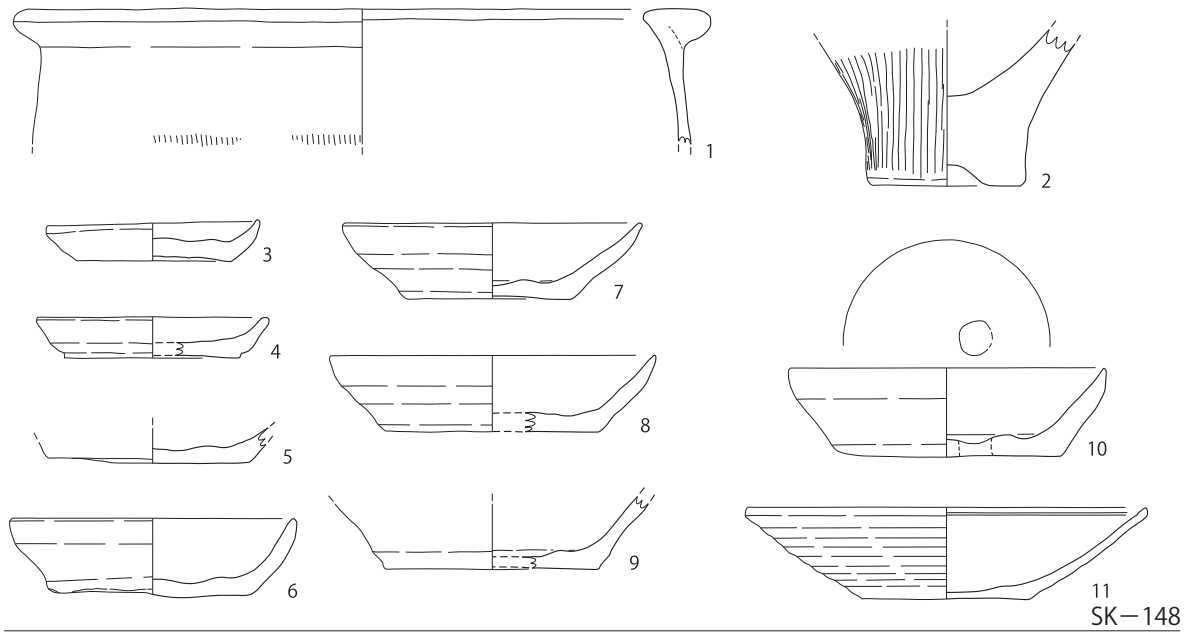
12は弥生土器甕である。外側に長く伸びる鋤先口縁を呈し、上面は幅広く、内面へはわずかに突出し、外端部は丸みをもって納められる。

13～16は土師器である。13、14は甕で、頸部の屈曲は緩やかで口縁部の外反は弱い。胴部はあまり張らず長胴気味である。15は須恵器を模倣した土師器高坏で、中位に低い突帯状の段を有し、口縁部は内側に短くつまむ。外面底部にはカキ目を施す。16は甑の牛角状の把手。

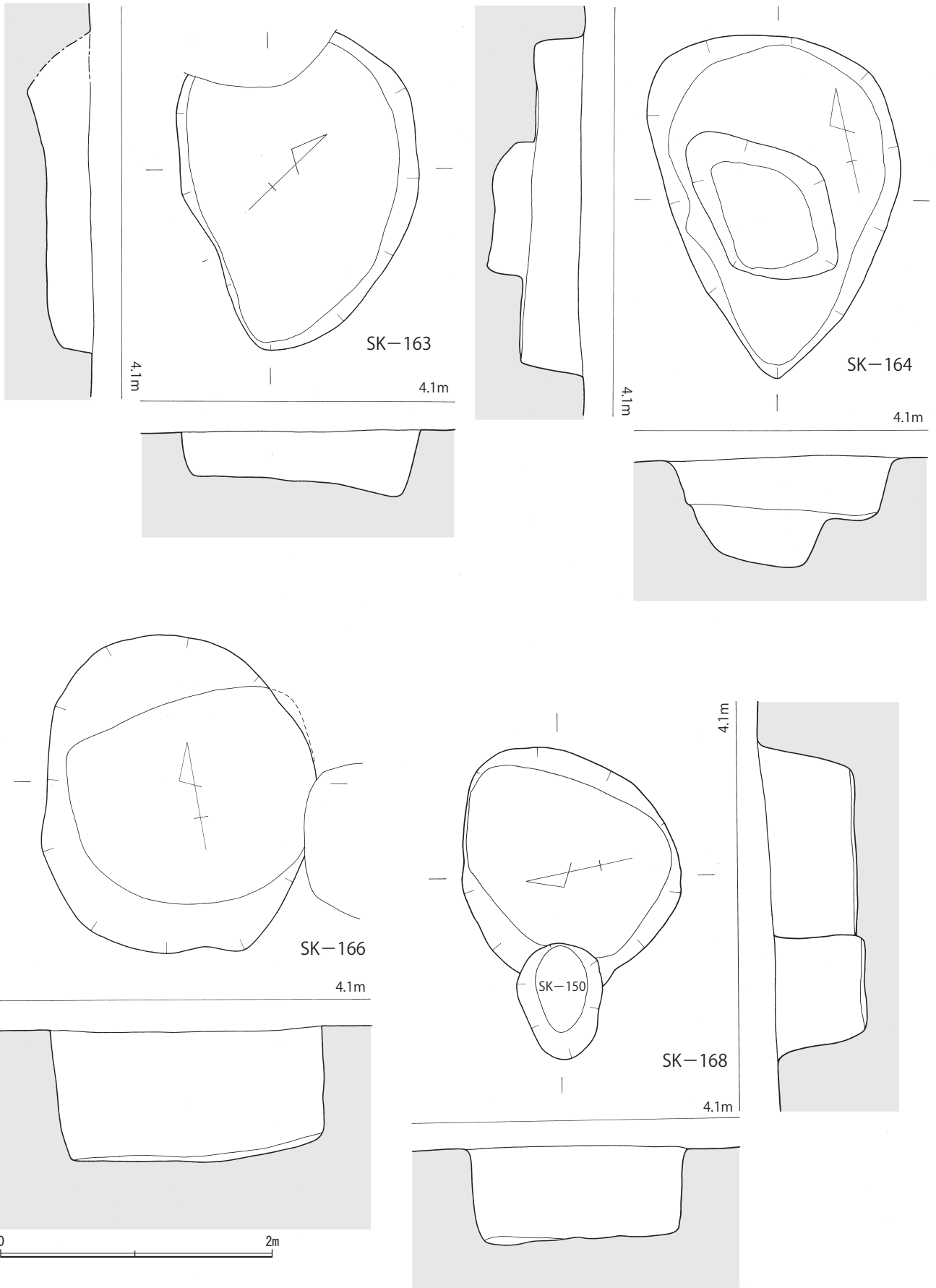
17～19は須恵器である。17は器高が高く丸味を帯びた器形であり、壺の蓋であろう。外面にはカキ目、天井部付近は指オサエが残る。18は坏蓋で、外面に比較的明瞭な段を有す。口縁端部にも明瞭な段が見られる。19は提瓶である。頸部が開き、口縁端部には突帯を巡らせる。胴部には全体的にカキ目が廻り、ヘラ記号が施される。

SK-163 (第30図)

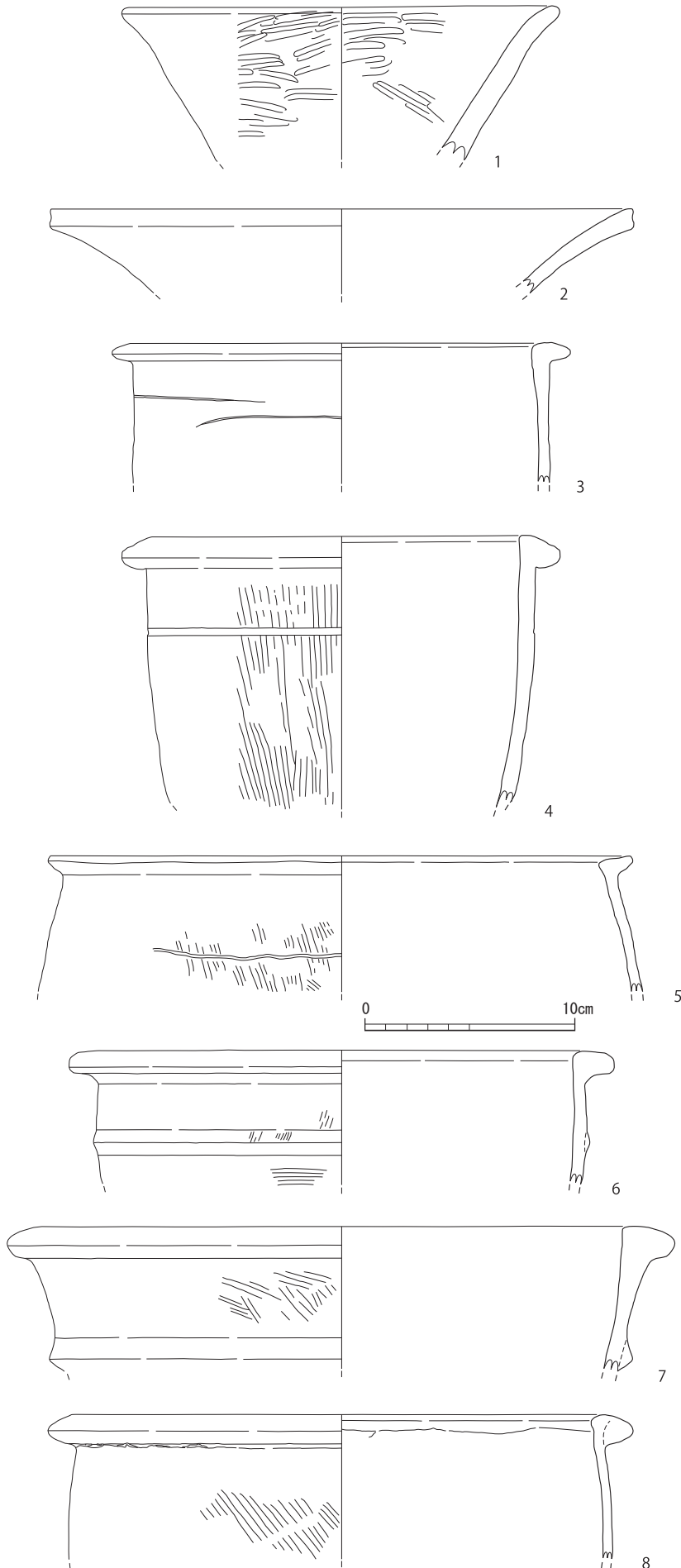
調査区北西にあり、SK-164の西側に位置する土坑で、西側の一部がSK-168に切られる。長軸230cm×短軸170cmの不整形楕円形で、底面は北西側が最も深く、30cmである。壁の立ち上がりは緩やかな傾斜を呈す。埋土は暗灰色土。



第29图 SK-148·156 出土遺物実測図 (1/3)



第30図 SK-163・164・166・168 実測図 (1/40)



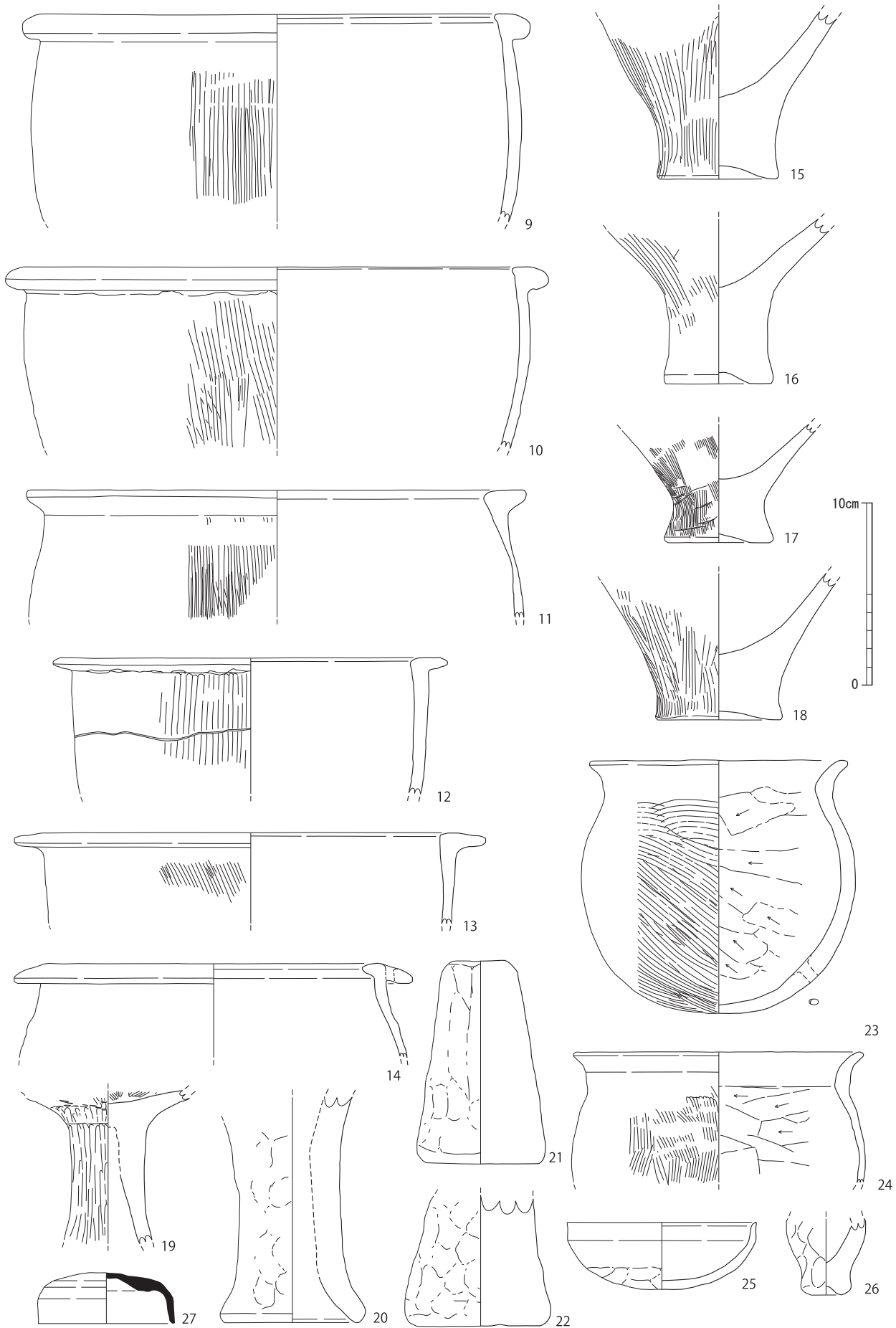
第31図 SK-163 出土遺物実測図① (1/3)

出土遺物 (図版 21、第 31・32 図)

1～22 は弥生土器である。1、2 は壺の口縁部。1 は直線的に開き端部を丸く収める。器壁が厚く、内外面磨きによる調整が施される。2 は口縁部が大きく開き、端部は明瞭な面をなす。調整は内外面ナデ。

3～18 は甕である。3～10 は断面三角形に小さく肥厚する。調整は、内面ナデ、外面ハケ目を行う。3～5 の口縁部下には一条の沈線を巡らせる。6、7 は口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。9～11 は胴部上半がわずかに内湾する。12、13 は薄く小さく伸びた三角口縁となる。12 は外面口縁部下に一条の沈線を巡らせる。13 の胴部外面には、煤の付着が見られる。14 は垂下した鋤先口縁を呈し内面へわずかに突出し外端部は丸みをもって納められる。15～18 は底部片である。上げ底の厚い底部をもち、端部は比較的シャープである。外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施される。

19 は高坏の脚部で、外面は縦ヘラ磨きによる調整が施される。20 は器台で、外面は指ナデによる調整が施される。21、22 は支脚である。中実で断面長台形を呈し、外面はナデによる調整が施される。



第 32 图 SK-163 出土遺物実測図② (1/3)

23～26は土師器である。23、24は甕で、口縁部は短く外反し内面には弱い稜を有す。胴部に丸みのある器形である。外面ハケ目、内面ヘラ削りによる調整を行う。23の底部付近には穿孔が施される。25は土師器壺である。体部は丸く、口縁部は短く立ち上がり、境目には稜を有す。底部付近は手持ちヘラ削りを施す。26は手づくねによるミニチュア土器で、甕に近い形状となる。

25は須恵器壺蓋である。外面の段は不明瞭で、口縁端部内面には段をもたない。

SK-164 (図版2、第30図)

調査区北西にあり、SK-163の東側に位置する土坑である。長軸250cm×短軸160cmの楕円形で、底面は中央付近がピット状に深くなっており、この部分の深さは80cmである。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。埋土は暗灰色土。

出土遺物 (図版21、第33図1～10)

1～10は弥生土器である。1は壺、底部は平底で胴部は丸味を帯びて立ち上がる。外面は磨き、内面はナデによる調整が施される。2、3は甕蓋。2点とも上げ底の底部を逆さにした形を呈し外面はハケ目による調整が施される。4～9は甕で、4、5の口縁は厚い突帯状の肥厚部が付される亀甲系である。外面はハケ目による調整が施される。6～9は厚い上げ底の底部であり、9は底部外面中央部に丸い窪みを有する。10は器台で、器壁は中央が肥厚し内外面ともナデによる調整が施される。

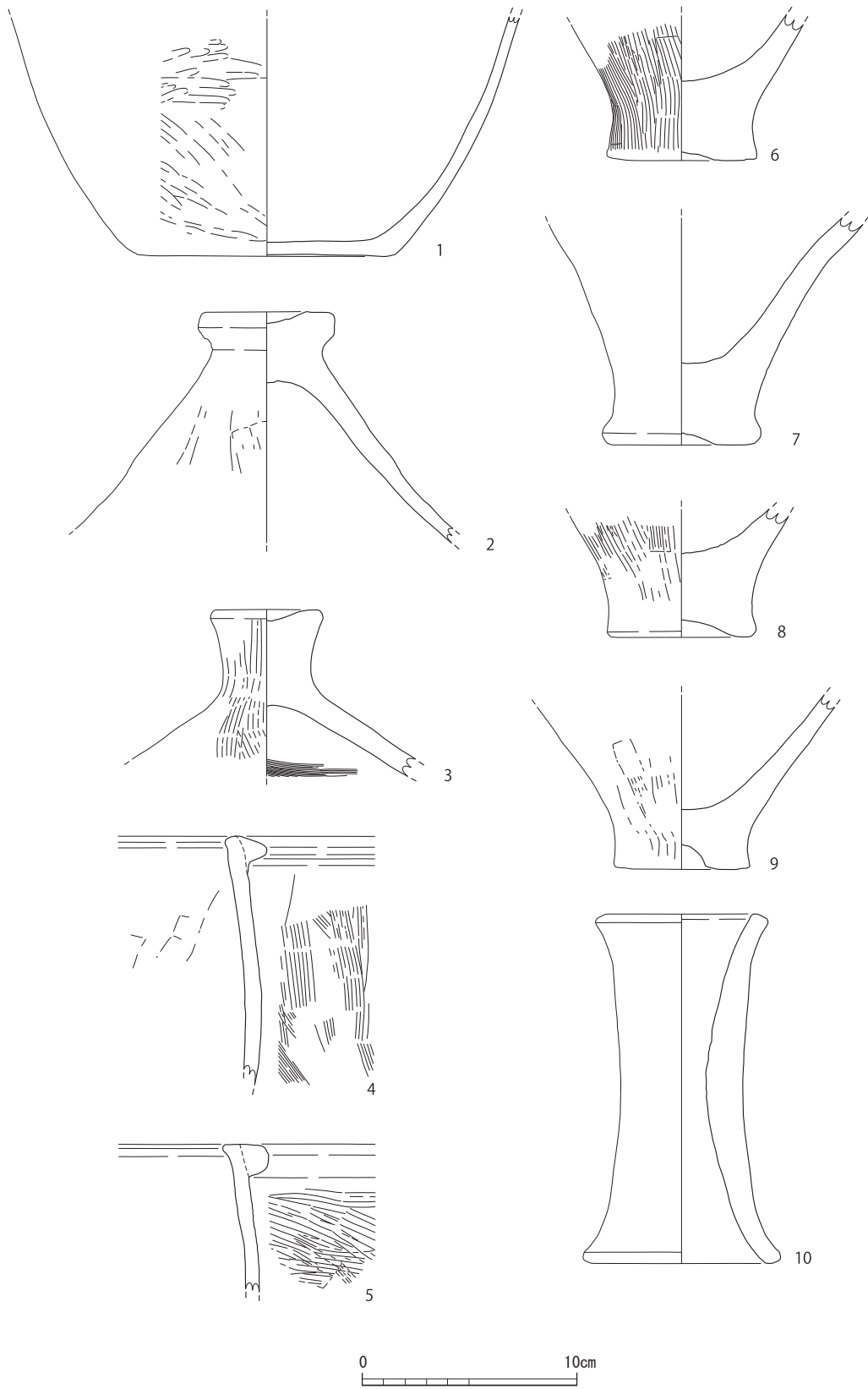
SK-166 (図版2、第30図)

調査区北西に位置する土坑である。長軸230cm×短軸200cmの円形を呈す。床面はほぼ水平で深さは80cmである。壁の立ち上がりは東西壁がほぼ垂直、南北壁は若干緩傾斜になる。埋土は暗灰色土。

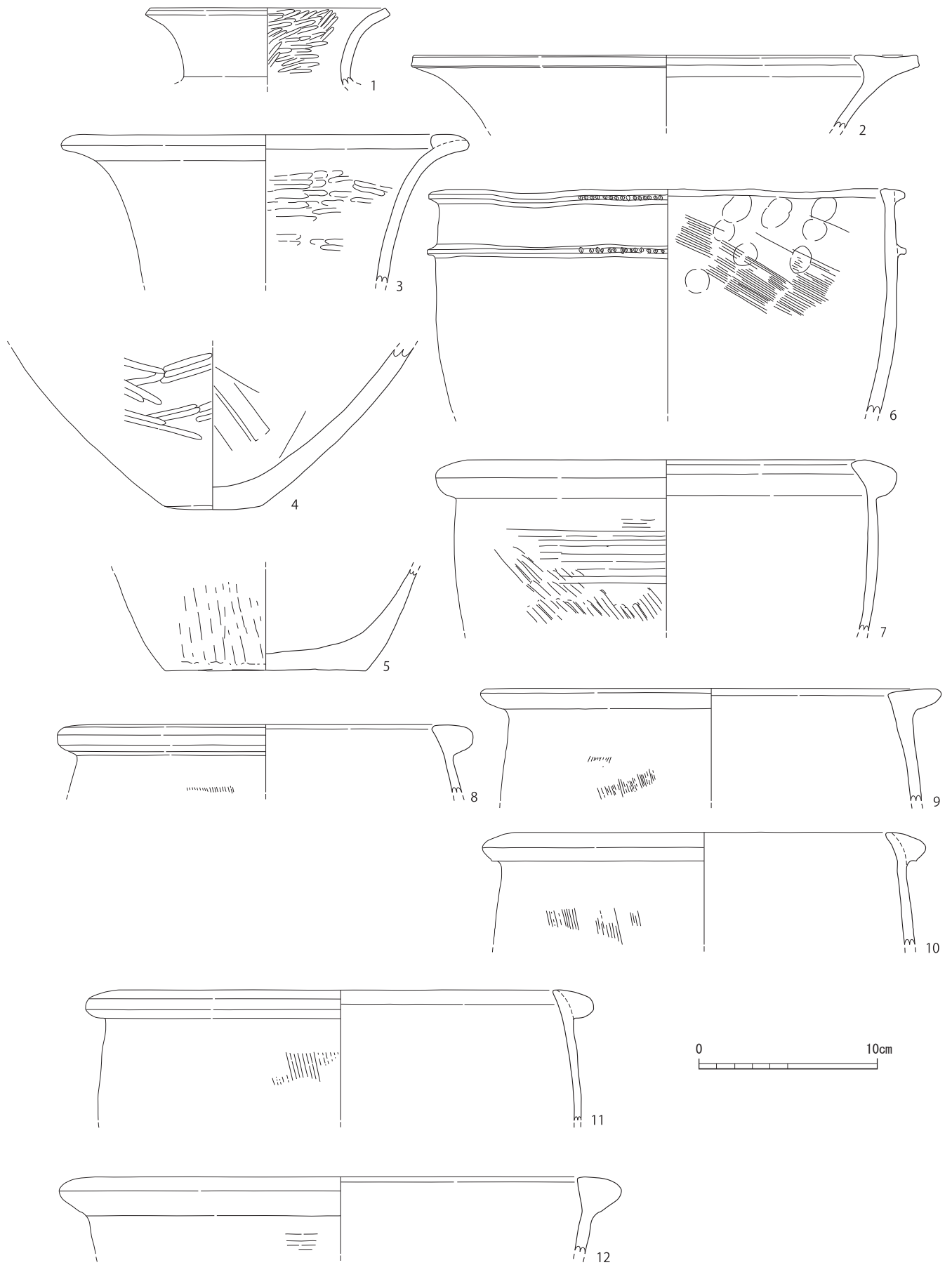
出土遺物 (図版22、第34・35図)

1～25は弥生土器である。1～5は壺で、1は素口縁となる。口縁部は大きく開き端部は面をなす。内面には磨きが残る。2は鋤先口縁で、内外面にナデによる調整が施される。3は口縁端部内面に粘土を貼り付け肥厚させる。内面には横方向のヘラ磨きが認められる。4はレンズ状の底部を有し、外面は磨き、内面はナデによる調整が施される。5は広い平底の底部で、胴部はわずかに丸味を有す。内外面にヘラ磨きによる調整を施す。6～24は甕で、6～12は、厚い突帯状の肥厚部が付される亀甲系の口縁部である。6は口縁端部の肥厚が小さく、端部に刻目を施す。外面口縁部下に一条の刻目突帯を巡らせる。内面にはナデに先行するハケ目、指圧痕が残る。7～12の口縁部の肥厚は大きい。13～16は鋤先口縁で、15の胴部上方外面には三角形の貼り付け突帯を巡らせる。17～24は底部片である。17は裾があまり開かない。19、20は底部内面を丸く窪ませる。21、22は平底だがわずかに上げ底となる。21、23の内面底部には指圧痕残り、22の外面底部には煤が付着する。25は台付甕の脚部で、先端の断面は丸味を持って成形され、外面はハケ目、内面はハケ目後ナデによる調整が施される。

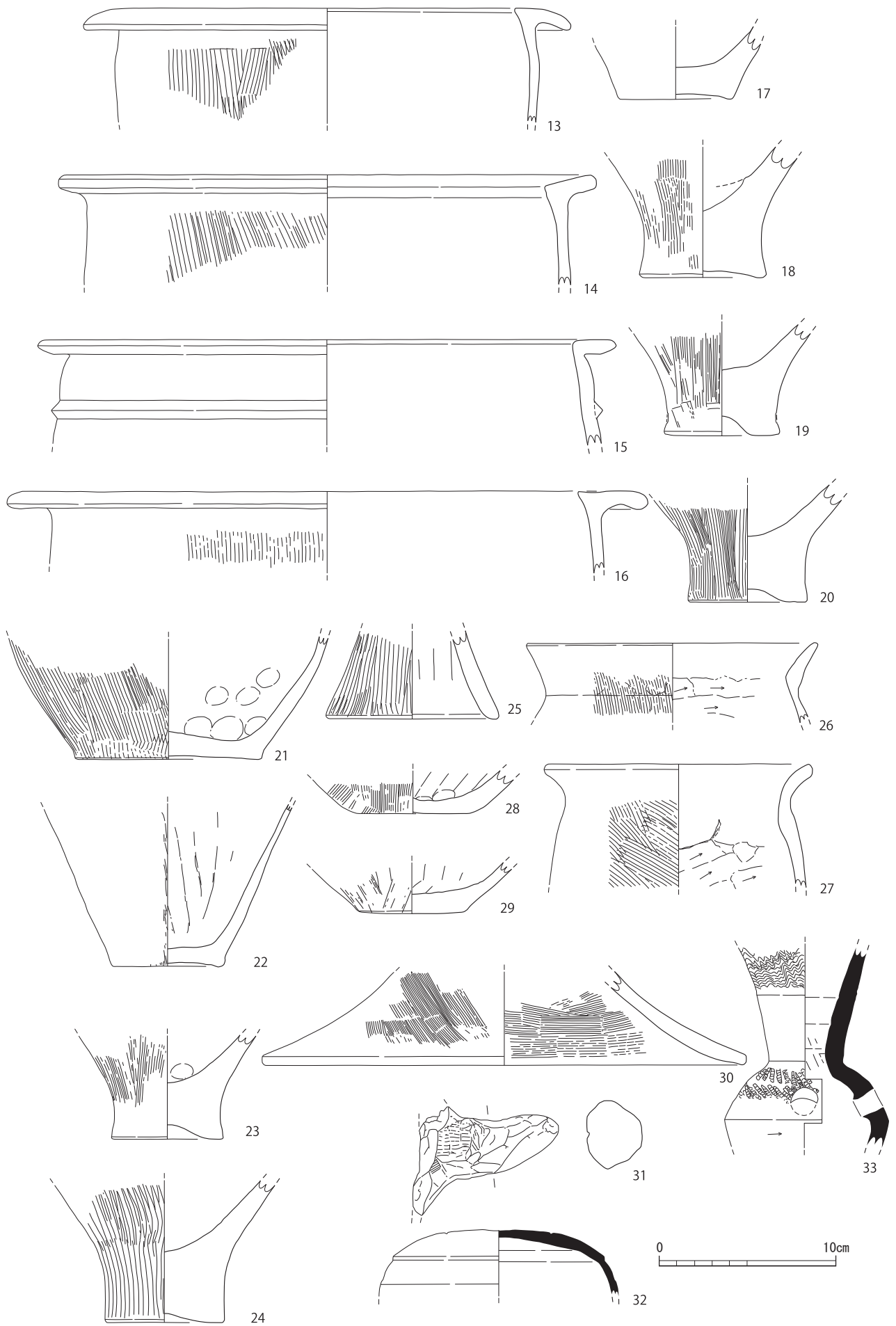
26～31は土師器である。26～29は甕である。26は屈曲部内面に稜を有し、口縁部は直線的に開く。27は口縁部が丸く外反する。どちらも胴部内面ヘラ削り、外面ハケ目、口縁部は横ナデを行う。28、29は甕の底部片である。わずかに丸味を帯びてレンズ状になる。28の内面はヘラ削り、外面はハケ目をを行い、29の外面はハケ目状工具によるナデを行う。30は高坏の脚部で、



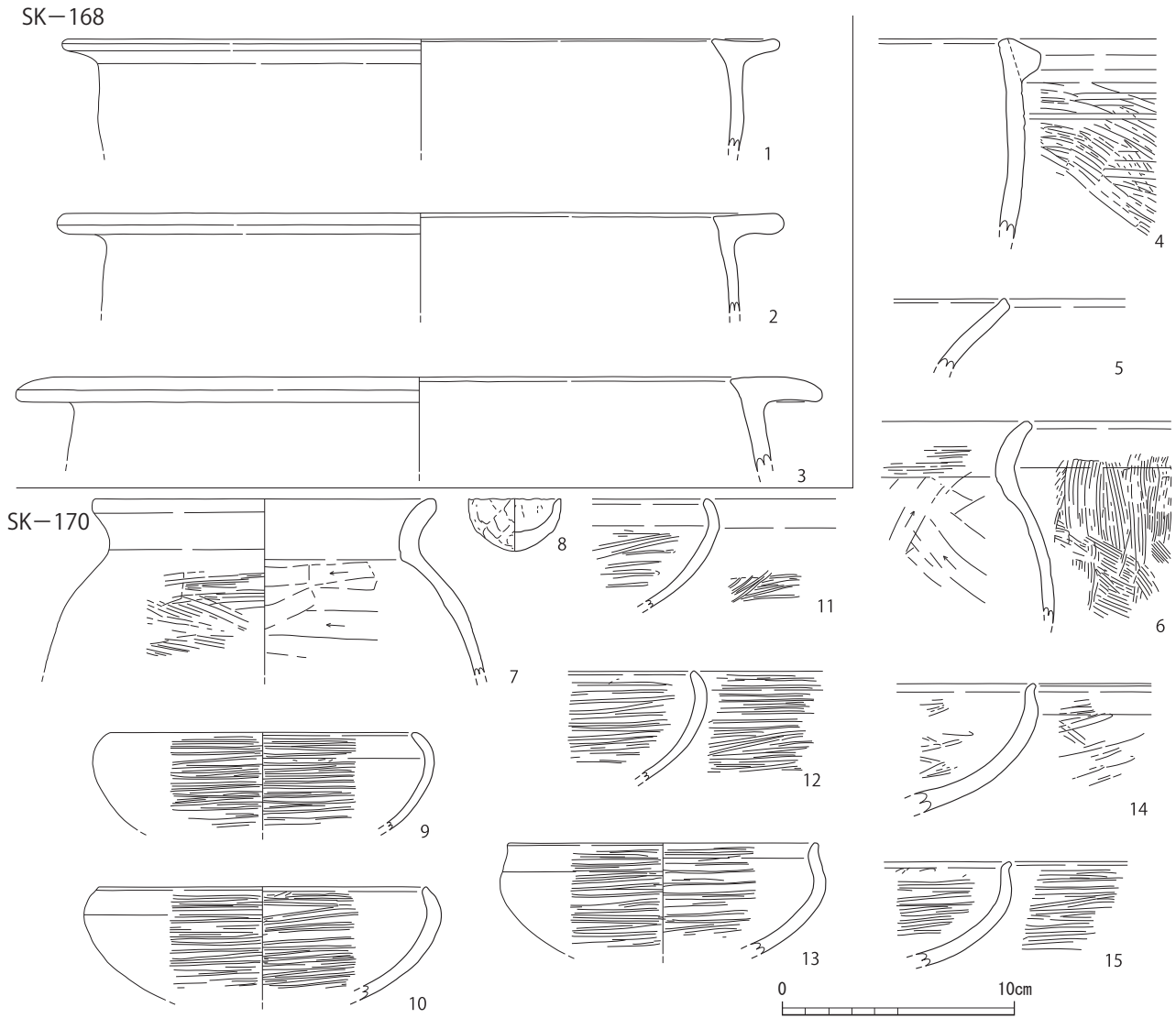
第 33 图 SK-164 出土遺物実測図 (1/3)



第34图 SK-166 出土遺物実測図① (1/3)



第35图 SK-166 出土遺物実測図② (1/3)



第 36 図 SK-168・170 出土遺物実測図 (1/3)

裾端部に向かって大きく開き、内外面とも丁寧なハケ目調整が施される。31 は甑の取っ手で、指ナデによる調整が残る。

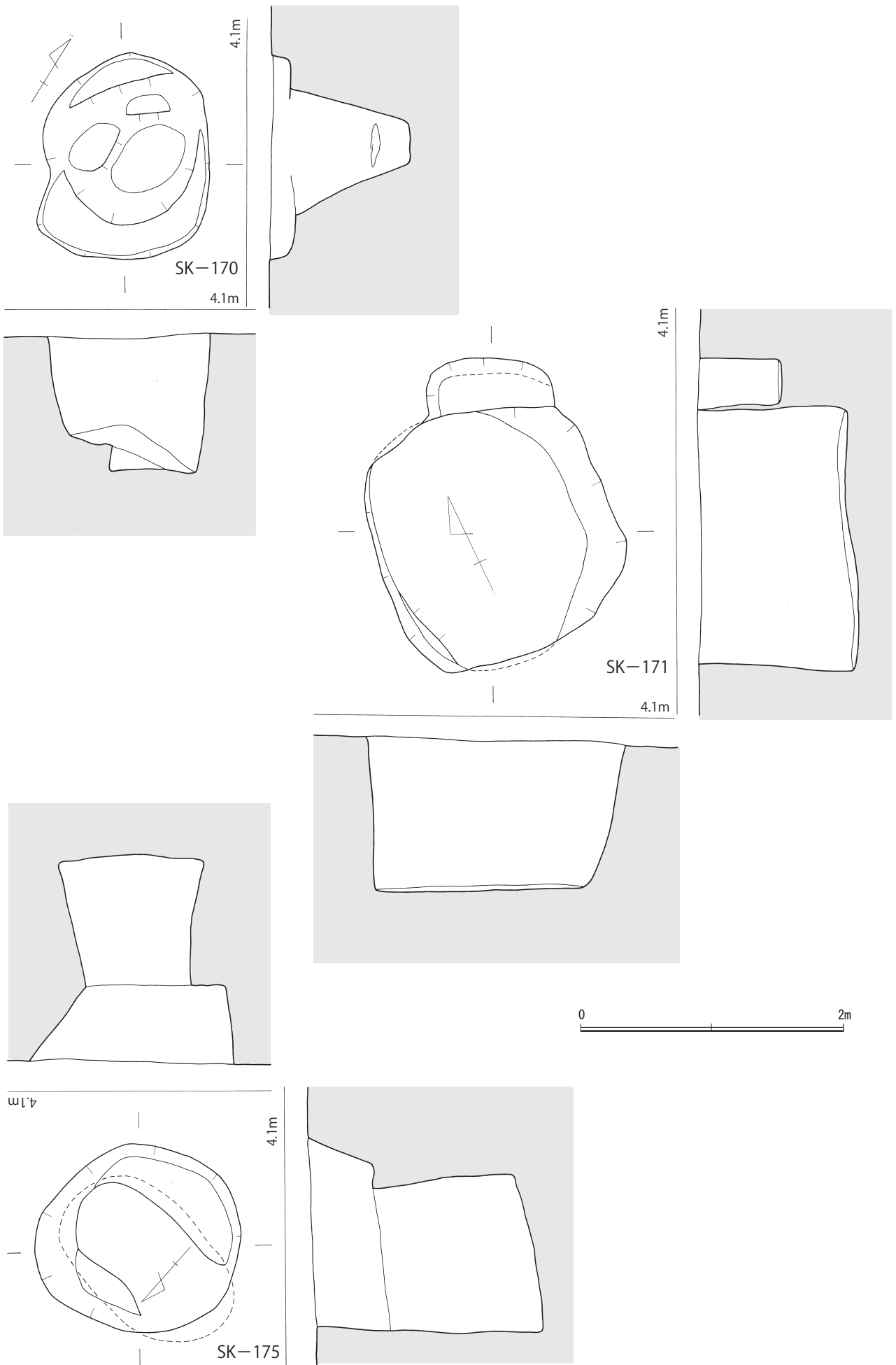
32、33 は須恵器である。32 は坏蓋で、外面には不明瞭な段を有す。33 は甕で、小ぶりの球形を呈する体部の肩の部分には、櫛状工具による刺突文を、口縁部下には櫛描き波状文を施文。

SK-168 (図版 10、第 30 図)

調査区北西にあり、SK-163 の西側に位置する土坑である。西側はSK-150 に切られる。長軸 170cm × 短軸 160cm の円形を呈す。床面はほぼ水平で、深さは 70cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈し、埋土は灰色土。

出土遺物 (第 36 図 1~3)

1~3 は弥生土器甕の鋤先口縁で、内外面に横ナデによる調整が施される。1、2 はほぼ水平に伸び、3 は外端部が若干垂下する。



第 37 图 SK-170·171·175 实测图 (1/40)

SK-170 (図版 10、第 37 図)

調査区北側にあり、SK-171 の北側に位置する土坑である。長軸 150cm × 短軸 120cm の不整楕円形で、底面は中央付近が最も深く、深さ 100cm である。壁の立ち上がりは急角度で傾斜しており、複数のテラス部が見られる。埋土は黒色土。

出土遺物 (第 36 図 4～15)

4 は弥生土器甕である。口縁は厚い突帯状の肥厚部が付される亀甲系である。外面はハケ目調整で、口縁部下には沈線が施される。5～15 は土師器である。5 は古墳前期の甕であろう。口縁部は外反し端部は明瞭な面をなす。6、7 の口縁部は短く外反する。胴部はやや肩が張って丸みのある器形である。外面ハケ目、内面ヘラ削りによる調整を行う。8 はミニチュア碗である。内外面とも指整形時の圧痕が明瞭に残る。9～15 は埴である。9～12 は口縁端部付近のみ短く内湾する。調整は内外面とも丁寧な横ヘラ磨きを行う。13～15 は口縁端部付近のみ短く外反する。調整は内外面とも横ヘラ磨きを行う。

SK-171 (第 37 図)

調査区北側にあり、SK-170 の南側に位置する土坑である。長軸 230cm × 短軸 190cm の隅丸方形で、北側には深さ 60cm のテラス部を有す。底面はほぼ水平で、深さ 110cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈す。埋土は暗灰色土。

出土遺物 (図版 22、第 38 図 1～17)

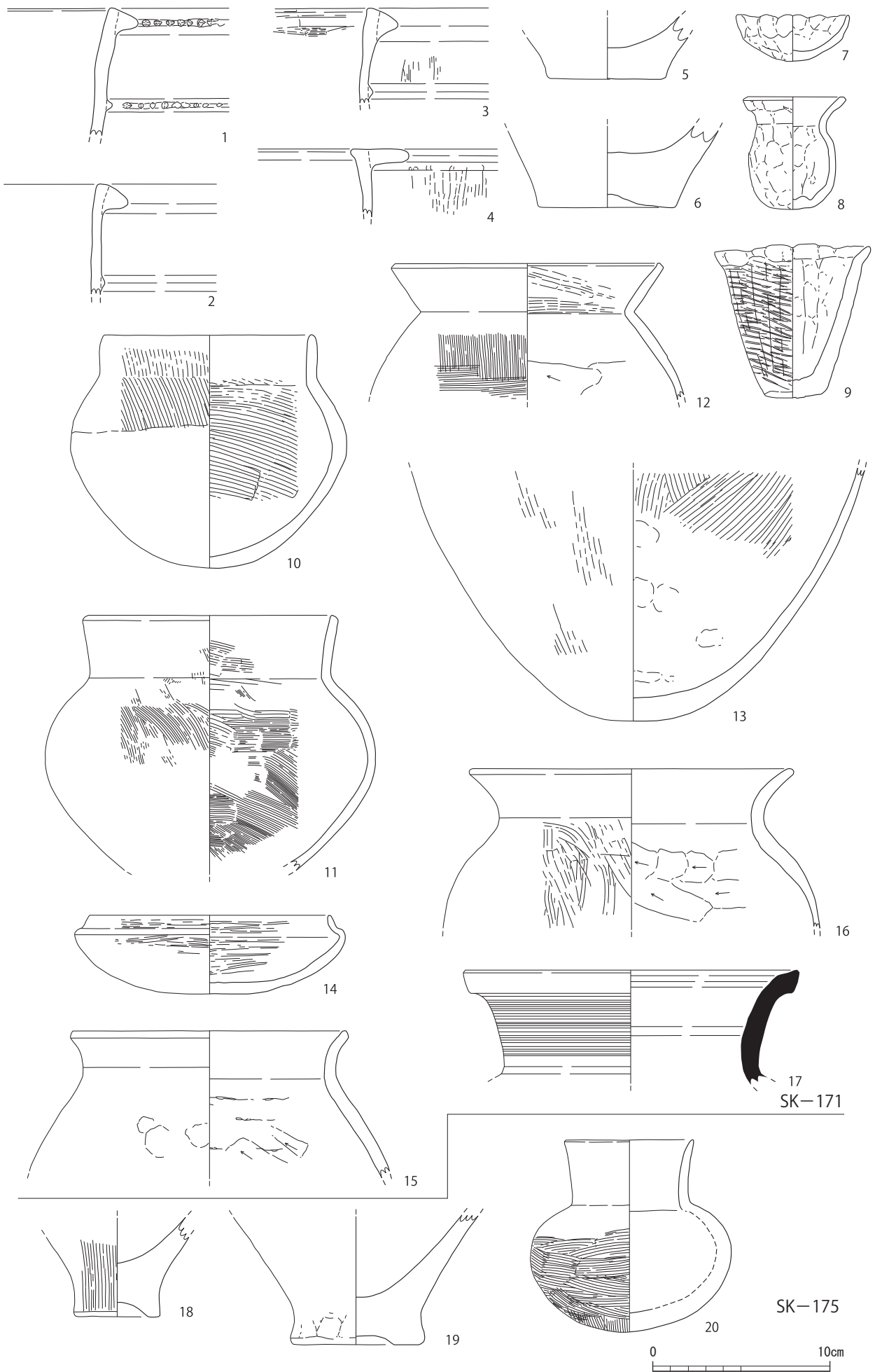
1～6 は弥生土器甕である。1～3 は口縁に厚い突帯状の肥厚部が付される亀甲系であり、いずれも外面の胴部に三角形の突帯を貼り付ける。1 の口唇部、胴部突帯外面は刻目が施される。4 は鋤先口縁で、水平に長く伸びる。外面はハケ目調整が施される。5、6 は厚い底部。

7～13 は古墳時代前期の土師器である。7、8 は手づくねにより成形されている。7 は埴、8 は壺形である。9 は高坏の脚部を転用した鉢で、坏部を接合した痕跡はない。外面は斜タタキ後に縦方向のヘラナデを行う。10、11 は直口壺である。口縁は直立して胴部は肩が張った球形を呈する。10 の外面下半は不整方向の指ナデ、内面は横方行のハケ目による調整が施される。11 は内外面ハケ目による調整が施される。12、13 は甕である。12 は肩があまり張らず、口縁部との境目は明瞭な稜を有す布留系の甕。口縁部は直線的に開き、端部はわずかに上方につまみ出す。口縁部内面にはナデに先行する横方行のハケ目が見える。胴部のかなり下に下がった位置に横ヘラ削りが認められる。13 は尖底に近い形状の底部で、胴部は丸味を帯びる。外面はハケ目後ナデによる調整が施され、内面はハケ目とナデによる調整が施される。

14～17 は古墳時代後期の土器である。14 は土師器埴で、口縁部にかえりを有する模倣坏である。内外面にヘラ磨き調整が施される。15、16 は甕である。15 の口縁部は外反が弱い。胴部は肩があまり張らない器形である。16 は口縁部の外反が強く、胴部は肩が丸く張った器形となる。17 は須恵器甕で、口縁部下にカキ目が廻る。

SK-175 (図版 2・11、第 37 図)

調査区北側にあり、SK-255 の東側に位置する土坑である。長軸 150cm × 短軸 140cm の円形で、底面は西側がやや深く、深さ 170cm である。壁はオーバーハングしながら立ち上がる。



第 38 图 SK-171·175 出土遗物实测图 (1/3)

南側には深さ 50cm のところにテラス部が認められる。埋土は暗茶色土。

出土遺物 (図版 22、第 38 図 18～20)

18、19 は弥生土器甕で、厚い上げ底の底部である。20 は土師器直口壺で、口縁部がほぼ直上へ延び、胴部は扁球形に近い。内面横ナデ、外面の口縁部から胴部上半はナデ、下半はハケ目調整を行う。

SK-183 (図版 11、第 39 図)

調査区北側にあり、SK-171 の東側に位置する土坑である。SK-218 と重複しており、これを切る。長軸 130cm × 短軸 120cm の円形で、床面はほぼ水平をなし、深さは 110cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈し、埋土は暗灰色土。

出土遺物 (図版 22、第 40 図 1・2)

1 は土師器直口壺である。頸部の屈曲は緩やかで口縁部はほぼ直立する。胴部はやや肩が張って尖底気味の器形である。調整は内面ハケ目、外面の上半がハケ目、下半はナデを行う。2 は土師器甕である。口縁部は直線的に開く。胴部は最大径が上位にあり、丸味を帯びた器形となる。胴部内面は横タタキ、外面上半は斜タタキ後一部縦ハケ目を行い、下半部はナデ調整を行う。

SK-186 (図版 12)

出土遺物 (図版 22, 23、第 40 図 3・4)

3、4 は土師器である。3 は強い扁球形の胴部から短い口縁部がほぼ直上にのびる短頸壺である。胴部内面はハケ目、外面上半はハケ目、下半はナデ調整。口縁部はハケ目後ナデ調整を行う。4 は球形胴で口縁部が緩やかに開く小型の甕である。胴部内面はナデ、外面はハケ目で下半はナデを行う。

SK-191 (第 39 図)

調査区南西に位置する土坑で、SK-135 を切る。長軸 220cm × 短軸 110cm の不整楕円形で、床面はほぼ水平をなし、深さ 90cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈し、埋土は暗灰色土。

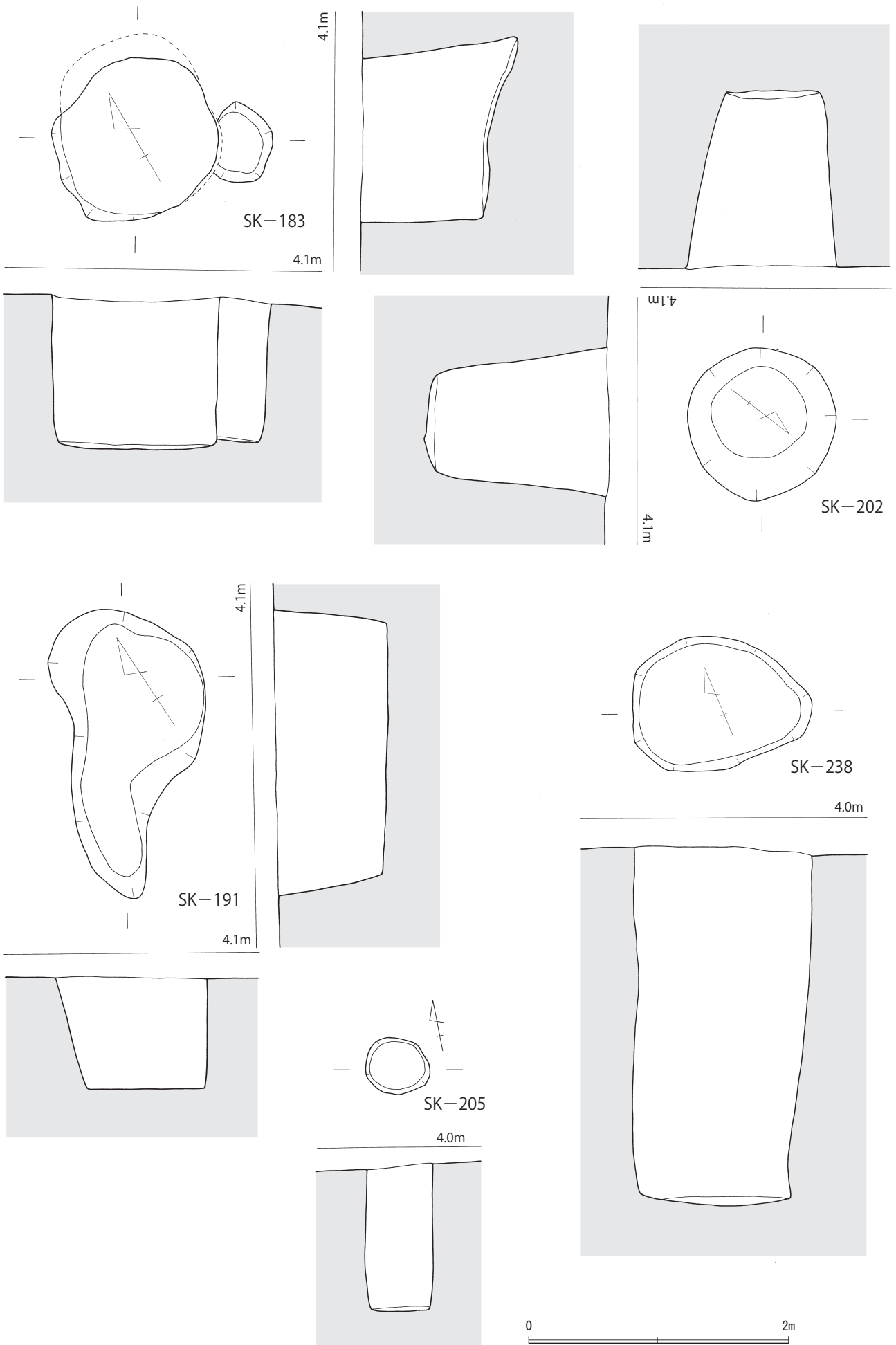
SK-202 (図版 12、第 39 図)

調査区北側にあり、SK-302 の南側に位置する土坑である。長軸 120cm × 短軸 110cm の円形で、床面はほぼ水平をなし、深さは 130cm である。壁の立ち上がりは急傾斜である。埋土は暗灰色土。

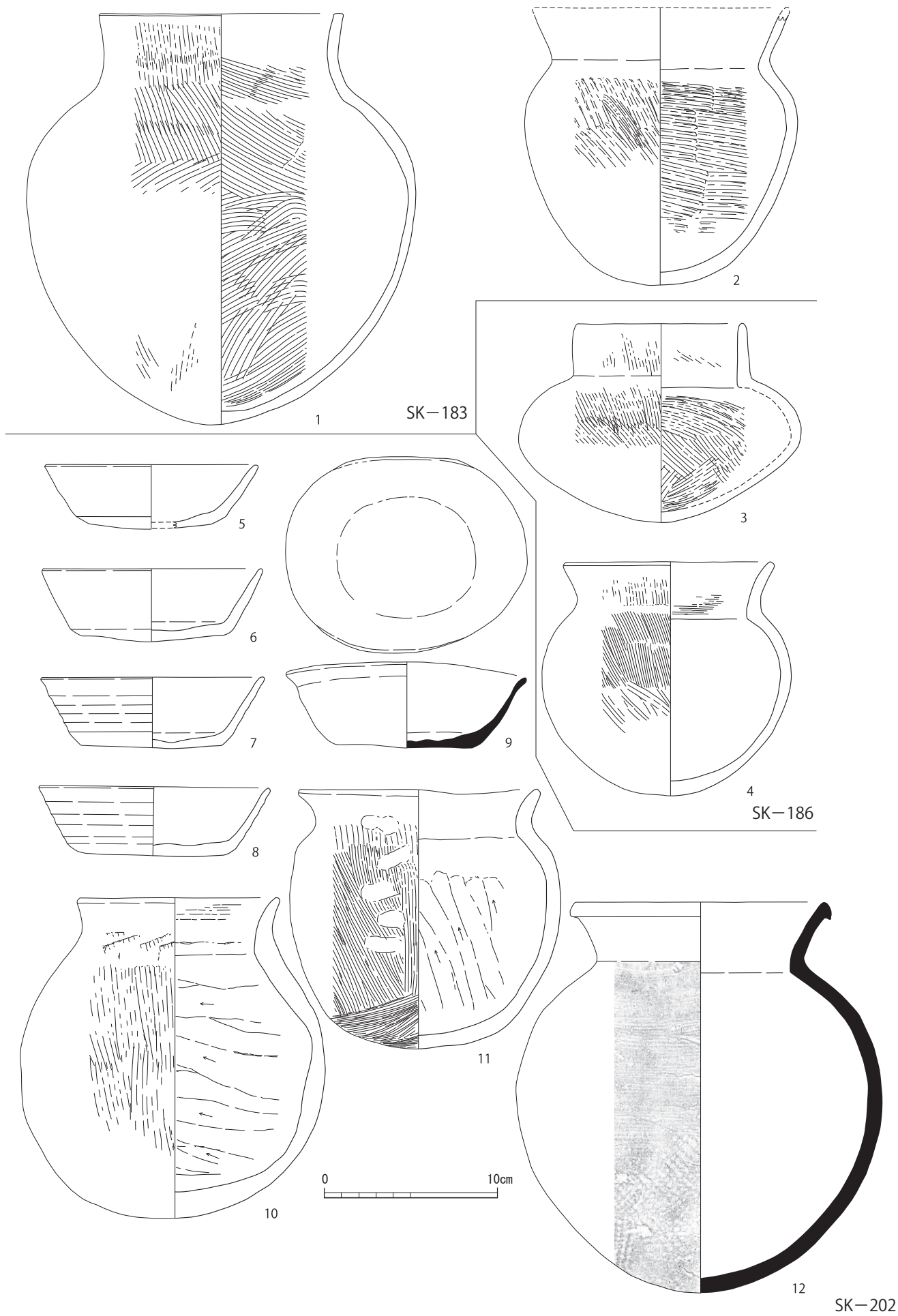
出土遺物 (図版 23、第 40 図 5～12)

5～8 は土師器坏で底部ヘラ切り。9 は須恵器坏で底部はヘラ切り。器壁は薄く、口縁は外湾しながら広がる。外面に自然釉が付着し、器形は歪みが著しい。10、11 は土師器甕である。10 は肩があまり張らず、口縁部は緩やかに外反する。肩部の器壁が厚い。内面は横ヘラ削り、外面は縦ハケ目。11 はやや肩が張った器形で頸部はあまり締まらず、口縁部は短く開く。内面縦ヘラ削り、外面縦ハケ目。

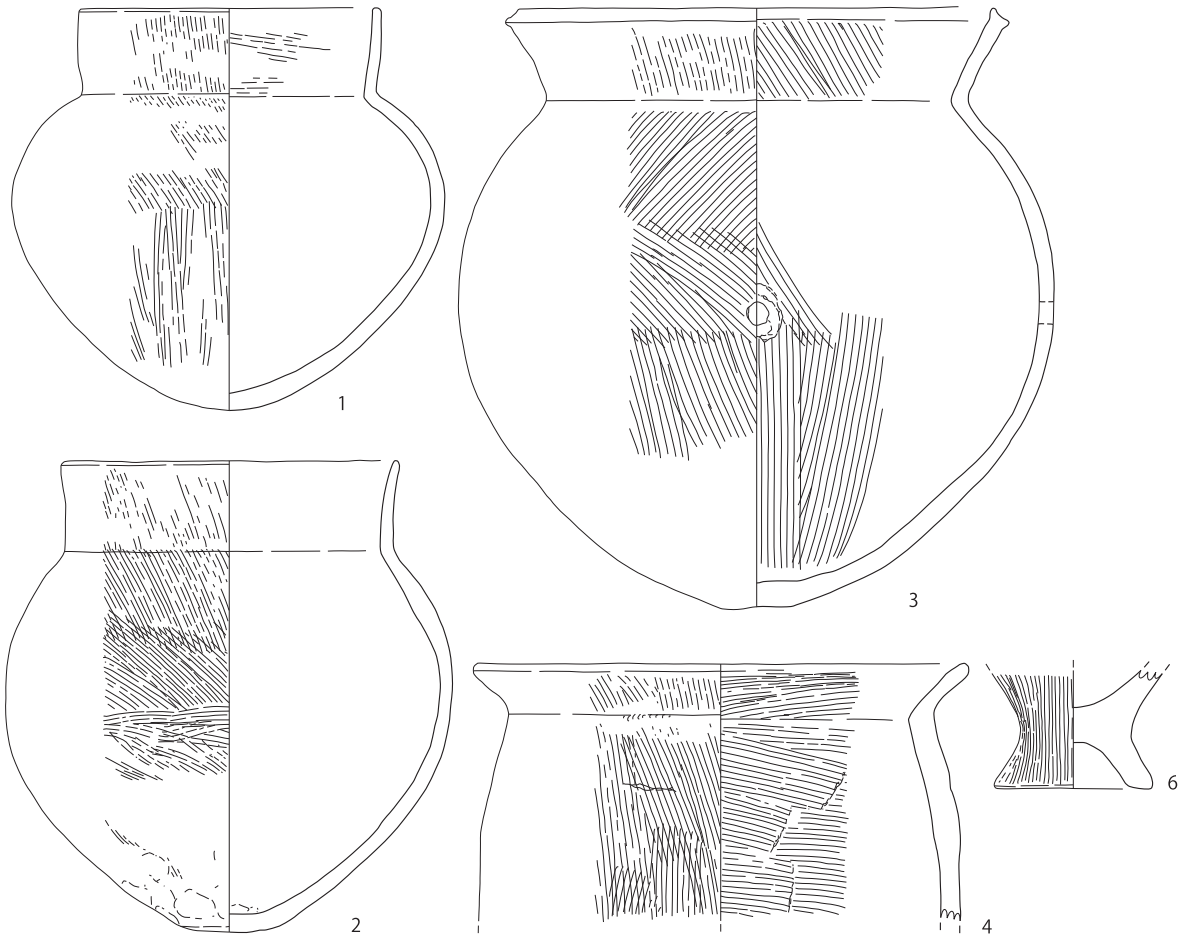
12 は須恵器甕である。球形胴で口縁は開き、端部は断面三角形に肥厚する。外面上半はカキ目、下半は格子タタキ。内面下半には同心円の当て具痕が認められる。



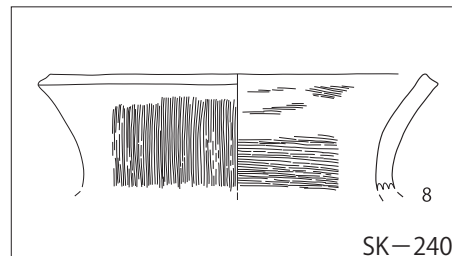
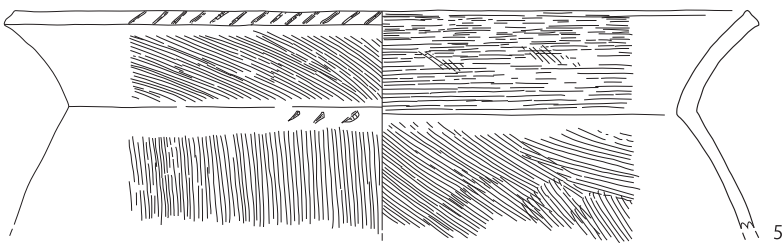
第 39 图 SK-183·191·202·205·218·238 实测图 (1/40)



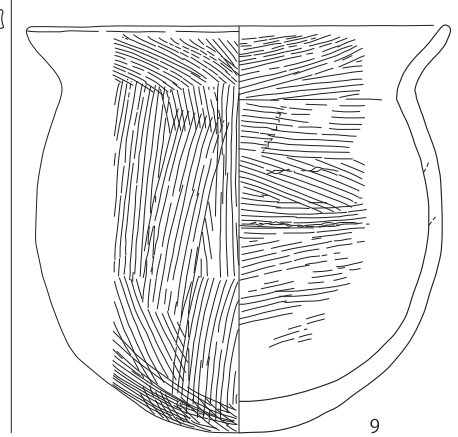
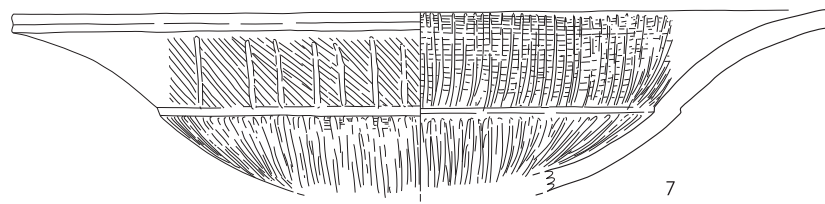
第 40 図 SK-183・186・202 出土遺物実測図 (1/3)



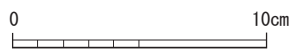
SK-238



SK-240



SK-241



第 41 图 SK-238·240·241 出土遺物実測図 (1/3)

SK-205 (第39図)

調査区北東にあり、SK-183の東側に位置する土坑で、SD-40を切る。長軸50cm×短軸50cmの円形で、深さ110cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土は暗灰色土。

SK-238 (図版13、第39図)

調査区北西にあり、SK-401の南側に位置する土坑である。長軸140cm×短軸100cmの楕円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは220cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土は暗灰色土。

出土遺物 (図版23、第41図1~7)

1~7は土師器である。1、2は土師器壺。1は肩が張った胴部から口縁部がほぼ直上に伸びる。底部は尖底気味である。胴部内面はナデ、外面は縦ハケ目、口縁部はハケ目後ナデ調整を行う。2はやや縦長の胴部で頸部はあまり締まらず、口縁部はあまり開かず直立気味に伸びる。3~5は甕である。3は尖底気味の球形胴で、頸部はあまり締まらず、口縁部は直線的に開く。端部は上方につまみ出される。胴部内面下半は縦ハケ目、上半はナデ。胴部外面上半はハケ目、下半はナデ。口縁部はハケ目後横ナデを行う。4、5は長胴の甕である。4は頸部が締まらず口縁部は直線的に開く。端部は丸味を持って成形される。内面横ハケ目、外面縦ハケ目。5は口縁端部と頸部外面にハケ目状工具による刻目を施す。内外面ハケ目調整。6は脚付甕であろう。外面は縦ハケ目調整。7は高坏である。下半は内湾気味に立ち上がり、上半は大きく外反して開く。端部は明瞭な面をなす。内外面共に横ハケ目後暗文を施文する。

SK-240 (図版13、第42図)

調査区北西にあり、SK-241の東側に位置する土坑で、北側をSK-239に切られる。長軸140cm×短軸140cmの円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは90cmである。壁の立ち上がりは垂直に近く、埋土は暗茶色土。

出土遺物 (第41図8)

8は土師器壺である。口縁部はやや外反し、端部は明瞭な面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目を行う。

SK-241 (図版13、第42図)

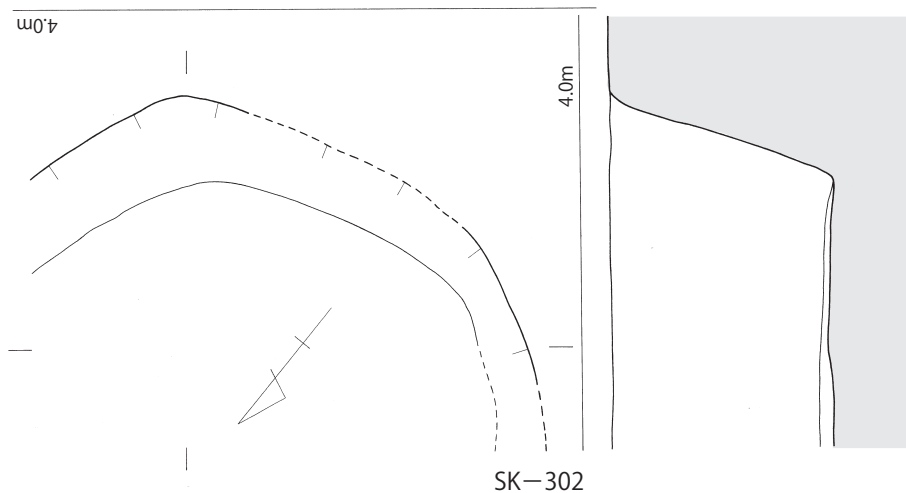
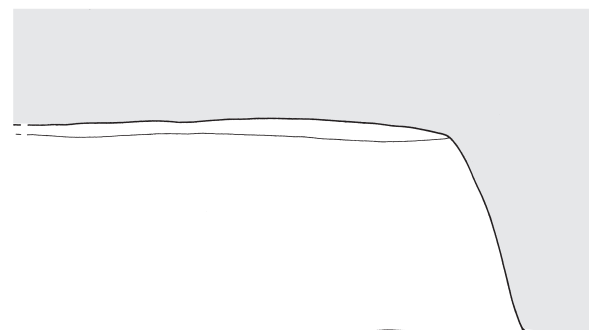
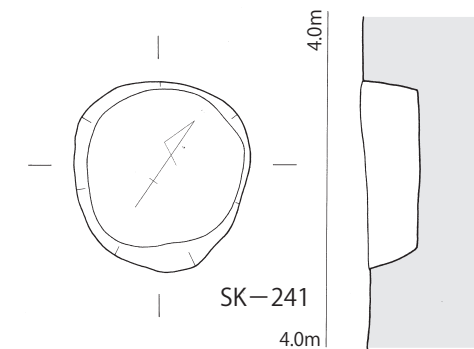
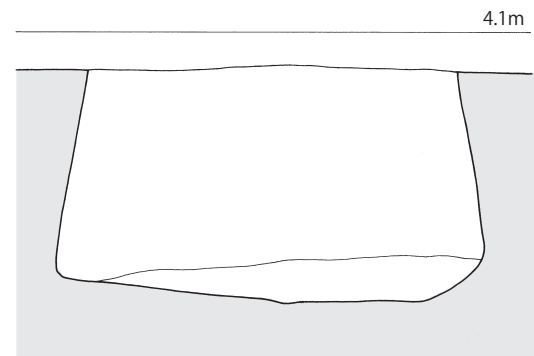
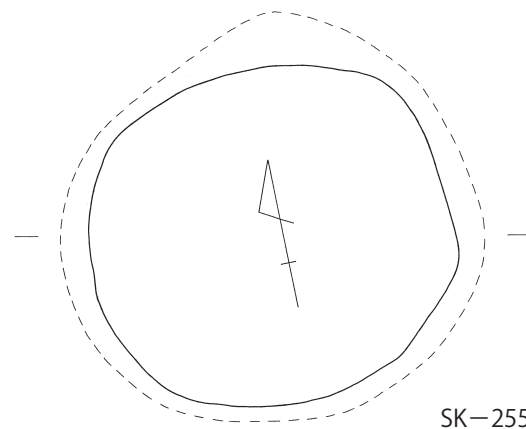
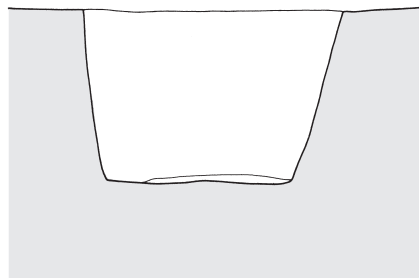
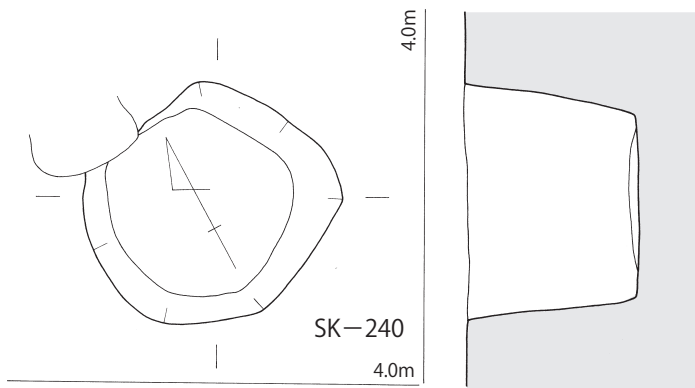
調査区北西にあり、SK-240の西側に位置する土坑である。長軸100cm×短軸90cmの円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは30cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、検出面の埋土は暗灰色土。

出土遺物 (図版23、第41図9)

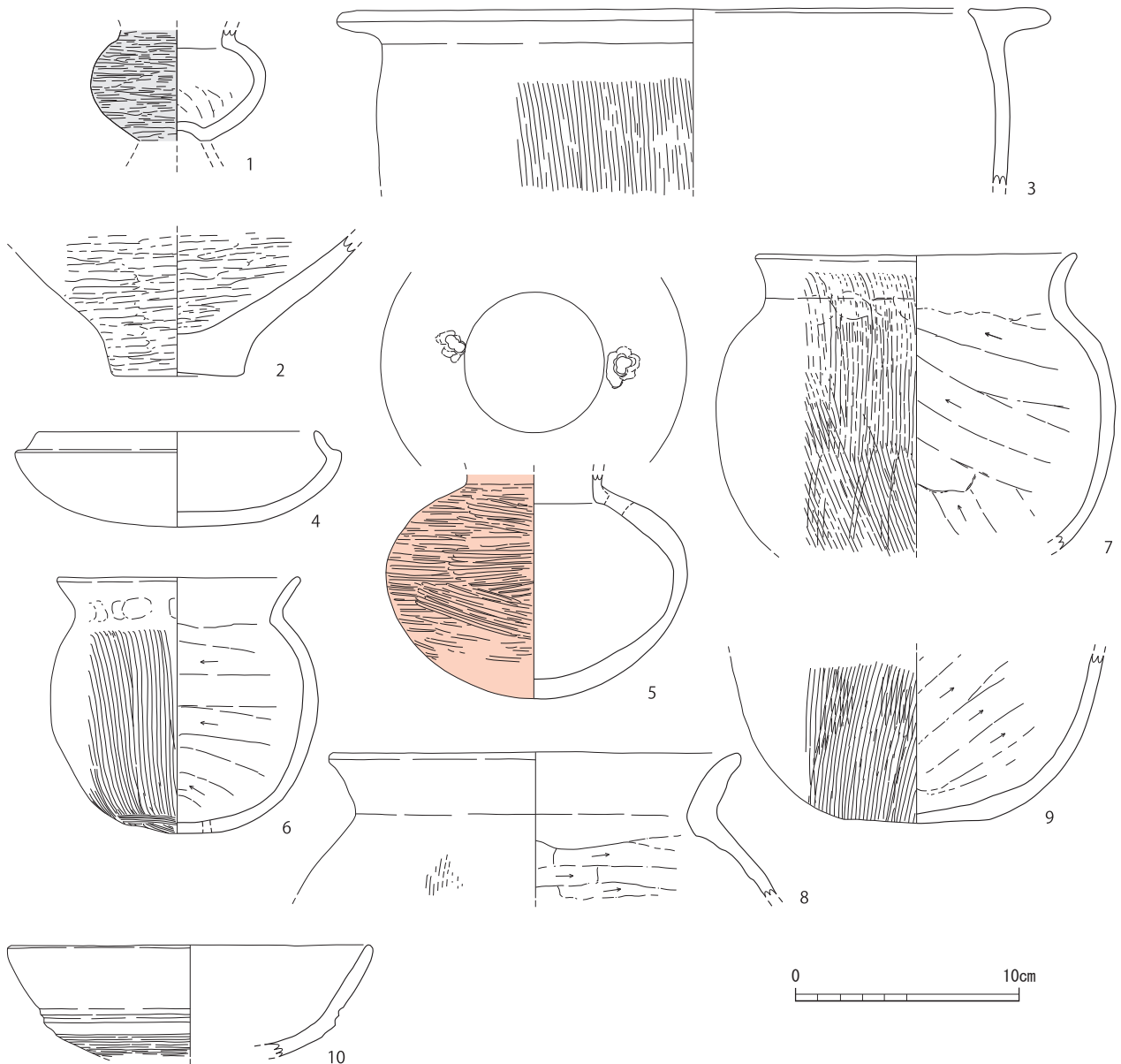
9は土師器甕である。胴部は球状で中位よりやや下に最大径がある。頸部はあまり締まらず、口縁部は内湾気味に開く。内面横ハケ目、外面縦ハケ目調整を行う。

SK-255 (図版2、第42図)

調査区北側にあり、SK-164の東側に位置する土坑である。長軸200cm×短軸180cmの円



第 42 図 SK-240・241・255・302 実測図 (1/40)



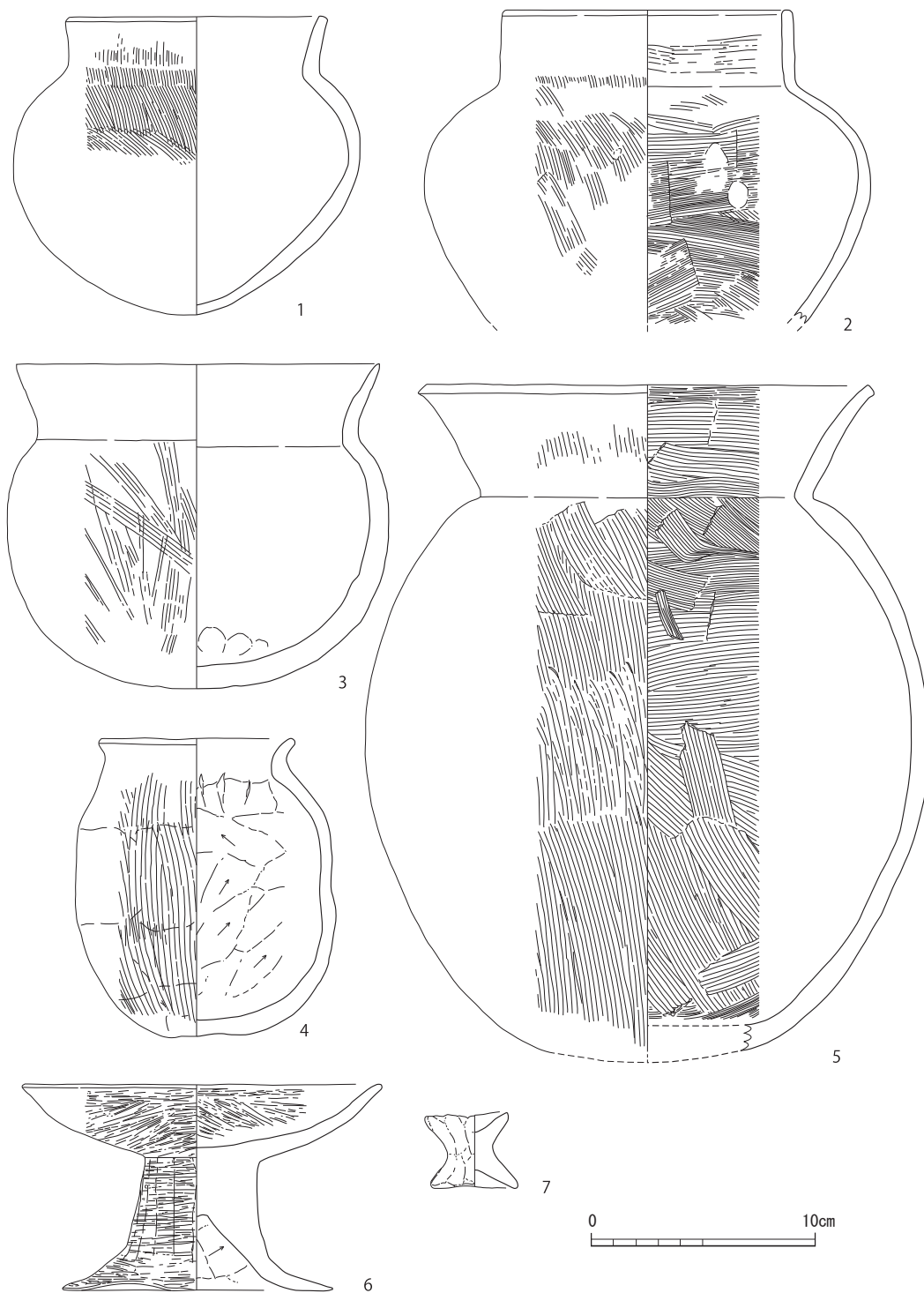
第43図 SK-255 出土遺物実測図(1/3)

形で、底面は北東側が若干浅くなっており、最深部までの深さは120cmである。壁の立ち上がりはオーバーハングしており、断面袋状を呈す。埋土は暗黒色土。

出土遺物 (図版23・24、第43図1~10)

1~3は弥生土器である。1は脚付壺である。胴部は扁球状を呈し脚部、口縁部は欠損する。胴部の外面はヘラ磨き、内面はナデが施される。外面黒塗り。2は壺で、厚底の底部。内外面に、ヘラ磨きによる調整が施される。3は甕で、鋤先状の口縁部。外面はハケ目、内面はナデによる調整が施される。

4~10は土師器である。4は模倣坏である。器表が剥落し調整不明。5は長頸壺で、口縁部は欠損する。外面はヘラ磨き、内面はナデによる調整が施され、外面丹塗りを行う。頸部には穿孔が施される。6~9は甕である。6は小型品。胴部は球状を呈し口縁部は外反気味に開く。胴部内面は横ヘラ削り、外面は縦ハケ目。7は丸味を帯びた球状の胴部で短く外反する口縁部とな



第44図 SK-300 出土遺物実測図(1/3)

る。端部は尖り気味に仕上げる。胴部内面ヘラ削り、外面縦ハケ目調整を行う。8は口縁部が大きく開き、胴部に比べて器壁が厚い。9は丸底の底部で、外面はハケ目、内面はヘラ削りによる調整が施される。10は須恵器を模倣した土師器高坏で、中位に不明瞭な段を有し中位から下にカキ目を施す。他は横ナデ調整を行う。

SK-300

出土遺物 (図版 24、第 44 図)

1～7は土師器である。1・2は壺。1は胴部最大径が上位にあり肩が張った器形となる。頸部は締まらず口縁部がやや外反し、端部は面をなす。内面はナデ、外面上半はハケ目、下半は不整方向のナデを行う。2はやはり肩が張った器形で頸部は締まらず、口縁部は直立する。調整は内面横ハケ目、外面縦ハケ目を行う。

3～5は甕である。3は球形に近い胴部で頸部は締まらず、口縁部はあまり開かず伸びる。内面ナデ、外面は粗い縦ハケ目を行う。4は粗製の小型甕である。胴部は長胴気味で頸部はあまり締まらず、口縁部は短く外反し端部を丸くおさめる。内面はヘラ削り、外面は粗い縦ハケ目調整を行う。5は胴部最大径が中位にあり、口縁部は若干外反しながら開き、端部は面をなす。内面ハケ目、外面は二種類の工具を使用して縦ハケ目調整を行う。

6は高坏である。坏部は浅く、屈曲部をもたない。脚柱部は太く、裾部は短く開き端部は薄く尖る。坏部の内外面及び、脚部外面はヘラ磨きによる調整が施される。柱部内面は横ヘラ削り。7は手づくねによる小型器台である。内外面に指ナデによる調整が施される。

SK-302 (第 42 図)

調査区北側に位置する土坑で、北及び西が他の遺構に切られおり全体の形状は不明である。残存部分は長軸 302cm × 短軸 290cm の円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは 110cm である。壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。埋土は暗黒色土で、中層から下層にかけて 2 枚貝の貝殻が大量に出土した。

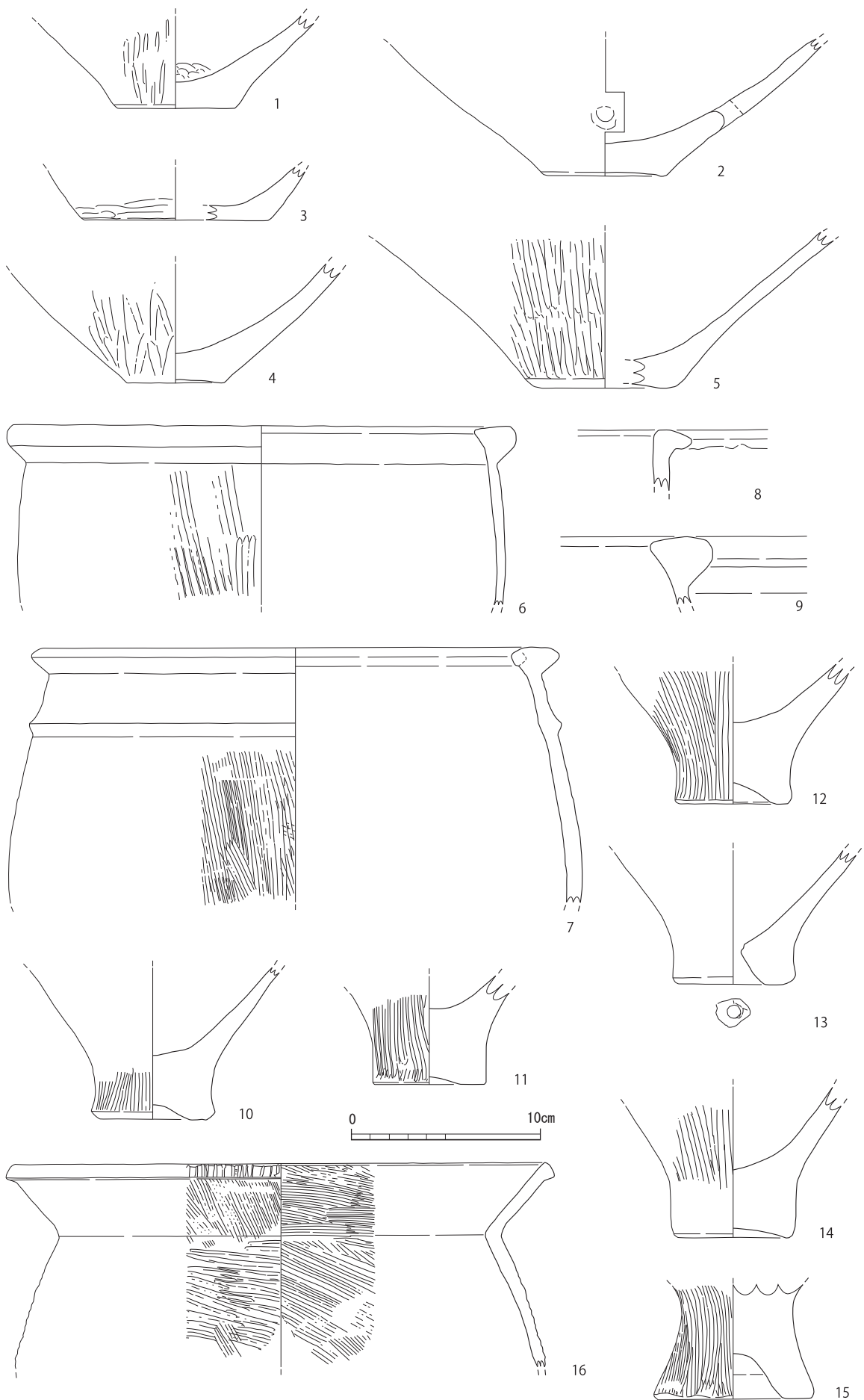
出土遺物 (図版 24、第 45～47 図)

1～15は弥生時代中期の土器である。1～5は弥生土器壺の底部である。1は外面に縦方向のヘラ磨きが認められる。2は底部付近に穿孔を伴う。3は径が大きく、外面には横方向のヘラ磨きが見られる。4、5もやはり縦方向のヘラ磨きを行う。

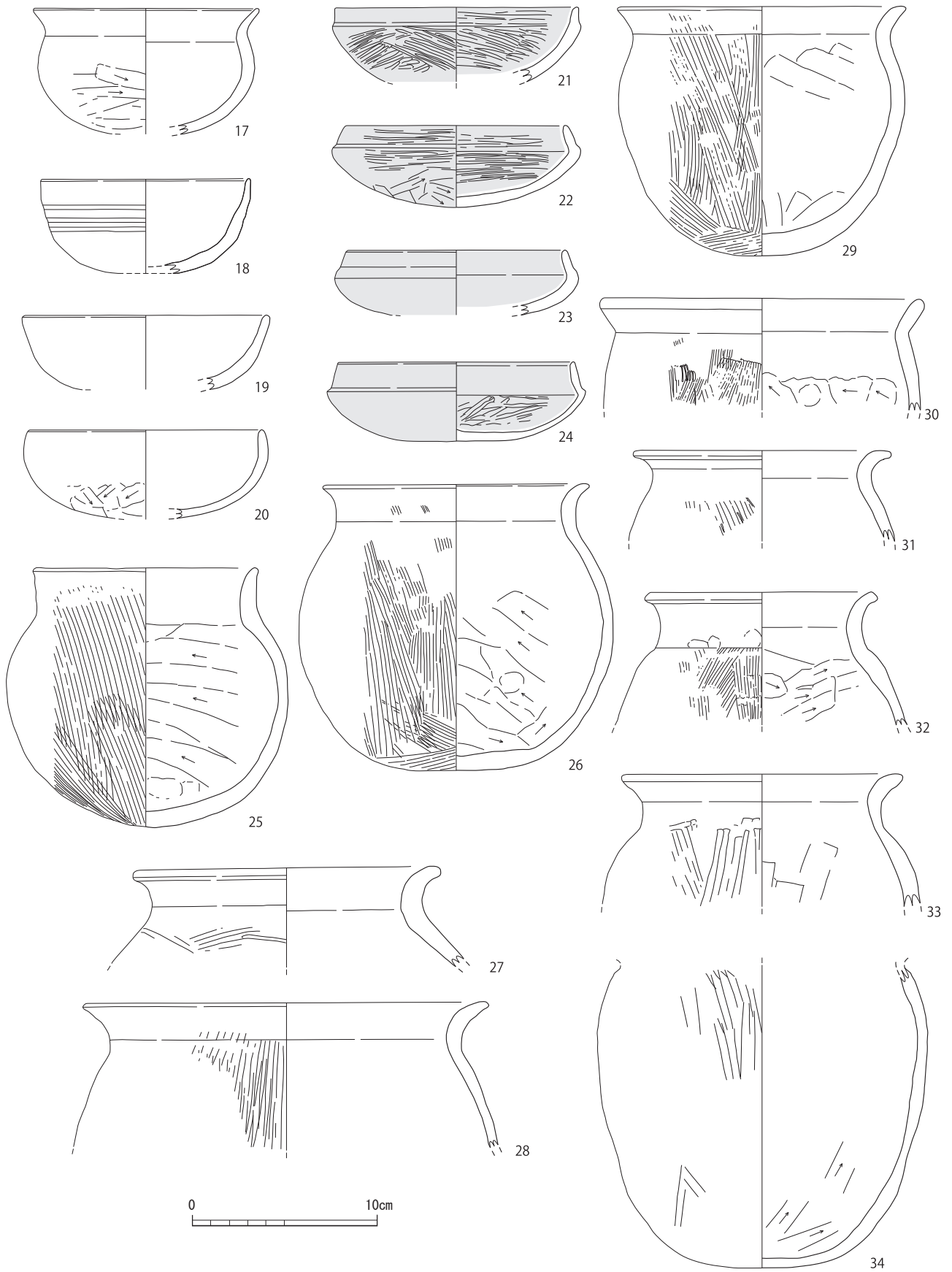
6～16は弥生土器甕である。6～9は断面三角形となる甕口縁部。7の胴部上方には三角形の突帯が貼付される。8は端部の肥厚が小さい。10～14は厚い上げ底の底部で、外面はハケ目による調整が施される。13の底部には、外面からの穿孔が施される。15は高台状の高い脚部をもつ甕の底部である。

16は古墳時代前期の甕である。頸部はあまり締まらず、口縁部との境には明瞭な稜を有す。口縁部は直線的に開き、端部はわずかに肥厚する。口縁端部には刻目を施す。内面横ハケ目、外面は口縁部が縦ハケ目、胴部が横方向のタタキ調整を行う。

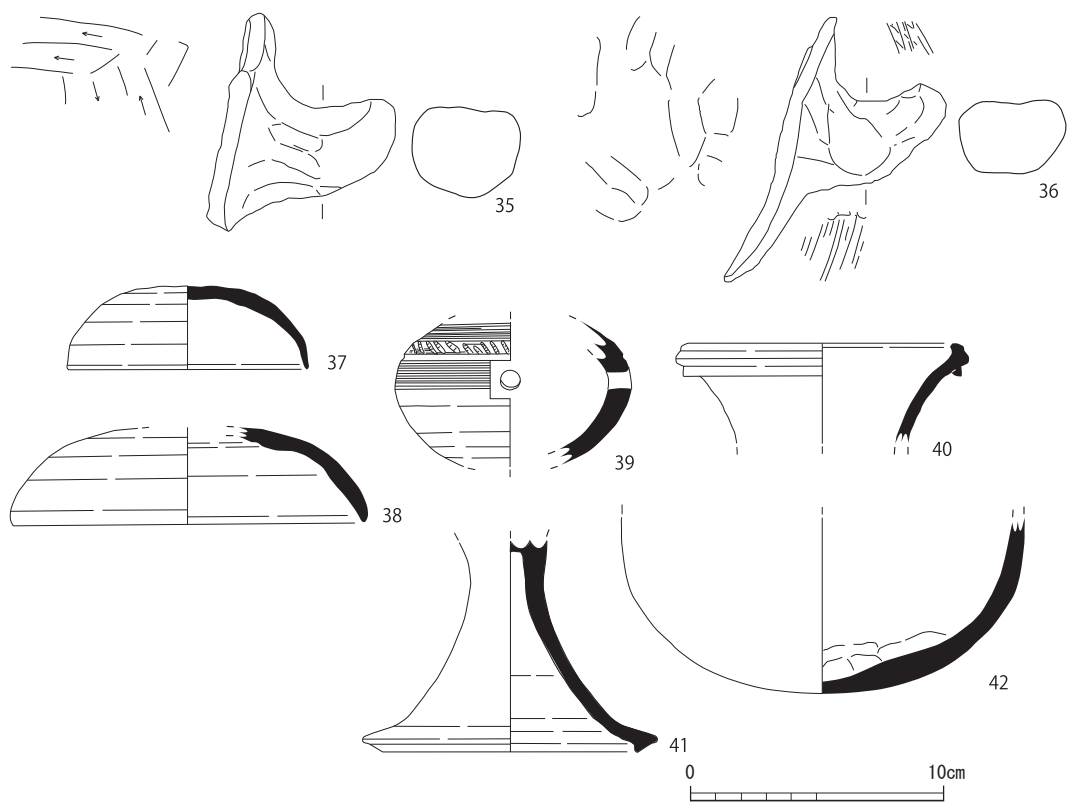
17～36は古墳時代後期の土師器である。17は口縁部が外反する鉢。体部は浅く、頸部はあまり締まらず、口縁部は短く外反する。内面及び口縁部外面は横ナデ、体部下半はヘラ削り調整をする。18～20は土師器碗である。18は半球形で口縁部が直立する。外面には三条の浅い沈線を有することから短頸壺の蓋である可能性もある。19は体部が浅く口縁部が開いた器形となる。20は口縁部が若干内傾する。外面底部は削りが施される。21～24は内外面を黒色磨研する土師器模倣坏である。21の口縁部立ち上がりは短く、段は形骸化している。22の外底部にはヘラ削り調整を行う。24は器壁が薄くシャープな作りである。



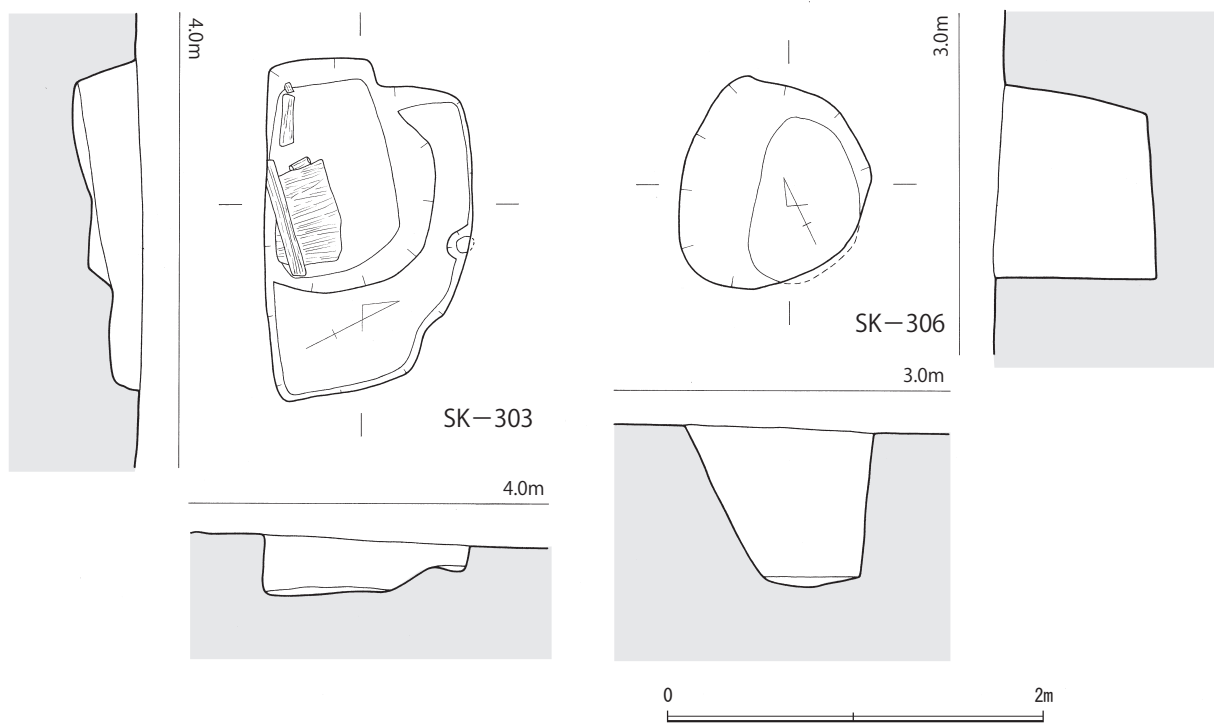
第45图 SK-302 出土遺物実測図① (1/3)



第 46 図 SK-302 出土遺物実測図② (1/3)



第47图 SK-302 出土遺物実測図③ (1/3)

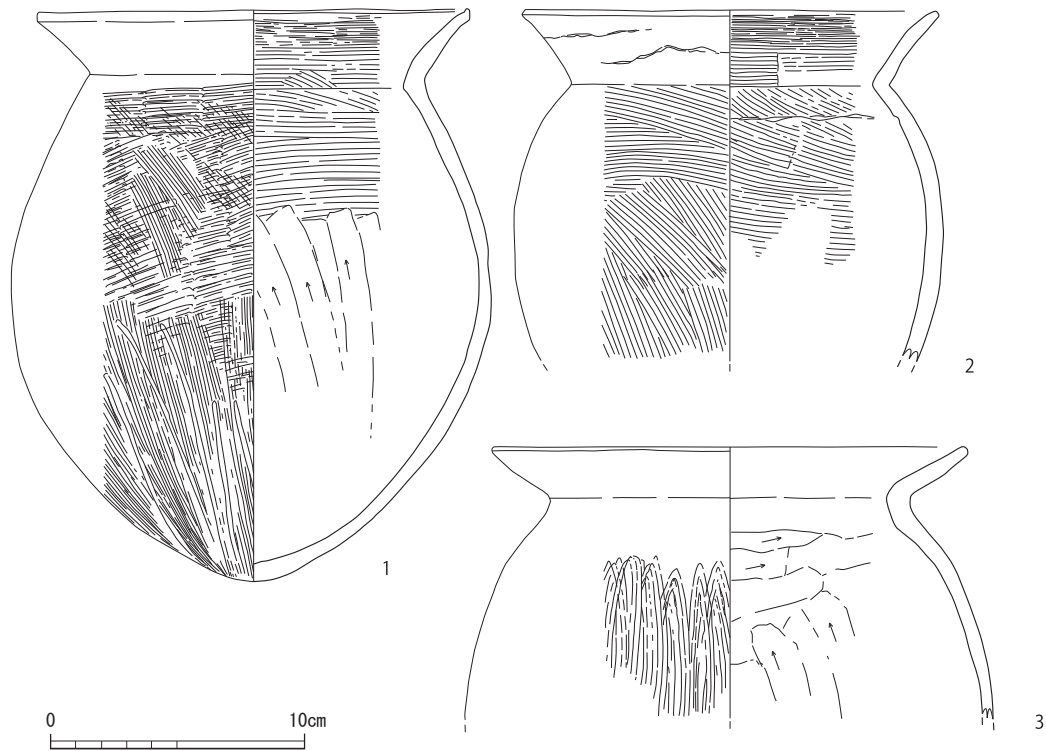


第48图 SK-303・306 実測図 (1/40)



第 49 図 SK-303 出土遺物実測図 (1/3)

25～34 は甕である。25 は胴部が丸く肩が張った器形で、口縁部は垂直に立ち上がり、口縁部下方の器壁が厚くなる。胴部内面は横ヘラ削り、外面は縦ハケ目、口縁部は横ナデ調整を行う。26 は底部が平底気味である。胴部最大径は中位にあり、口縁部は強く外反する。胴部内面はヘラ削り、外面は縦ハケ目調整。27 は胴部に横方向のハケ目を行う。29 は胴部最大径が上位にあり、頸部はあまり締まらず口縁部は強く外反する。内面はヘラ削り、外面は縦ハケ目調整を行



第 50 図 SK-306 出土遺物実測図 (1/3)

う。30 は口縁部の外反が弱く直線的である。32 は頸部が比較的締まった器形となる。33、34 は外面に粗い縦ハケ目調整を行う。35、36 は甑の把手である。35 は短く水平方向に伸びる。36 は屈曲気味に斜め上方を向く。どちらも指成形時の痕跡が明瞭に残る。

37～42 は須恵器である。37 は径が小さく、短頸壺の蓋であろうか。38 は坏蓋である。39 は甕で、扁球形の体部上位にはカキ目、肩部には刺突文を廻らせる。体部下位は回転ヘラ削り調整を施す。40 は甕の口縁部か。口縁部はわずかに外反して開き、下端部にシャープな突帯を巡らせる。41 は高坏の脚部である。裾部は大きく開き、端部を凸帯状に内側に引き出す。42 は提瓶である。内面には指整形時の稜線が残る。

SK-303 (第 48 図)

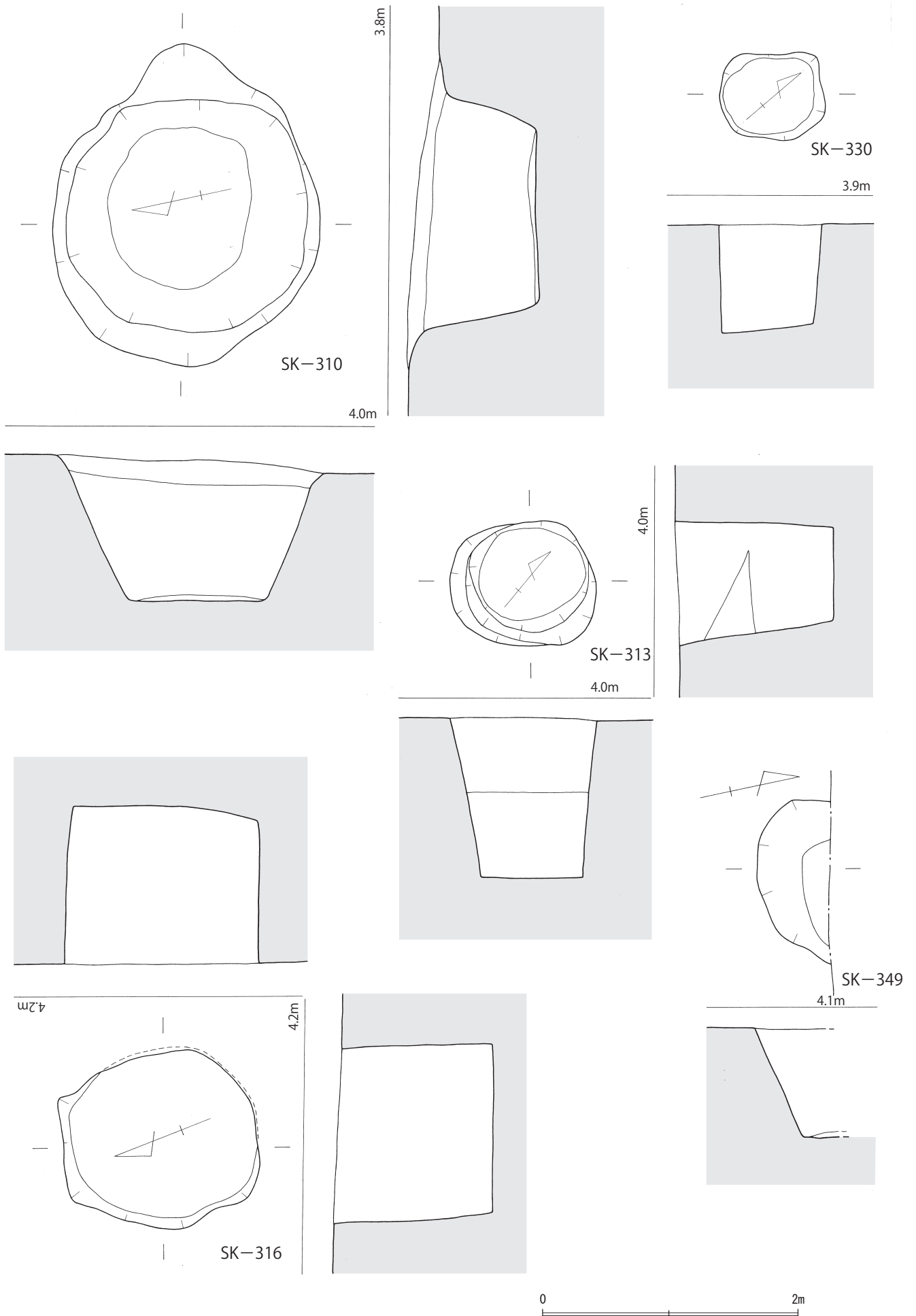
調査区北側に位置する土坑である。長軸 180cm × 短軸 210cm の不整形で、深さは 40cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、北側から東側にかけて幅広のテラス部が認められる。埋土は黒色土で、底面からは礎盤が出土した。

出土遺物 (図版 24・25、第 49 図)

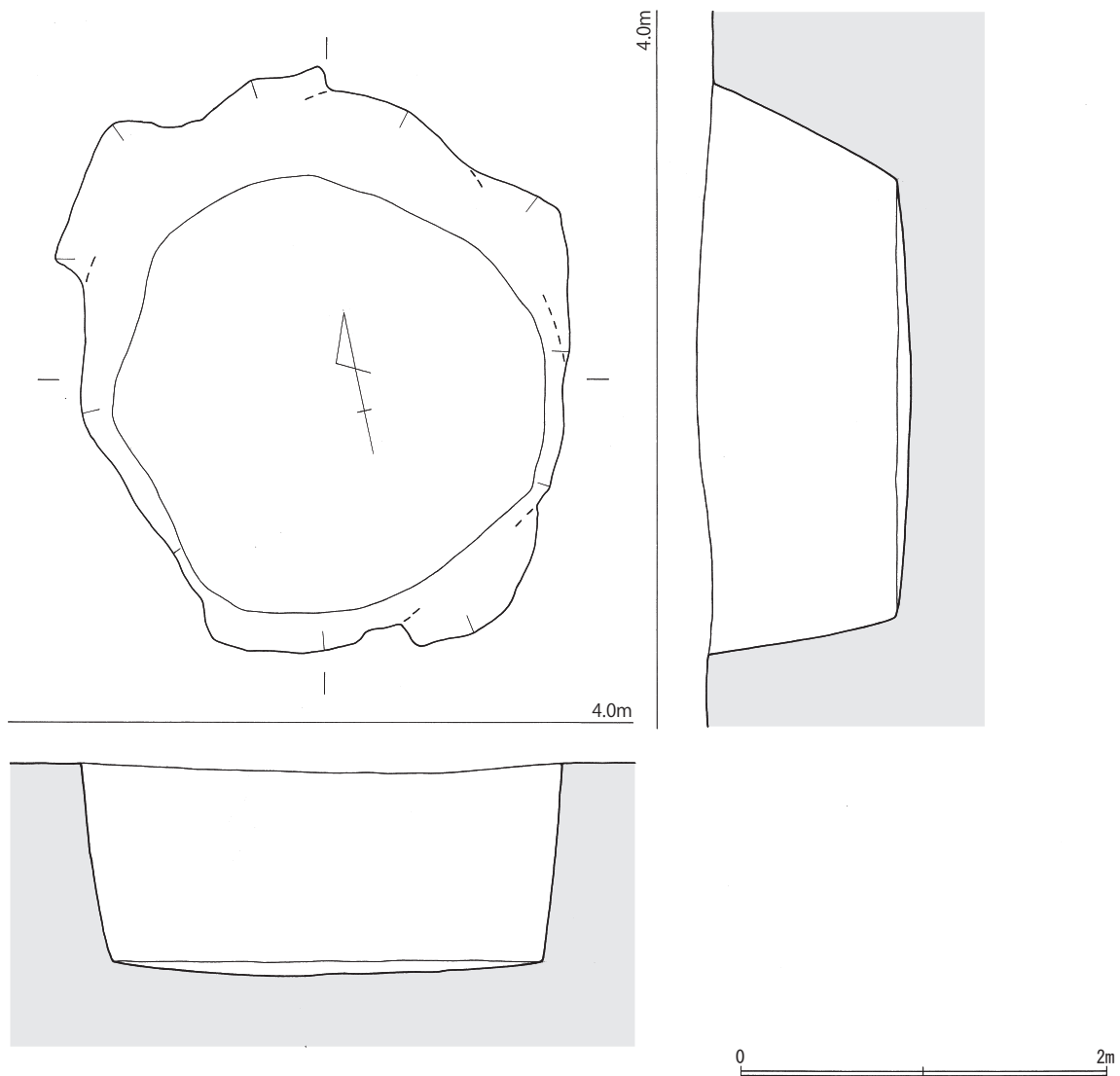
1～3 は弥生時代中期の土器である。1 は広い底部の壺で、外面には横方向のヘラ磨きが認められる。2、3 は甕で、2 は短い鋤先状の口縁部を呈し、外面はハケ目、内面はナデによる調整が施される。3 はあまり厚くない平底の底部で、外面はハケ目、内面は横ナデによる調整が施される。

4 は弥生時代後期終末～古墳時代前期の鉢である。底部は小さな平底を呈し、体部は大きく開いて口縁端部が短く外反する。調整はほとんど横ナデだが外面の底部付近にはタタキが残る。

5～7 は古墳時代後期の土師器である。5、6 は高坏である。5 は脚柱部の径が大きく、裾部は



第51图 SK-310·313·316·330·349 实测图 (1/40)



第 52 図 SK-315 実測図 (1/40)

あまり開かない。外面には丹塗りをを行う。6は5と比較して脚部が長く、裾部は短く外折する。坏部内面にはヘラ磨き、脚部外面には整形時の縦方向の稜線が残る。坏部は内外面、脚部は外面に丹塗りをを行う。7は土師器平瓶である。体部は偏球形で頸部はよく締まり、口縁部はあまり開かず端部は丸くおさめる。内面はナデ、外面は密なヘラ磨きを行う。外面丹塗り。

8、9は須恵器提瓶である。8は小型品で丸味を帯びた器形となる。色調は薄茶色を呈す。9は頸部があまり締まらず、口縁部は大きく外反する。口縁端部は外側に肥厚し、口縁部下に2条の沈線を巡らせる。

SK-306 (第 48 図)

調査区北側に配置する土坑である。長軸 100cm × 短軸 100cm の楕円形で、底面は水平に近く、深さは 80cm である。壁の立ち上がりは東側がほぼ垂直、西側は若干緩やかな傾斜を呈す。

出土遺物 (第 50 図)

1～3は土師器甕である。1は尖底気味で胴部最大径が中位にある。頸部の境は内面に明瞭な稜を有し、口縁部は外反気味に開き、端部は上方にわずかにつまみ上げる。胴部内面下半は縦方向のヘラ削り、上半から口頸部にかけて横ハケ目調整を行う。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は縦ハケ目調整を行うが、上半には先行するタタキが明瞭に残り、下半にはハケ目後に暗文状のヘラ磨きを行っている。器壁はあまり薄くなく、外面には炭化物が多く付着する。2は肩部に丸味を帯びた器形となる。頸部の屈曲は明瞭な稜を有し、口縁部はわずかに外反しながら開く。端部は不明瞭な面をなす。内面は横ハケ目後に胴下半部のみナデ上げる。口縁部外面は横ナデ、胴部外面は上方が横ハケ目、下方が縦ハケ目調整を行う。器壁は比較的厚い。3は口縁部がわずかに内湾しながら大きく開き、端部は丸味を帯びる。内面は屈曲部のやや下にまでヘラ削りが及び、外面は肩部まで縦ハケ目調整を行う。

SK-310 (第 51 図)

調査区東側に位置する土坑である。長軸 250cm × 短軸 210cm の円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは 110cm である。壁の立ち上がりは比較的急な傾斜を呈す。埋土は黒色土。

SK-313 (第 51 図)

調査区南側に位置する土坑である。平面形は長軸 110cm × 短軸 100cm の円形で、底面は水平をなし、深さ 130cm である。壁の立ち上がりは急傾斜を呈し、深さ 60cm のところで稜をなす。埋土は黒色土である。

SK-315 (第 52 図)

調査区南東に位置する土坑である。長軸 300cm × 短軸 260cm の正円形であったが、調査中の崩落により図面作成時は不定形となった。底面はほぼ水平で、深さ 110cm である。壁の立ち上がりは急傾斜を呈す。埋土は黒色土。

SK-316 (第 51 図)

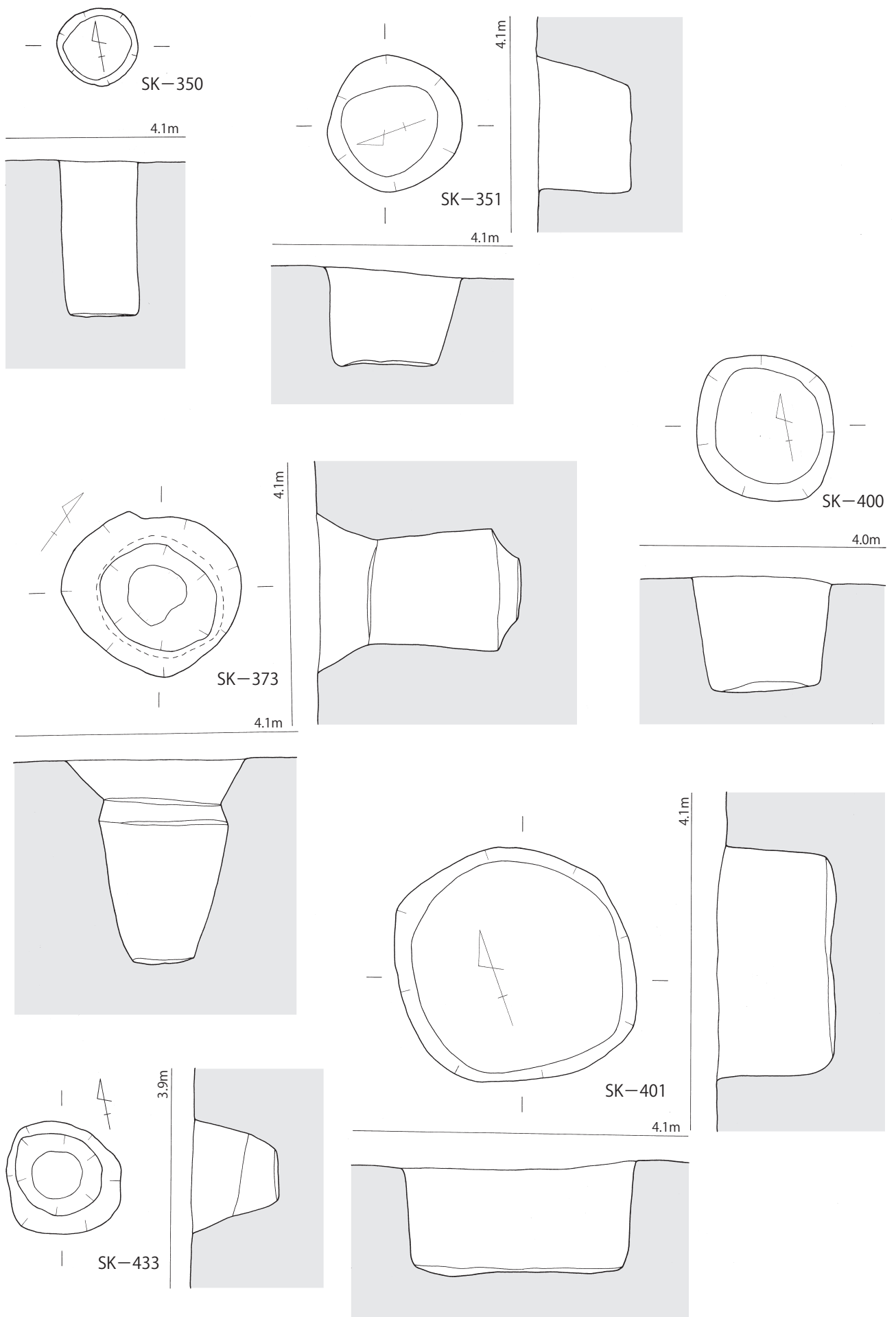
調査区西側に位置する土坑である。長軸 150cm × 短軸 140cm の円形で、底面は水平をなし、深さは 120cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直。埋土は黒色土である。

SK-330 (第 51 図)

調査区東側に位置する土坑である。長軸 80cm × 短軸 70cm の若干歪な円形で、底面は南側が少し深く、深さは 80cm である。壁の立ち上がりはほぼ垂直。埋土は黒色土である。

SK-349 (第 51 図)

調査区西側に位置する土坑である。SD-40 に切られており南側の半分程度しか残っていない。平面形は長軸 130cm × 短軸 50cm の円形で、深さは 80cm である。壁の立ち上がりは急傾斜を呈す。埋土は黒色土である。



第 53 図 SK-350・351・373・400・401・433 実測図 (1/40)

SK-350 (第53図)

調査区中央に位置する土坑で、SD-40を切る。長軸60cm×短軸60cmの円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは120cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈す。埋土は黒色土。

SK-351 (第53図)

調査区北西に位置する土坑である。長軸110cm×短軸100cmの円形で、底面はほぼ水平をなし、深さは70cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈す。埋土は黒色土。

SK-373 (第53図)

調査区北側に位置する土坑である。長軸140cm×短軸130cmの円形で、底面は中央付近が不明瞭に深くなっており、この場所で深さ150cmである。壁の立ち上がりは上方がやや緩傾斜となり、検出面から40cmの深さで稜をなして、そこから下はオーバーハング気味に底面へと続く。断面形状は袋状に近い。埋土は黒色土。

SK-400 (図版14、第53図)

調査区北東に位置し、SD-40を切って営まれる土坑である。長軸110cm×短軸100cmの円形で、底面は水平に近く、深さは90cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈す。埋土は黒色土。

SK-401 (図版14、第53図)

調査区北西に位置する土坑である。長軸180cm×短軸180cmの正円形で、床面はほぼ水平をなし、深さは80cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直を呈す。埋土は黒色土。

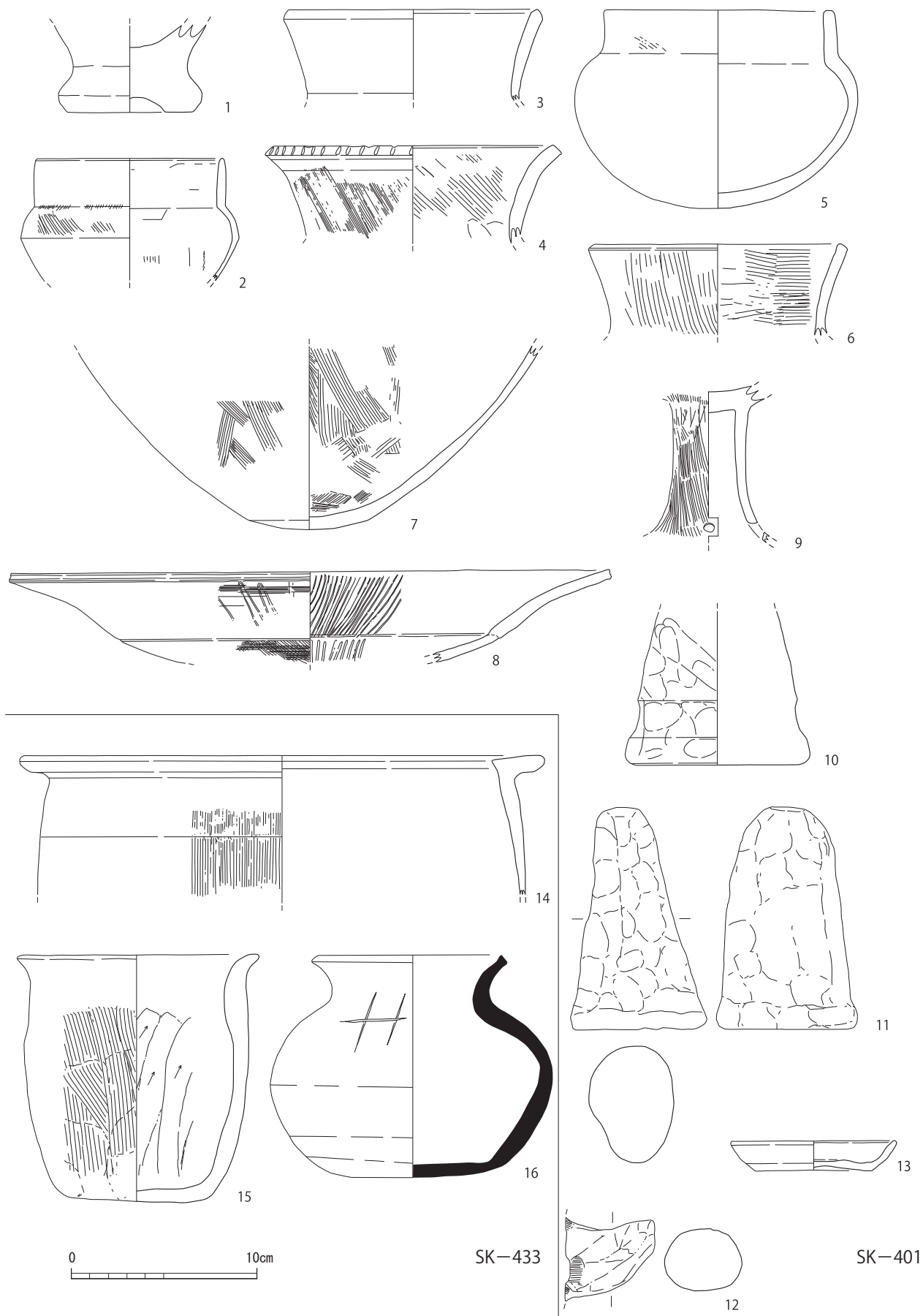
出土遺物 (第54図1～13)

1は弥生土器で甕の底部である。端部は丸味を帯び、底面は丸く窪む。

2～11は古墳時代前期の土師器である。2～6は壺。2は頸部があまり締まらず口縁部は直立する。体部内面と外面の肩部にハケ目が認められる。3は口縁部が直線的にやや開いた形状となる。4は外反しながら開き、端部には刻目を施す。内外面に斜め方向のハケ目調整を行う。5は体部の最大径が上方にあり肩が張った器形で、口縁部は直立し端部は面をなす。調整は全面ナデ調整で、外面の口縁部下には先行するハケ目が見られる。6は外反気味に弱く開く口縁部で、端部は面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目調整を行う。

7は甕の下半部である。底部はレンズ状を呈し、器壁は比較的薄い。内外面ともハケ目調整を行う。8、9は高坏である。8は坏部が浅く、反転部の稜は明瞭ではない。口縁端部には強いナデを加えて沈線状の呈す。内外面に暗文を施文し、外面には先行するハケ目が残る。9は内面ナデ、外面縦ハケ目を行う。10、11は支脚である。中実で扁平な円錐状を呈し、指ナデ、指オサエ整形を行う。

12は古墳時代後期の土師器甕把手部である。端部は若干上方を向き、比較的短い。13は底部糸切りの土師器小皿である。口径9.0cm。



第 54 图 SK-401·433 出土遺物実測図 (1/3)

SK-433 (第54図)

調査区中央に位置する土坑である。長軸90cm×短軸80cmの円形で、床面は中央付近が不明瞭に深くなっており、中央で深さ60cmである。壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜を呈し、途中で稜をなす。埋土は黒色土。

3 溝

SD-40 (図版14、第55、56図)

調査区中央の北寄りに位置する大溝である。東西方向に29m、南北方向に28mを検出したが、東側は調査区外へと続くため端部を確認できていない。屈折箇所角度はほぼ直角である。東西溝で幅約18m、深さは90cm。壁の立ち上がりは西側トレンチの南側では二段の段を有しており、傾斜は比較的緩やかである。北側壁は急傾斜で立ち上がる。東側トレンチ南壁は段を有さず緩やかに立ち上がる。断面を確認する限り、複数回の掘り直しが行われている。出土遺物は弥生時代から中世までの遺物が出土し、覆土中から五輪塔や宝篋印塔の部材が複数出土した。複数回の掘り直しのため、溝の埋土は暗茶色と黄灰色が複雑に堆積する。

出土遺物 (図版25、第57～59図)

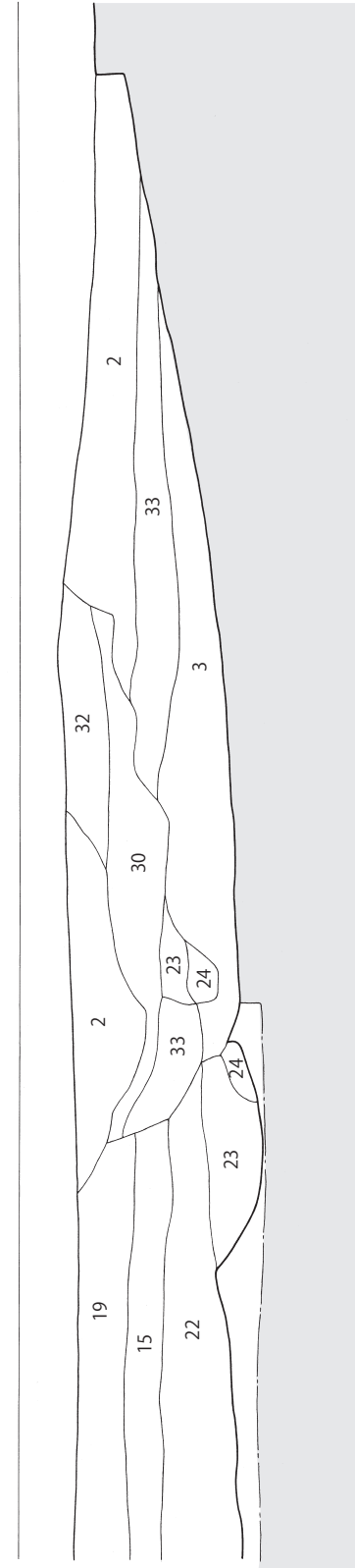
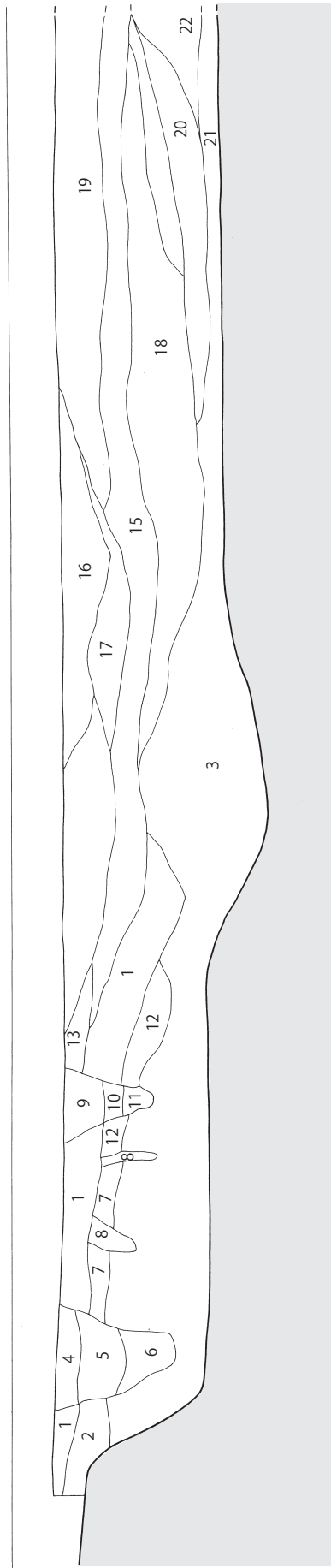
1～21は弥生土器である。1～8は壺。1は水平に長く伸びる鋤先状口縁。2は大きく外反しながら開き、端部は面をなす。内外面ともナデ仕上げを行うが、内面には先行する横ハケ目、外面には縦ハケ目が見られる。3は口縁端部に円形の刺突文を巡らせる。内面にはハケ目が見られる。4は大型壺。口縁端部にヘラ状工具刺突による刻目を施文する。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目調整を行う。5～8は壺の底部である。5は比較的小型品。6は外面に整形時の縦方向の稜が見られる。8は底部に焼成後穿孔を行う。

9～20は弥生土器甕である。9、10は三角口縁の甕。10は薄く端部が垂下した形状となる。11～13は鋤先状の口縁を呈す。14は口縁が屈曲するくの字状口縁。端部は面をなす。15～20は厚い底部で、外面はハケ目調整が施されたものも確認できる。18や20のように底面が強く窪んだものもある。21は筒形器台の鏝部片である。外面は丹塗りが行われる。

22～29は古墳時代後期の土器である。22、23は土師器壺で、22の口縁は若干内湾する。23は浅い体部となる。内外面に細かな磨きが施され、両面ともに丹塗りをを行う。24、25は高坏である。24は直線的に開く坏部で、口縁部のみ短く外折する。内外面とも横ヘラ磨き調整を行う。25は太く短い脚柱部となる。裾部は水平に短く開く。26は土師器甕である。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめられる。胴部に比べて器壁が厚い。胴部外面にはタタキが認められ、須恵器の技法でつくられたことが判る。27は甑の把手部である。太くて短く、端部はわずかに上方を向く。28、29は須恵器である。28は小型品であり、蓋であろう。内側にかえりを有する。29は坏身である。

30～49は土師器小皿である。全て糸切り。30～37は径が小さく、体部が直線的に開く。38～49はやや径が大きく、底端部がシャープで体部が直線的に開くものもある。50は高い高台を有す。

51、52は瓦器壺である。51は内外面に横方向の粗いヘラ磨きが認められる。52は低い台形状の高台を有す。



- 1. 黒灰褐色土
- 2. 淡黄灰褐色土
- 3. 青灰色土
- 4. 黒灰褐色土
- 5. 淡黄灰褐色土
- 6. 青灰色土
- 7. 灰黄褐色土

- 8. 黒褐色土
- 9. 黒灰褐色土
- 10. 暗黒灰褐色土
- 11. 黒灰褐色土
- 12. 灰黄色土
- 13. 黒灰褐色土

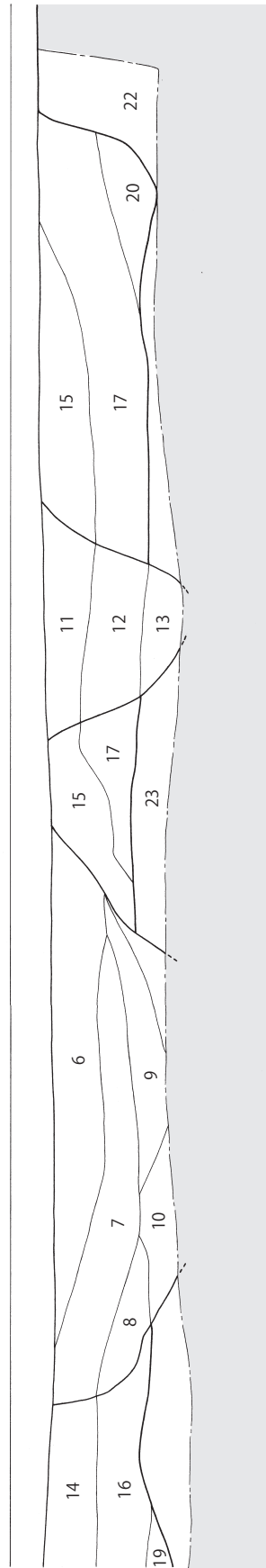
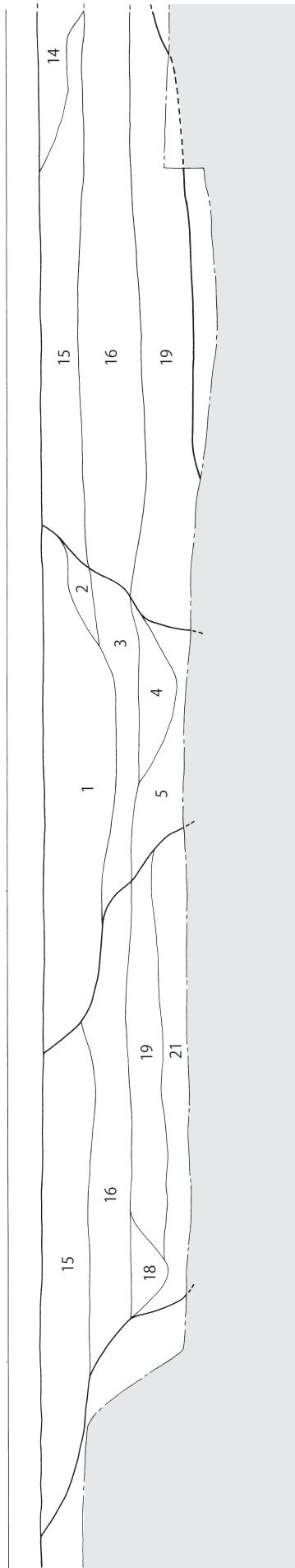
- 14. 暗灰褐色土
- 15. 青灰色土
- 16. 黒褐色土
- 17. 灰褐色土
- 18. 青灰色土
- 19. 淡黄灰褐色土
- 20. 青灰色土

- 21. 青灰色土
- 22. 青灰色土
- 23. 青灰色土
- 24. 灰褐色土
- 25. 淡黄灰褐色土
- 26. 淡黄灰褐色土
- 27. 淡黄灰褐色土

- 28. 暗青灰色土
- 29. 青灰色土
- 30. 暗灰褐色土
- 31. 青灰色土
- 32. 暗灰褐色土
- 33. 淡黄灰褐色土



第55图 SD-40 東側断面実測図 (1/40)



- 1. 明黒褐色土
- 2. 灰黄褐色土
- 3. 灰黄褐色土
- 4. 灰色
- 5. 明黒褐色土
- 6. 明黒褐色土 + 灰褐色
- 7. 黒褐色土
- 8. 灰黄褐色土
- 9. 茶灰色粘土
- 10. にぶい青灰色

- 11. 明黒褐色土
- 12. 茶灰色土
- 13. にぶい青灰色
- 14. 黒褐色土 + 茶褐色
- 15. 黒褐色土
- 16. 茶灰色粘土
- 17. 明るい黒褐色土
- 18. 灰色
- 19. 青灰色粘土
- 20. 黄褐色 + 黒褐色

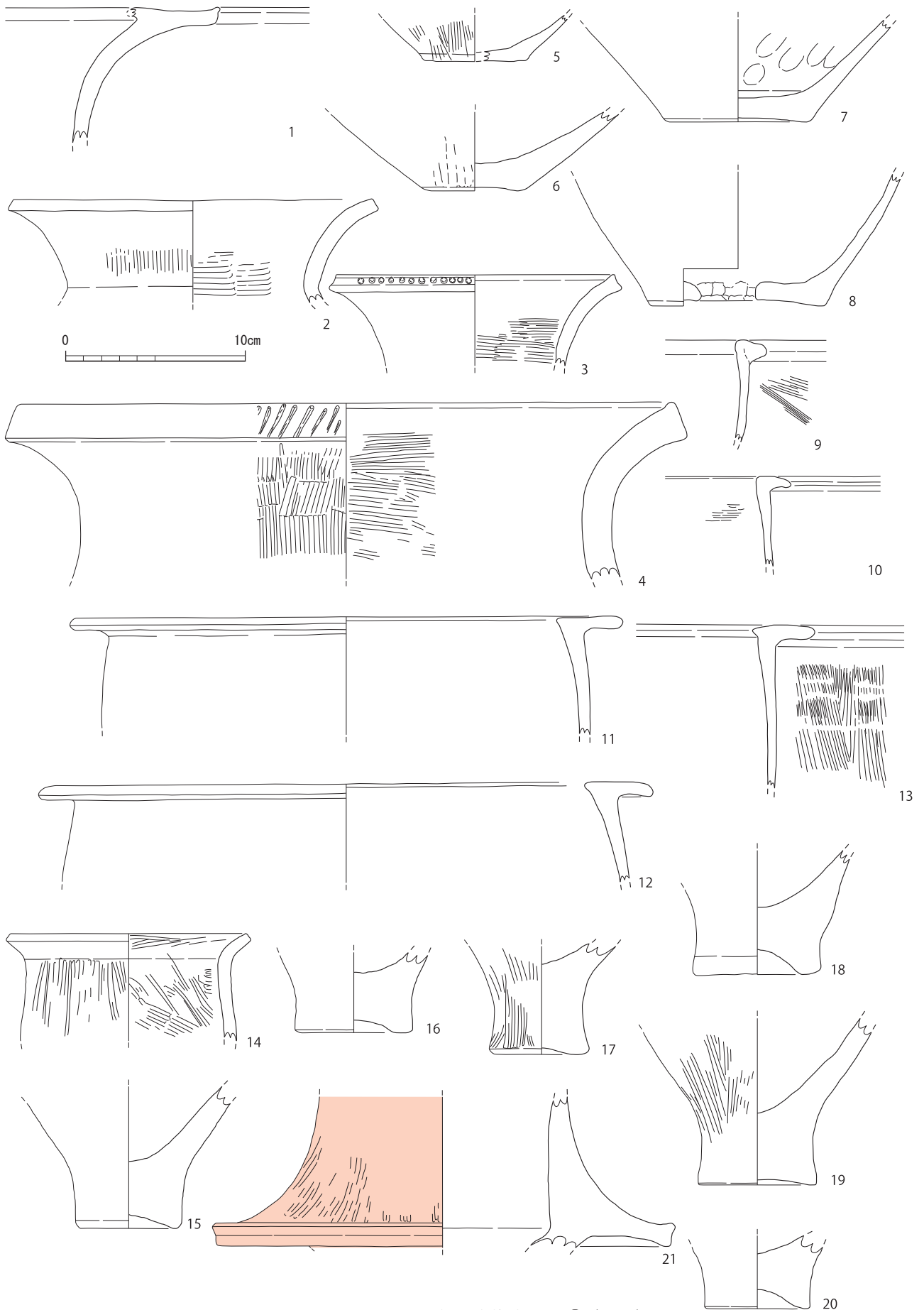
- 21. 青灰色粘土
- 22. 黄褐色粘土
- 23. 青灰色粘土

- 粘質弱い
- 粘質あり
- 粘質あり
- 粘質土
- 粘質土
- 粘質やや弱い
- 粘質あり
- 粘質あり
- 粘質強い
- 粘質強い

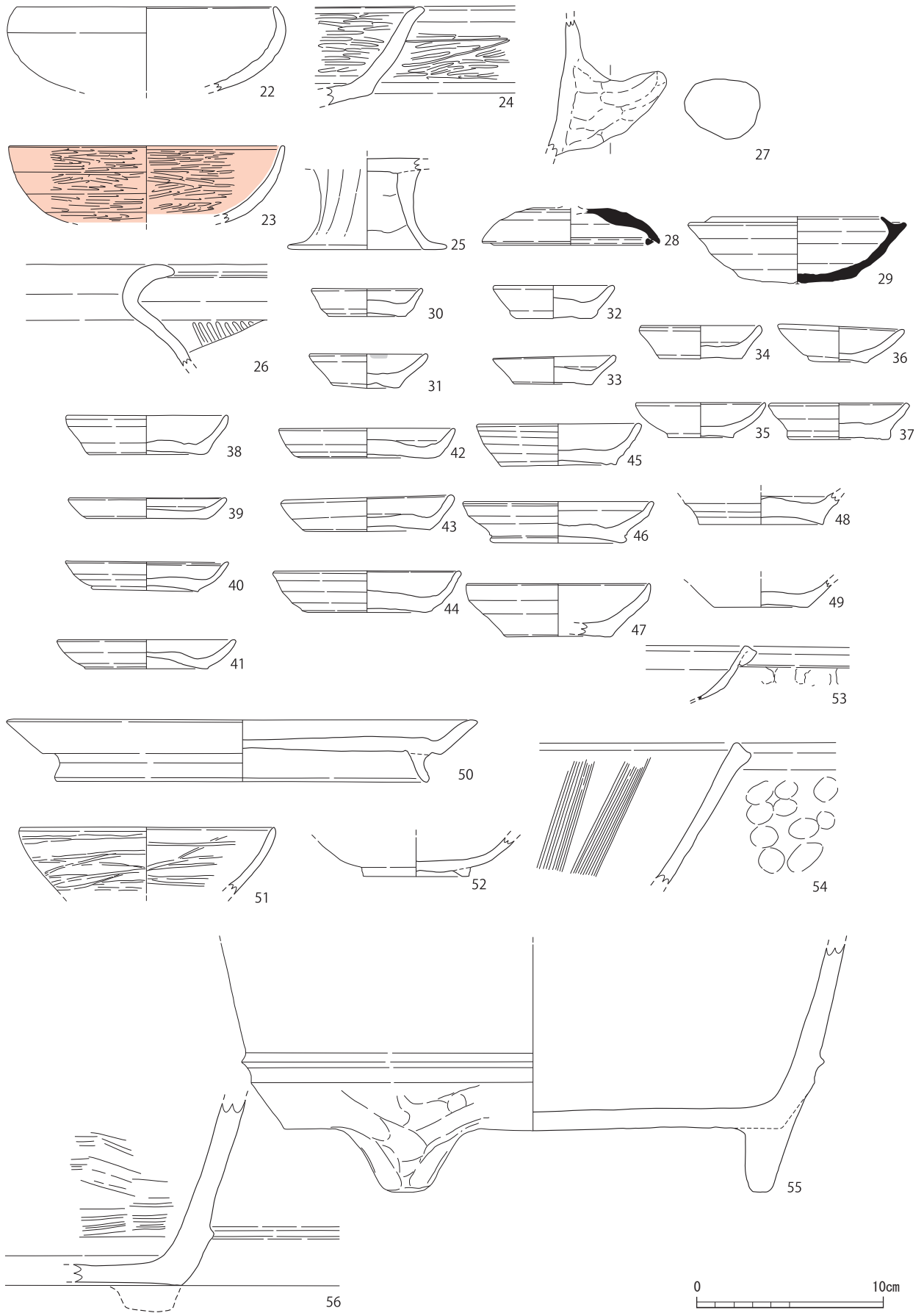
- 粘質あり
- 粘質あり
- 粘質土
- 粘質あり
- 粘質若干あり
- 粘質あり
- 粘質あり
- 粘質あり
- 粘質土
- 粘質土



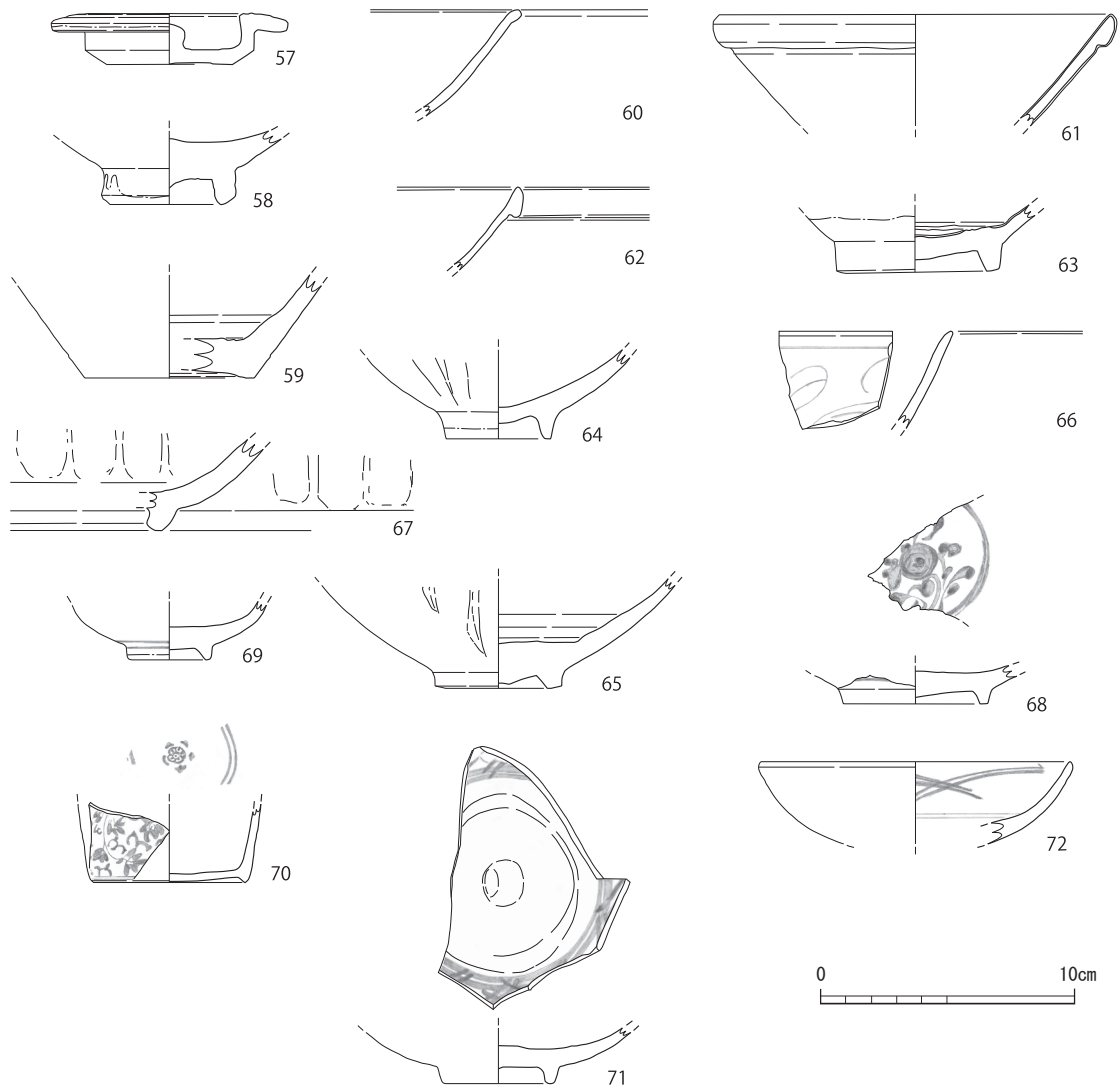
第56図 SD-40 西側断面実測図 (1/40)



第 57 图 SD-40 出土遺物実測図① (1/3)



第 58 图 SD-40 出土遺物実測図② (1/3)



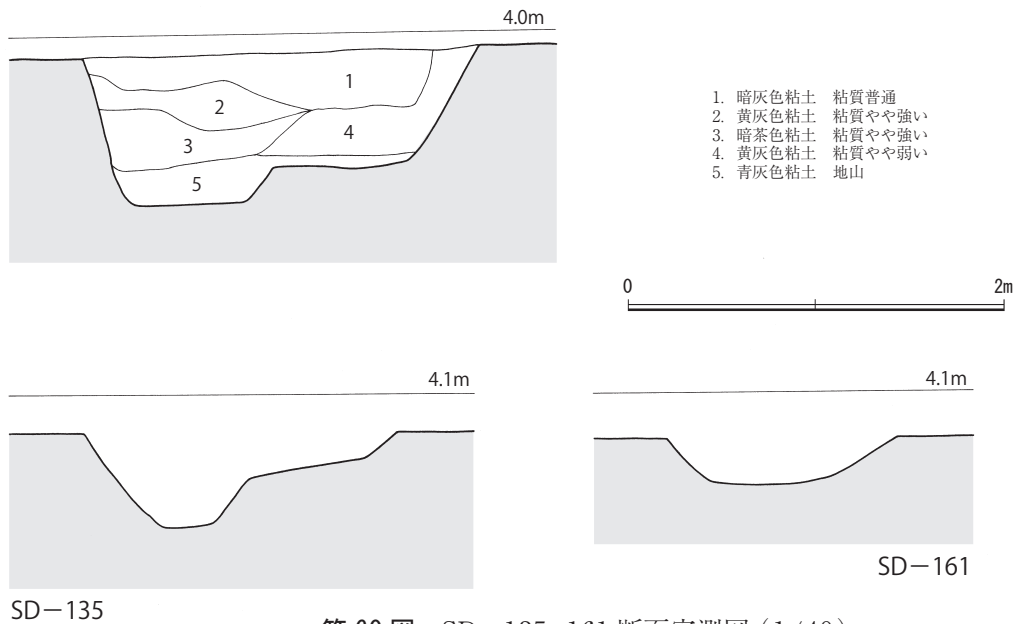
第59図 SD-40 出土遺物実測図③ (1/3)

53は土師質土鍋である。口縁部は端部を外側に折り返して肥厚させる。調整は内外面とも横ナデで、外面口縁部下には指圧痕が残る。54は須恵質の播鉢で、口縁は端部に向かってわずかに肥厚し、端部は強いナデにより凹面を形成する。摺り目は12本で1単位とし、外面は指圧痕が多く残る。55、57は瓦質火鉢で、体部はあまり開かず直線的に伸びる。55の底部には付された脚が残っており、計3ヶ所に付される。57も、底部に脚貼付の痕跡が確認できる。

57～59は陶器である。57は蓋で、宝珠状の摘みを伴う。底部は露胎で外面は鉄釉を施釉する。57は碗の底部で、器壁は厚く、高台から上方にかけて鉛釉を施釉されており、高台底部から底部には釉は施されていない。59は壺の底部で、底部の器壁は厚い。内面、外面ともに露胎である。

60～63は白磁碗である。60は端部がわずかに外反する。61は肉厚な玉縁を伴い、内外面に施釉される。62はやや扁平の玉縁状の口縁を呈し、内外面共に施釉される。63は内面見込みの釉を環状に掻き取り、高台は器壁が厚く鈍重である。内面底部には重ね焼の痕跡が残る。

64、67は青磁である。64はやや高い高台の碗で、高台内面を深く割り中央が凸状となり、内



第 60 図 SD-135・161 断面実測図 (1/40)

外面に施釉が施される畳付部分のみ露胎となる。65 は底部及び高台が肉厚で、高台は低い台形状を呈し、外面には省略化された蓮弁文を施す碗。66 も碗である。器壁は薄く、口縁端部は鋭く尖る。内面は、省略化された蓮弁文を施す。67 は盤か。肉厚で低い高台を伴い、内外面に省略化された蓮弁文を施す。高台も含めて全面施釉する。

68～72 は染付磁器である。68 は明染付。台形型の高台を有し底部中央は突出する。内面底部には、花文を施す。69 は小型の碗で、底部は厚く畳付のみ露胎となる。70 は猪口で外面に唐草文、内底面にこんにゃく印の花文を施す。71、72 は碗で 71 の内面は輪状に釉を掻き取り砂目を確認できる。72 は内面に草文を施す。

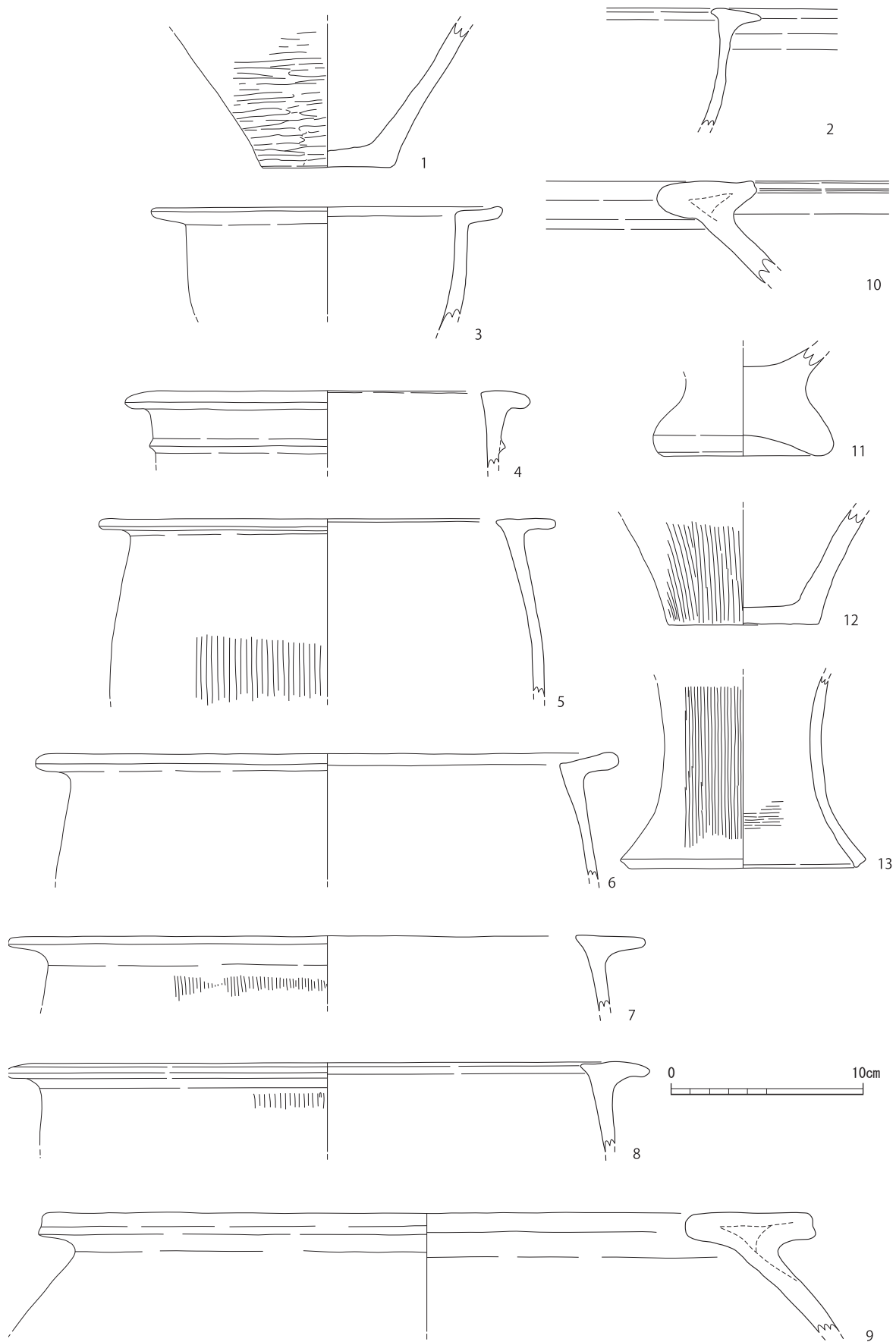
SD-135 (図版 15、第 60 図)

調査区南西に位置する溝である。東西方向に延び、西側は調査区外へと続く。長さ 15.5m、幅約 200cm、深さは 80cm。壁は比較的急傾斜で立ち上がっており、土層図箇所では南側が段を有して深くなっている。

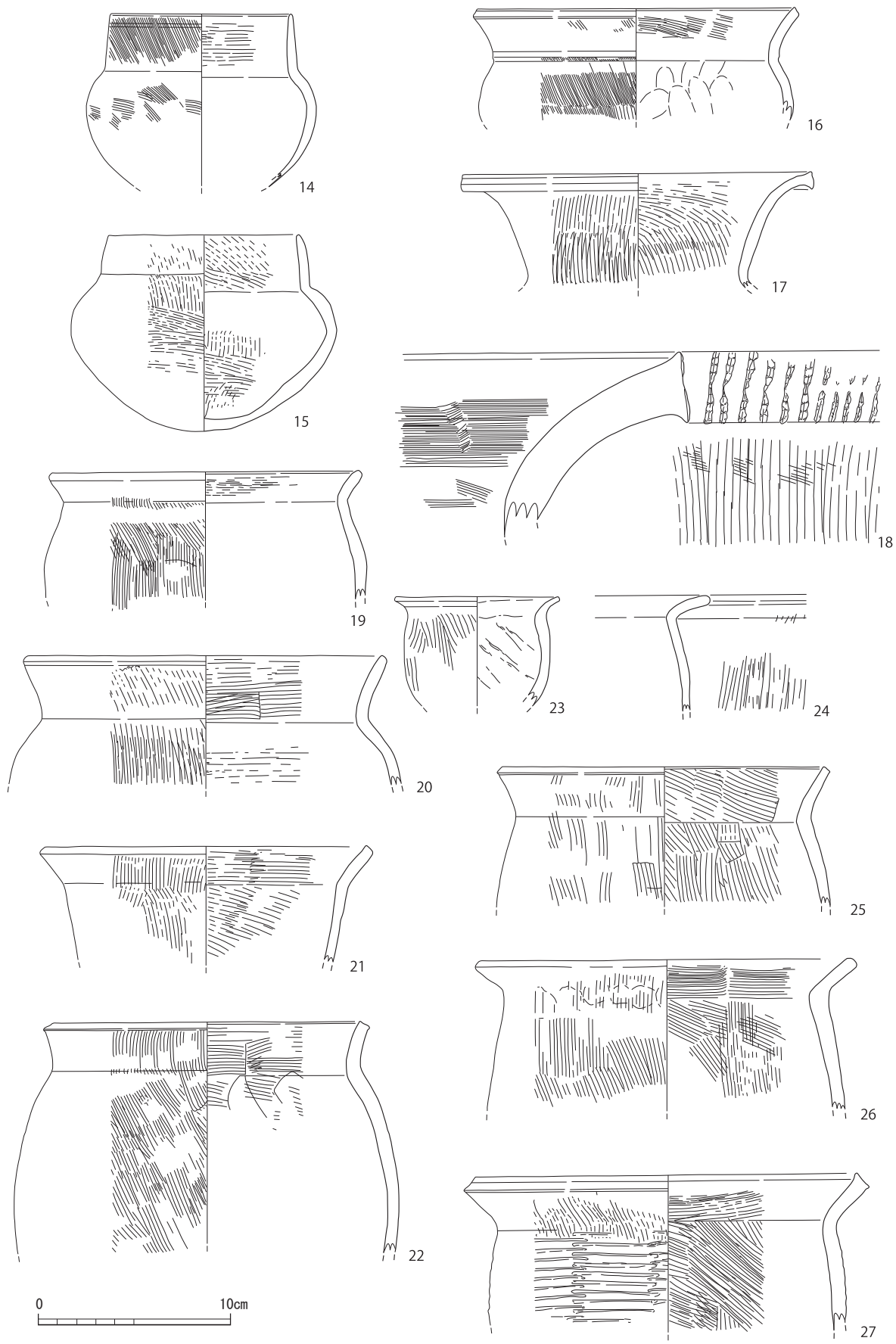
出土遺物 (図版 25・26、第 61～63 図)

1～13 は弥生土器である。1 は壺底部片で、ちいさな平底からあまり開かず体部へと至る。外面は横へら磨き、内面はナデによる調整が施される。2～10 は甕口縁部である。2～8 は鋤先状口縁を呈す。4 は口縁部下に三角突帯を巡らせる。2、5、7、8 の口縁部は内側にもわずかにつまみ出される。9、10 は大型甕の口縁部で、内側に長く伸び、上面に水平面を形成する。11、12 は甕の底部で、11 は脚台状の厚い上げ底、12 は薄い平底を呈する。13 は器台で、器壁は薄く整った形状を呈する。外面はハケ目、内面はナデによる調整が施される。

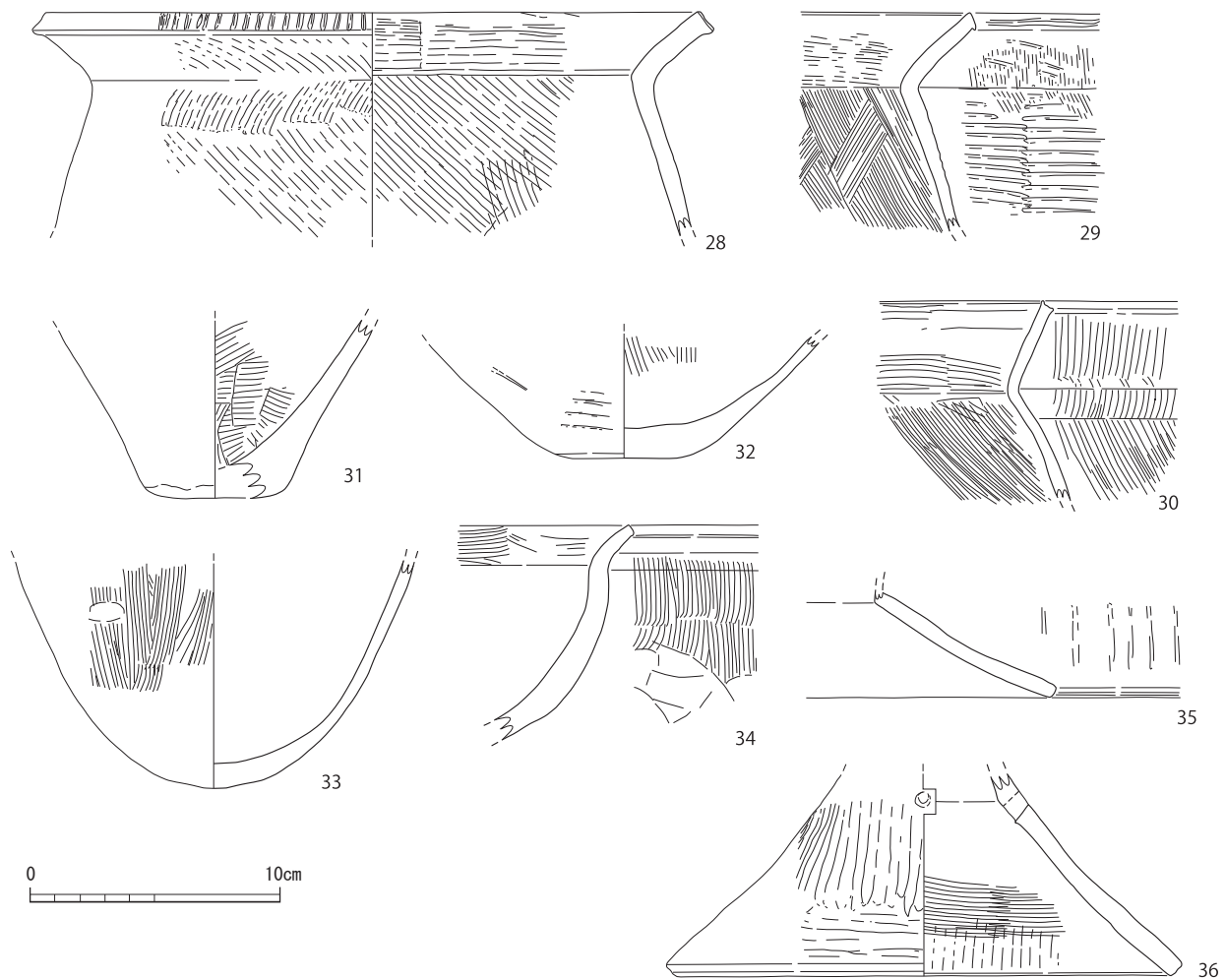
14～36 は弥生時代後期末～古墳時代前期頃の土器である。14～18 は壺。14、15 は直口縁の中型壺で、胴部最大径は上位にあり、口縁は頸部からほぼ直上に伸び、体部は扁球形を呈する。15 は内外面にハケ目が見られる。16 は頸部があまり締まらず口縁部が大きく外反する。



第 61 图 SD-135 出土遺物実測図① (1/3)



第 62 图 SD-135 出土遺物実測図② (1/3)

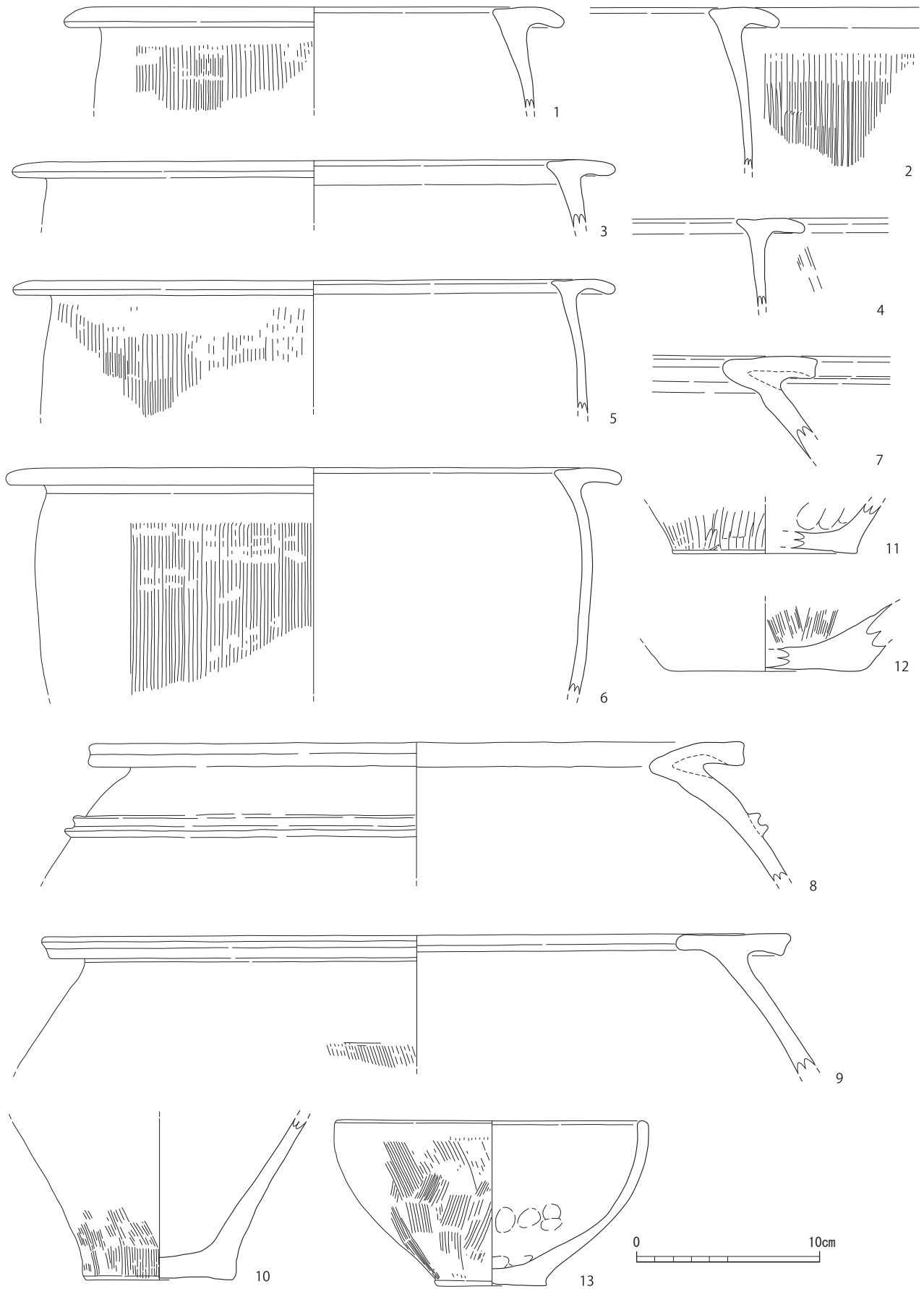


第63図 SD-135 出土遺物実測図③ (1/3)

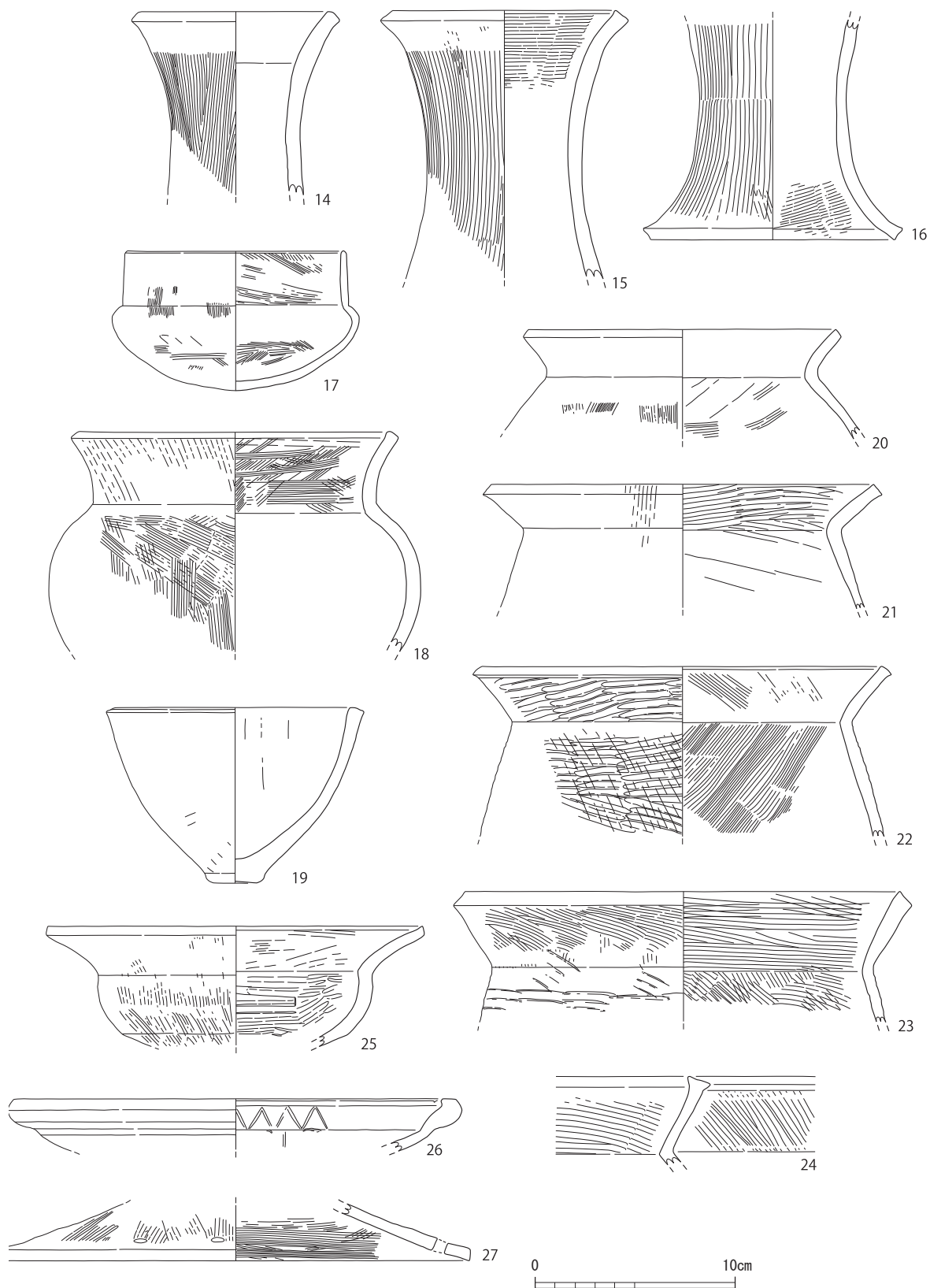
端部は面をなす。17は頸部が直線的に開き、口縁部付近が大きく外反する。端部は強い横ナデを加えて面をなす。内外面ハケ目調整。18は大型品。外反しながら大きく開き、端部にはハケ目状工具による刻目を施文する。内面横ハケ目、外面縦ハケ目。

19～33は甕である。19は口縁部が短く外反する。20は丸く肩が張った器形で、口縁部は外反しながら長く開く。21は頸部が締まらず直線的に開いた胴部から、さらに屈折して開いた口縁部へと至る。端部は面をなす。22は丸味を帯びた胴部で頸部はあまり締まらず、短く外反する口縁部へと至る。端部は明瞭な面をなす。23は小型品。頸部は締まらず口縁部は短く外反する。端部付近の器壁は薄い。内面にはナデによる稜線、外面には粗い縦ハケ目が認められる。24は屈折部に不明瞭な稜を有したく字口縁の甕。25は直線的に開く口縁部の甕。端部は面をなす。26はやはり直線的に口縁部が開き、端部は丸くおさめる。27は口縁端部の内側を上方につまみ出す。内面ハケ目、外面タタキ調整を行う。28は頸部が比較的締まり、口縁部は直線的に開く。端部には刻目を施文する。内外面粗いハケ目調整を行う。29は胴部外面にタタキが見られる。30は口縁端部に強い横ナデを加えてシャープな端部を形成する。内外面ハケ目調整。

31～33は底部片である。31は径が小さくて角が丸味を帯びた底部となる。内面にはハケ目が見られる。32はわずかにレンズ状となる底部で、内面ハケ目、外面タタキが確認できる。33は尖底気味の丸底である。内面ナデ、外面ハケ目。



第 64 图 SD-161 出土遺物実測図① (1/3)



第 65 図 SD-161 出土遺物実測図② (1/3)

34は鉢である。口縁部は短く外反し、端部は面をなす。口縁内面はナデ、外面上方はハケ目、下方はヘラ削りによる調整が施される。35、36は高坏の脚部である。35はわずかに外反しながら大きく開き、端部は面をなす。外面には縦方向の暗文が認められる。36は直線的に開く裾部で、端部はやはり面をなす。裾部上方に穿孔が施され、内面には横ハケ目、外面上方は縦ヘラ磨き、下方には横ヘラ磨きが認められる。

SD-161 (図版 15、第 60 図)

調査区西側に位置する溝である。南北方向に延び、長さ 10m、幅約 120cm、深さ 50cm。壁の立ち上がりは比較的緩やかな傾斜を呈す。

出土遺物 (図版 26、第 64・65 図)

1～9は弥生中期の甕口縁部である。1～6は外端部が若干垂下した鋤先状口縁を呈す。内面はわずかに突出し、外端部は丸みをもっておさまられる。7～9は大型品。内側に長く伸び、端部は丸くおさめる。8は外面口縁部下にM字状突帯を巡らせる。

10～12は底部片。薄い平底の底部で、外面はハケ目調整が施される。12は底部の角が丸味を帯び、内面にはハケ目が見られることから弥生時代後期終末～古墳時代前期のものであろう。

13は素口縁の弥生時代中期の鉢で、口縁部付近はやや内湾する。外面はハケ目調整が施され、内面は指圧痕が残る。14～16は弥生時代中期の器台で、器壁は薄く筒型を呈する。外面はハケ目、内面はナデによる調整が施される。

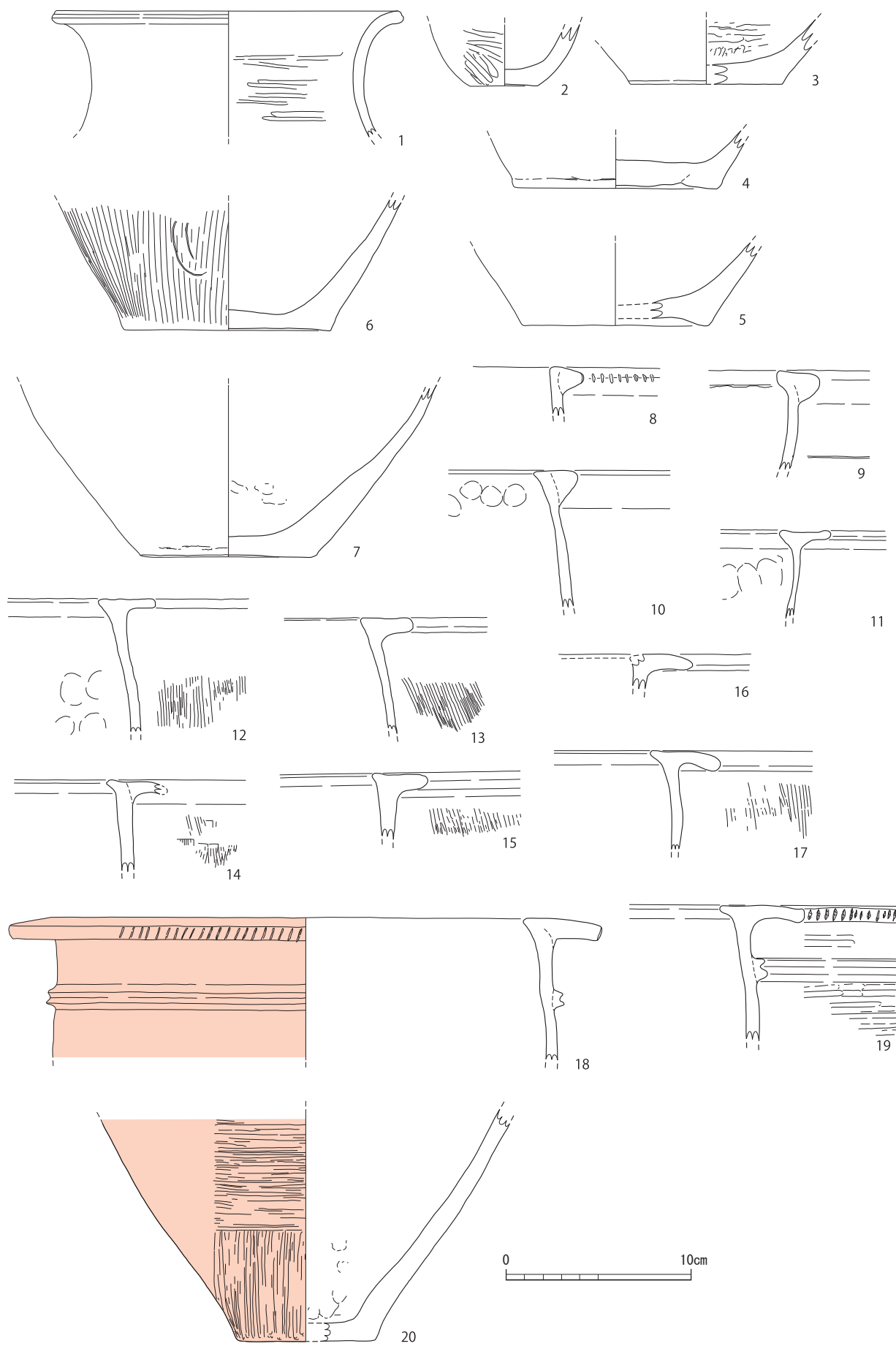
17、18は土師器壺である。17は頸部が締まらず口縁が頸部からほぼ直上に伸び、体部は扁球形を呈する。内外面ともハケ目が認められる。18は最大径が上位にあり、口縁が頸部から緩やかに外反し、端部は面をなす。外面はハケ目、内面はナデによる調整が施される。19は小型の鉢である。底部は小さな平底で体部の丸味は少ない。口縁部は素口縁で平坦面をなす。内外面ともナデ調整を行う。

20～24は土師器甕である。20は屈曲部の稜は不明瞭で、口縁部はわずかに外反気味に開く。端部は面をなす。胴部内面にはハケ目が認められる。21～24は屈曲部に明瞭な稜を有し、口縁部は直線的に開く。端部は明瞭な面を有し、24は内外につまみ出される。22、23の外面にはタタキが確認できる。25は鉢または高坏であろう。扁平で丸味を帯びた体部から長い口縁部が外反して開く。端部は内面を上方に尖らせる。26、27は高坏である。26は口縁端部が肥厚し、内端部をつまみ出す。口縁内面には暗文による連続三角文が施される。27は大きく開く脚部で、内外面ともハケ目が施され、2ヶ所に穿孔が認められる。

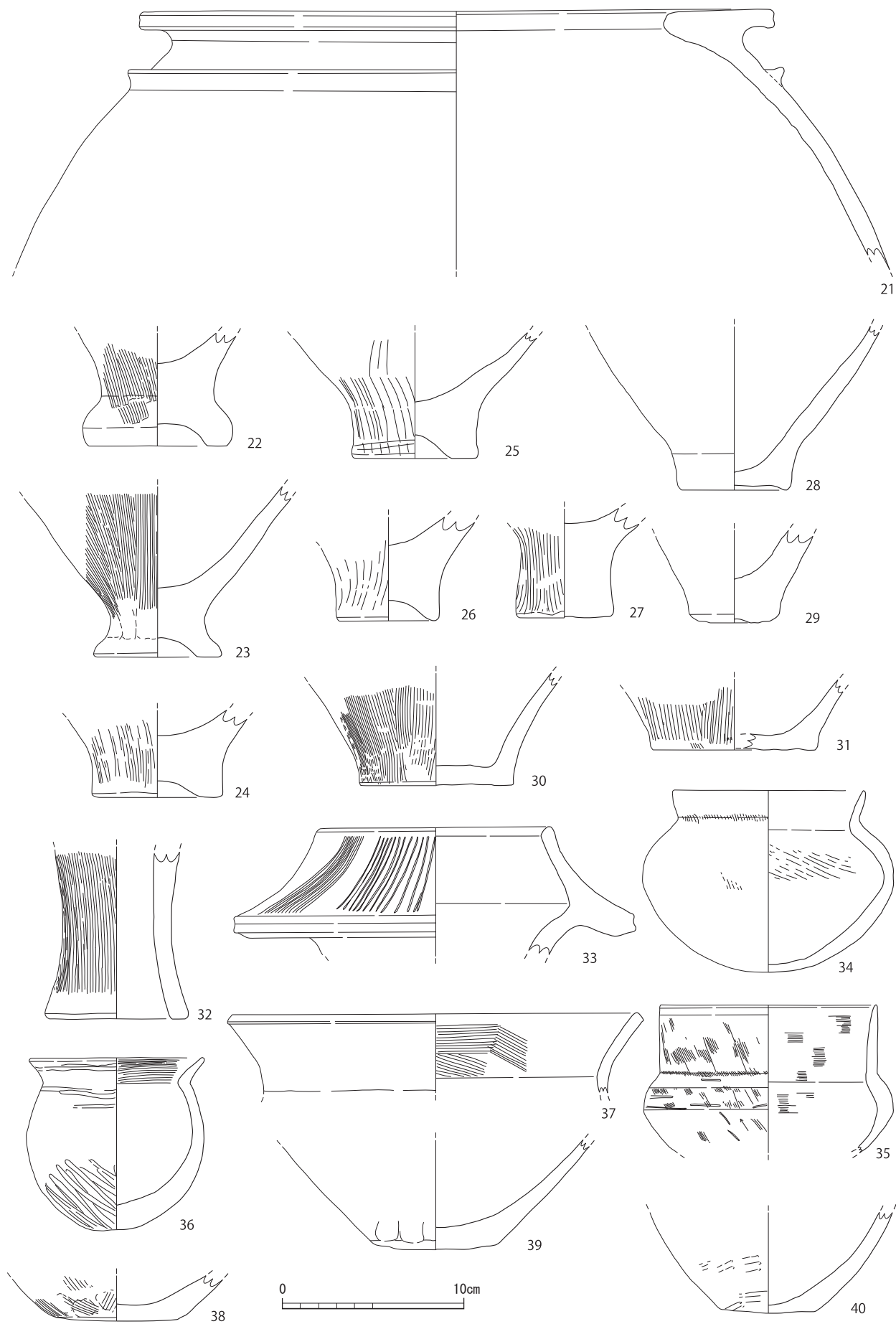
4 その他の遺構出土遺物 (図版 26・27、第 66～68 図)

1～7は弥生土器壺である。1は緩やかに外湾する口縁で、端部は浅い沈線状に凹ませる。内面には横ヘラ磨きを確認できる。SK-563 礎盤掘り方出土。2～7は底部片である。2は小型壺で、外面にヘラ磨きが残る。SK-358 出土。3はSK-84 出土。4は底部と胴部の接合痕が認められる。SK-176 出土。5はわずかに上げ底状になる。SK-143 出土。6は甕の可能性もある。外面には2条の線刻による絵画が施される。外面には縦ハケ目を行う。SK-259 出土。

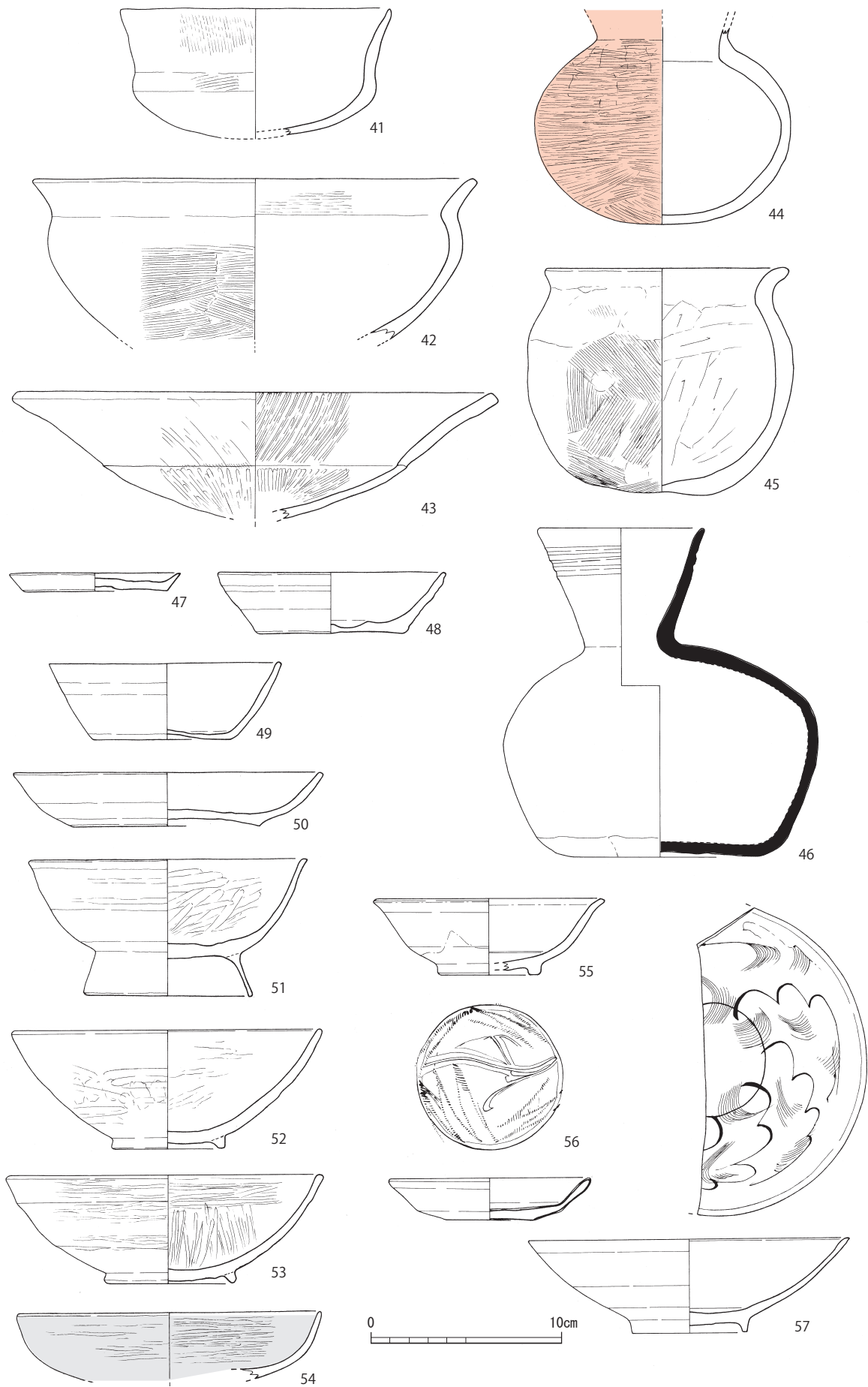
8～31は弥生土器甕である。8～10は断面三角形となる口縁部。8の口唇部にはヘラ状工具



第66図 その他の出土遺物実測図①(1/3)



第 67 図 その他の出土遺物実測図② (1/3)



第 68 図 その他の出土遺物実測図③ (1/3)

による刻目が施される。SK-176 出土。9 は内側に短くつまみ出し、胴部外面には沈線が施される。SK-176 出土。10 の内面口縁部には指圧痕が残る。SK-95 出土。11～19 は鋤先状口縁の甕。11 は器壁が薄い。SK-74 出土。12、13 も SK-74 出土。14、15 は SK-95 出土。16、17 は口縁外端部が若干垂下する。16 は SK-176 出土。17 は SK-95 出土。18 は 20 と同一個体である。外端部に刻目を施文し、口縁部下には M 字状突帯を巡らせる。外面には丹塗りを行う。SK-176 出土。19 は外端部にハケ状工具による刻目を施文し、口縁部下に M 字状突帯を巡らせる。外面には横方向のヘラ磨きが観察される。SK-42 出土。20 は外面上半の横ヘラ磨き、下半の縦ヘラ磨きが明瞭に観察される。21 は大型甕である。肩部には三角突帯が貼付する。SK-42 出土。

22～31 は弥生土器甕の底部片である。22 は裾が開いた形状の底部で端部は丸くおさめる。SK-358 出土。23 もやはり裾が開いた形状だが端部は比較的シャープである。SK-358 出土。24～26 は底面を大きく凹ませるが、27～29 は中実の底部となる。30、31 は器壁の薄い平底となる。24 は SK-571 礎盤掘り方出土。25 は SK-560 礎盤掘り方出土。26、27 は SK-301 出土。28 は SK-74 出土。29 は SK-301 出土。30 は SK-97 出土。31 は SK-432 出土。

32 は裾部があまり開かない器台である。器壁は中央がわずかに肥厚し外面はハケ目、内面はナデによる調整が施される。SK-358 出土。33 は大型の筒型器台で、外面は縦方向の暗文、内面はナデによる調整が施される。SK-407 出土。

34～43 は弥生時代後期末～古墳時代前期の土師器である。34、35 は中型の壺で、34 は扁球形の胴部から頸部で緩やかに屈曲した短い口縁が伸びる。35 は最大径が上位にある扁球形の胴部から、ほぼ直上に口縁が伸び、端部は尖り気味に仕上げる。34 は SK-254 出土、35 は SK-517 から出土した。

36～40 は甕である。36 は小型甕で、胴部下半はナデ後に粗いヘラ磨きを行う。SK-151 出土。37 は屈曲部の稜が不明瞭で、口縁部は直線的に開き、端部は面をなす。SK-407 出土。38～40 は若干レンズ状に厚くなる底部である。38 は外面にハケ目が、40 は外面にタタキが残る。38 は SK-176 出土、39 は SK-100 出土、40 は SK-95 出土。

41、42 は鉢である。41 は小型の鉢。浅い体部から外上方に口縁部が長く伸び、屈曲部は不明瞭である。内面はナデ、外面は上方がハケ目、下方がナデ調整を行う。SK-176 出土。42 は中型の鉢。体部の最大径は上方にあり、口縁部は短く外反する。屈曲部内面には稜を有す。SK-176 出土。43 は高坏である。口縁部は直線的に大きく開き、境目の段は不明瞭である。内外面ともに放射状暗文が施される。SK-11 出土。

44、45 は古墳時代後期の土師器である。44 は長頸壺で、外面には密に磨きが施され赤色顔料が塗布される。SK-56 出土。45 は甕で、丸味を帯びた胴部となる。口縁部は短く強く外反する。内面ヘラ削り、外面ハケ目調整を行う。遺構検出面で採集。

46 は須恵器平瓶である。頸部よく締まり、口縁部は直線的に長く伸びる。口縁部下には 2 条の沈線が巡り、体部は無文である。外面には自然釉が見られる。SK-66 出土。

47 は土師器小皿で、平底の底部は板状圧痕が残る。SK-134 出土。48～50 は土師器坏で、48、49 の体部下位はやや丸みを持って器高が高い。48 は北側遺構検出時に採集。49 は SK-22 出土。50 は器高が低く、底部中央が上げ底状に凹む。SK-134 出土。

51は土師器碗である。高台部は長く直線的に伸び、体部は浅い。内面には太いヘラ磨き、外面は横ナデ後にまばらな横ヘラ磨きを行う。SK-128出土。52・53は瓦器碗である。52の畳付は断面台形の低い高台が貼付され、外面には横位のヘラ磨き、指圧痕が残る。SK-41出土。53は器壁が薄くシャープな作りで、焼成も光沢を持った黒灰色を呈しており、金属的である。内面は細かいヘラ磨きを一方向に行っており、口縁部付近のみ横ヘラ磨きを行う。外面は稜線付近に横方向の細いヘラ磨きを行う。SK-409出土。54は内外面に漆を塗った土師器碗または坏である。内外面に横ヘラ磨きを行い、外面は特に光沢を帯びている。SK-478出土。55は白磁皿である。内面には一条の沈線を巡らせ、高台は台形状を呈し体部は斜上方に外反しながら開く。SK-92出土。56は青磁皿で、口縁端部は薄く尖り気味で体部中位で屈曲し、屈曲の上部は外側へ反転し、その内面は段状となる。内面見込みには櫛描き草花文を施文する。SK-41出土。57は内面に櫛描花文を描く青磁碗である。器壁が薄くシャープな作りである。SK-41出土。

5 その他出土遺物

土製品 (図版 28、第 69 図)

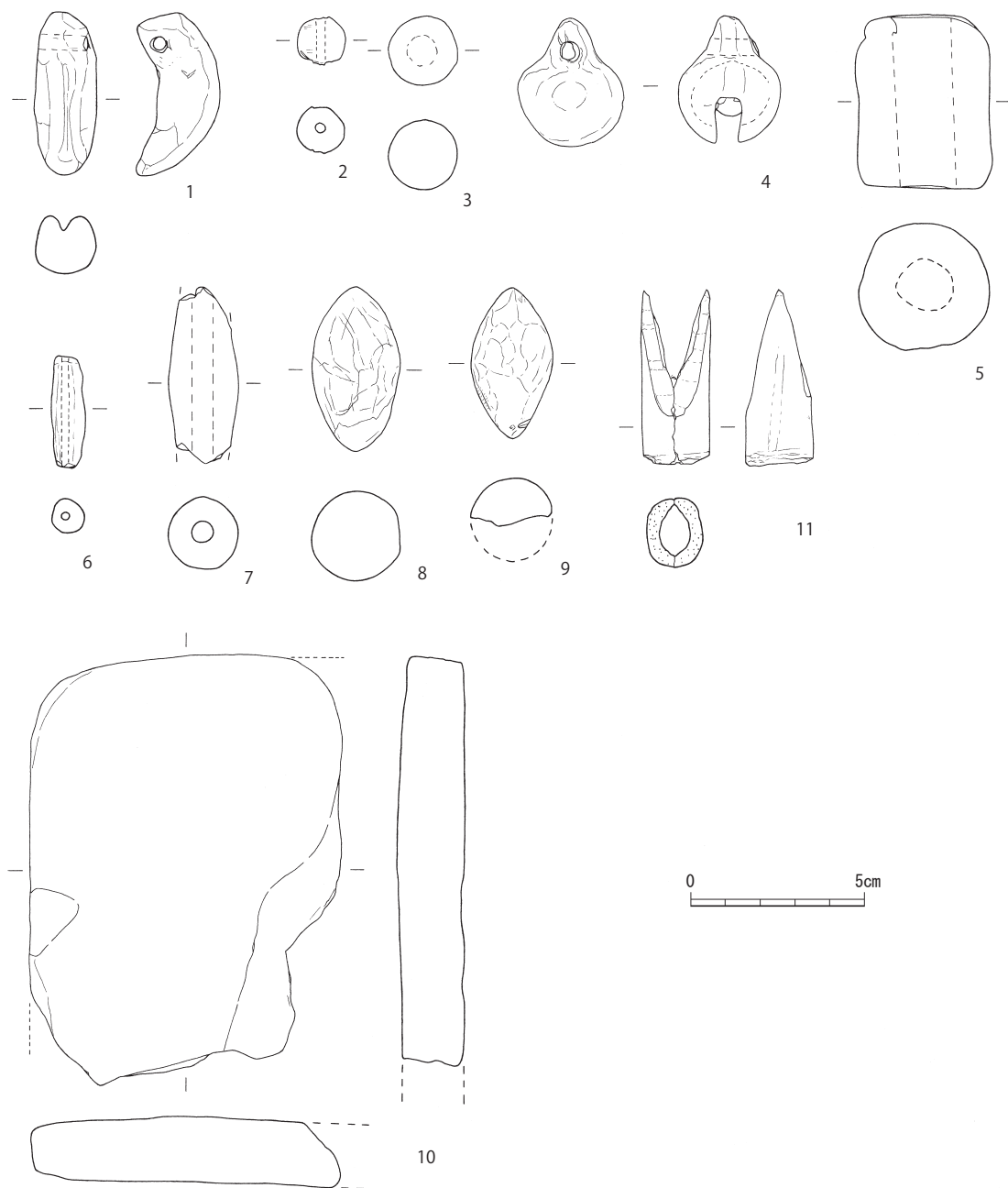
1は土製勾玉である。内側に溝状の凹みがある。長さ4.7cm、幅1.8cm。2トレンチ出土。2は土製丸玉である。直径1.4cm。胎土は精良である。SK-83出土。3は土師質の土玉である。焼成からみて中世以降のものであろう。SK-306出土。4は土師質の土鈴で、内面に土玉が残る。SD-40出土。5～7は管状土錘である。5は大型品。長さ5.0cm、径3.9cm。SK-15出土。6は小型で棒状を呈す。SK-301出土。7は中膨らみの形状をなす。SK-139出土。8、9は土製投弾である。8は完形品。長さ4.75cm、径2.55cm。表面には指整形時の稜線が認められる。SK-24出土。9は半分程度欠損する。長さ4.35cm、径2.35cm。SK-24出土。10は板状の土製品である。表面が著しく風化しており角も不明瞭だが、土師質瓦の可能性もある。厚さ2.0cm。調整不明。SD-40出土。

骨角製品 (図版 31、第 69 図)

11は骨を利用した製品である。端部を削って先端を二又状に鋭利に尖らせる。基部には横方向の切断痕があり、これで完形である。風化がほとんど進んでおらず内部は緻密さを保っている。SK-163出土。

石製品 (図版 28、第 70～73 図)

1～3はスクレイパーである。1は不定形剥片に粗い剥離を加えて形を整えただけの頁岩スクレイパーである。SK-163出土。2は横長剥片の側縁に比較的丁寧な刃部加工を行った頁岩スクレイパーである。SK-110出土。3は不定形剥片の側縁に刃部加工を施したスクレイパーである。不純物を多く含む黒曜石製。4は全面に剥離調整を加えて刃部を作り出した頁岩の石器で、スクレイパーもしくは石鏃であろう。SK-48出土。5、6は黒曜石剥片。7は片岩製石剣。基部は丸味を帯び、全体的に風化が進む。SK-301出土。8は今山産凝灰岩を使用した大型蛤刃石斧である。SK-302出土。9は頁岩製抉入片刃石斧である。刃部は欠損する。表面の研磨は丁寧で、抉部は非常に浅く不明瞭である。SK-358出土。10～13は石包丁である。10は紐

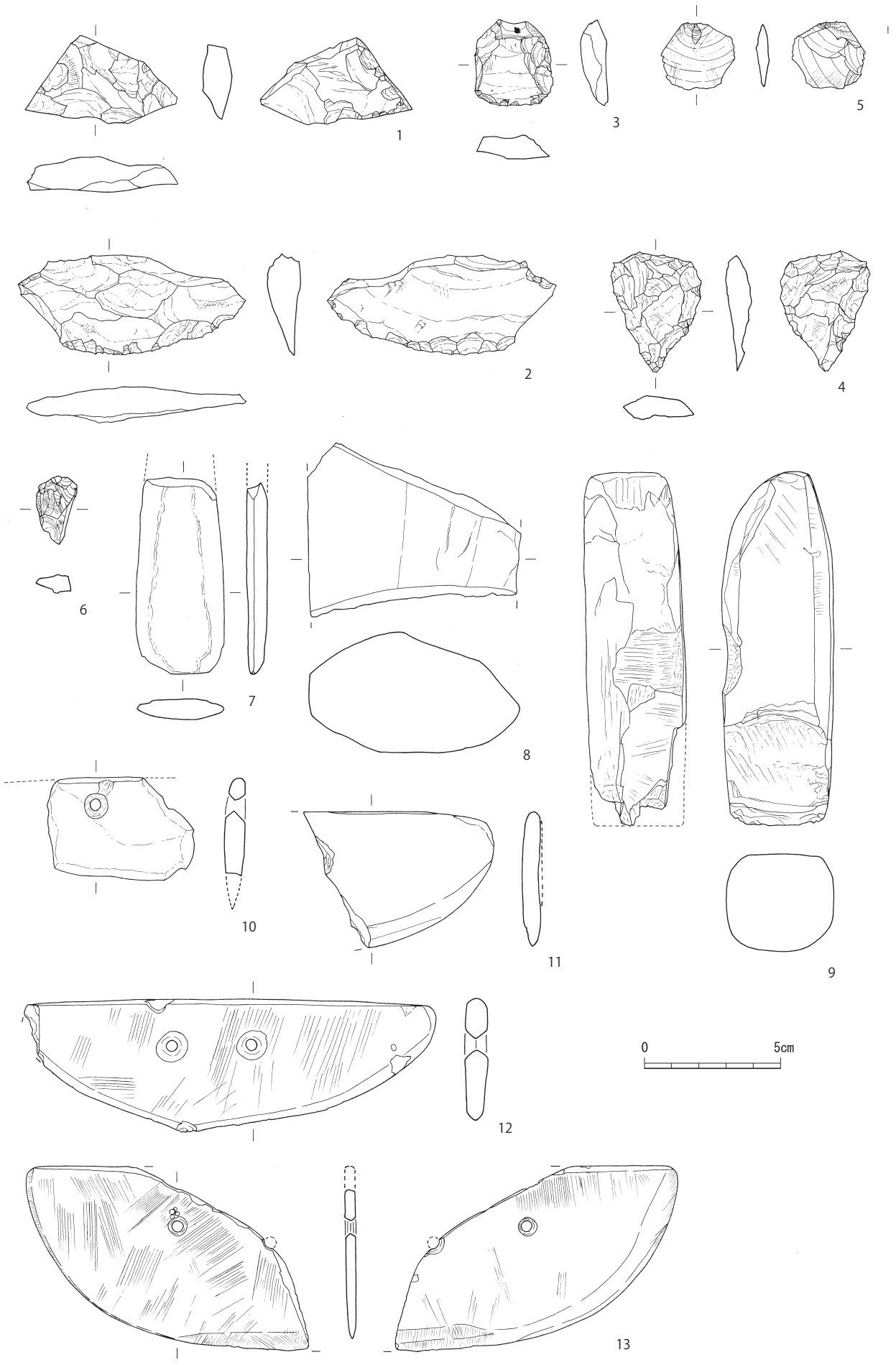


第 69 図 土製品・骨角製品実測図 (1/2)

擦れ痕が残る。SD-40 出土。11 は片岩製。遺構検出面出土。12 はほぼ完形品である。刃部研ぎ直しのためか、かなり細身の形状をなす。遺構検出面出土。13 は形状が整い身部も薄い優品である。欠損後再加工を行う。暗紫色を呈しており、立岩産と思われる。SK-164 出土。

14 は側縁を打ち欠いて二箇所に抉り込みを入れた扁平円礫で、錘として使用したのであろう。安山岩製。2 トレンチ出土。15、16 は安山岩製凹石である。どちらも両面に顕著な凹部を作っており、15 は側縁にも顕著な敲打痕がある。15 は SK-231、16 は SK-97 出土。

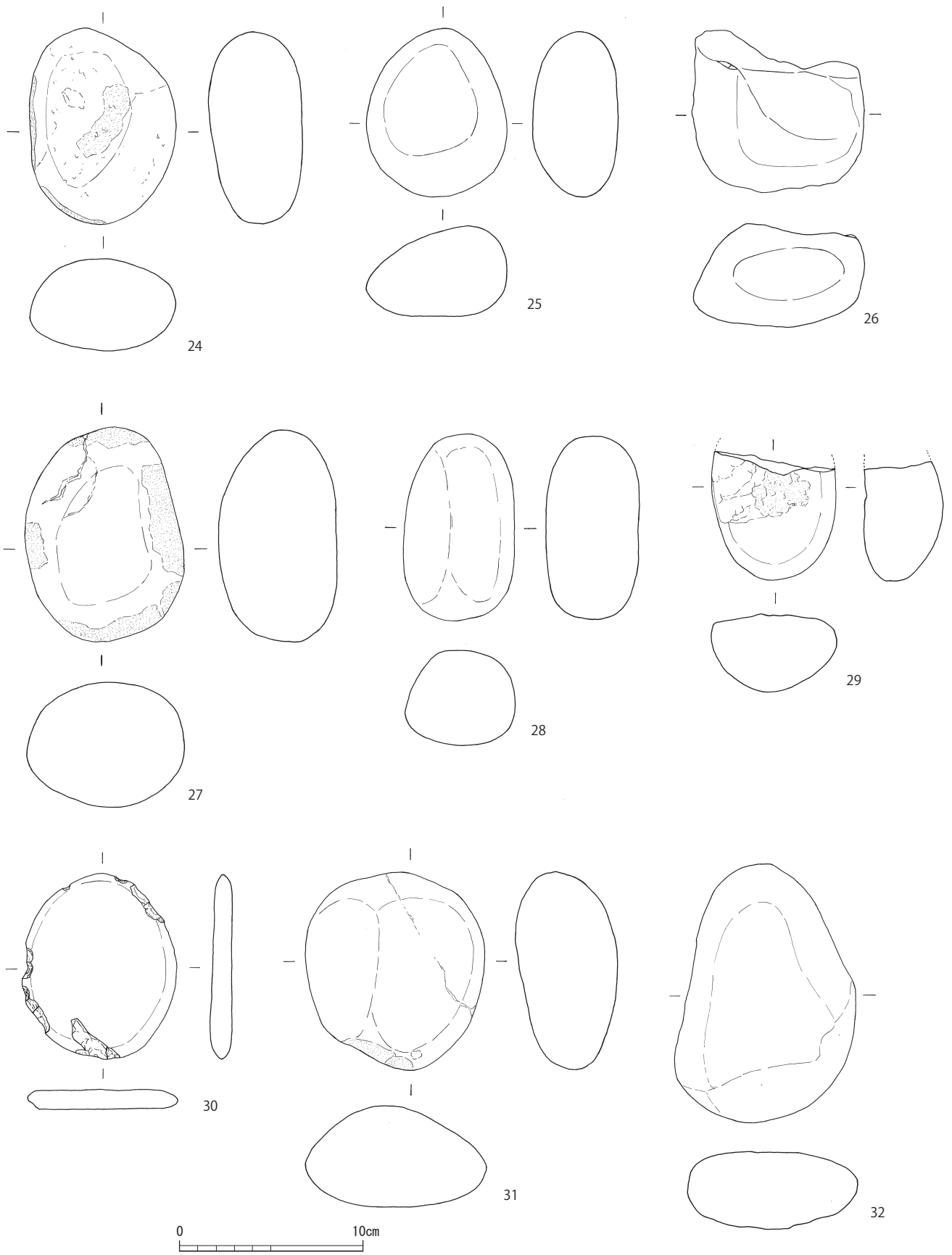
17 は軽石製浮子である。加工痕は無く、未加工のまま使用したのであろう。SK-300 出土。18～32 は磨石、敲石である。18 は棒状で使用痕はほとんど無い。安山岩製。SD-40 出土。19



第70图 石製品実測図①(1/2)



第 71 図 石製品実測図② (1/3)

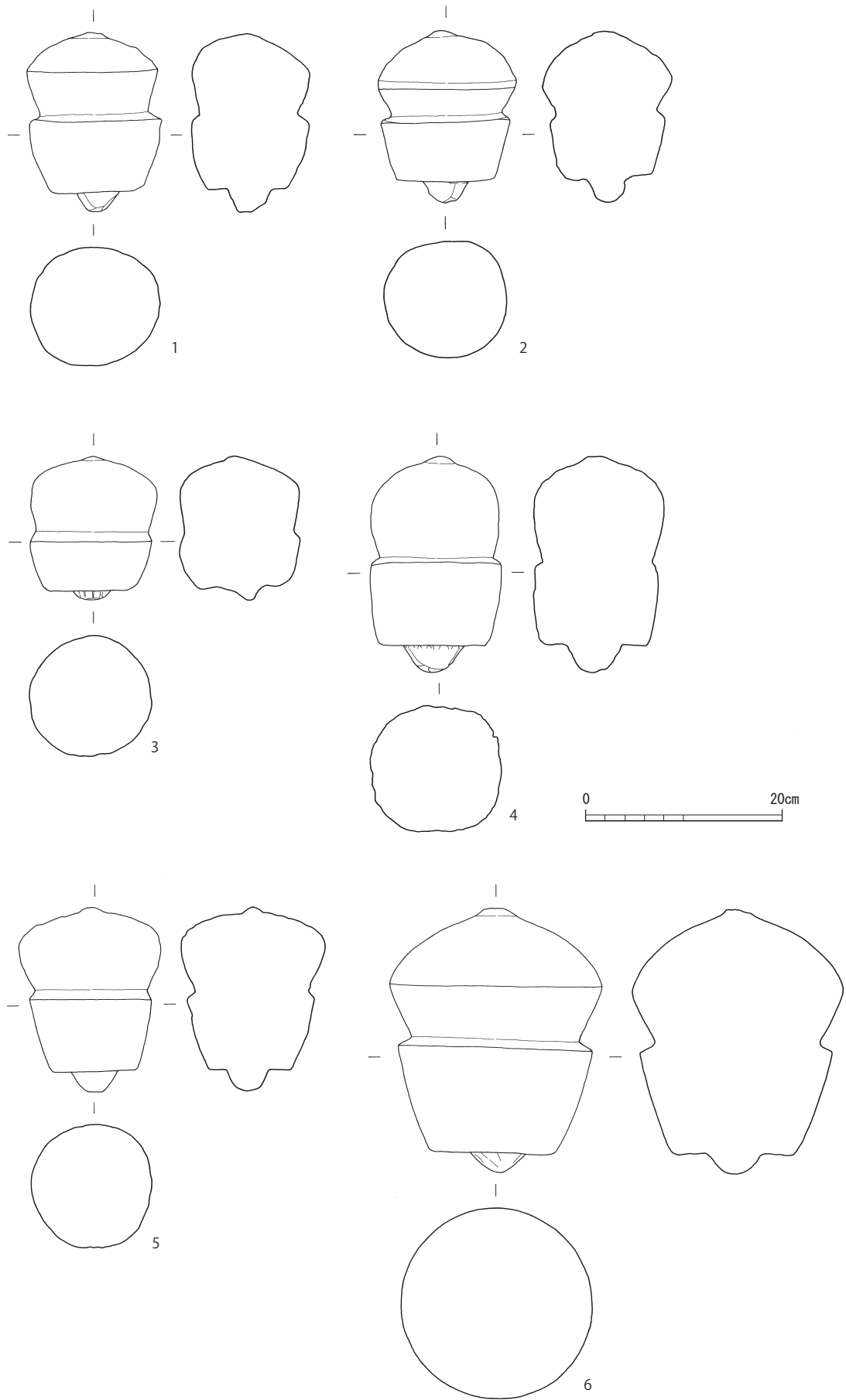


第 72 図 石製品実測図③ (1/3)

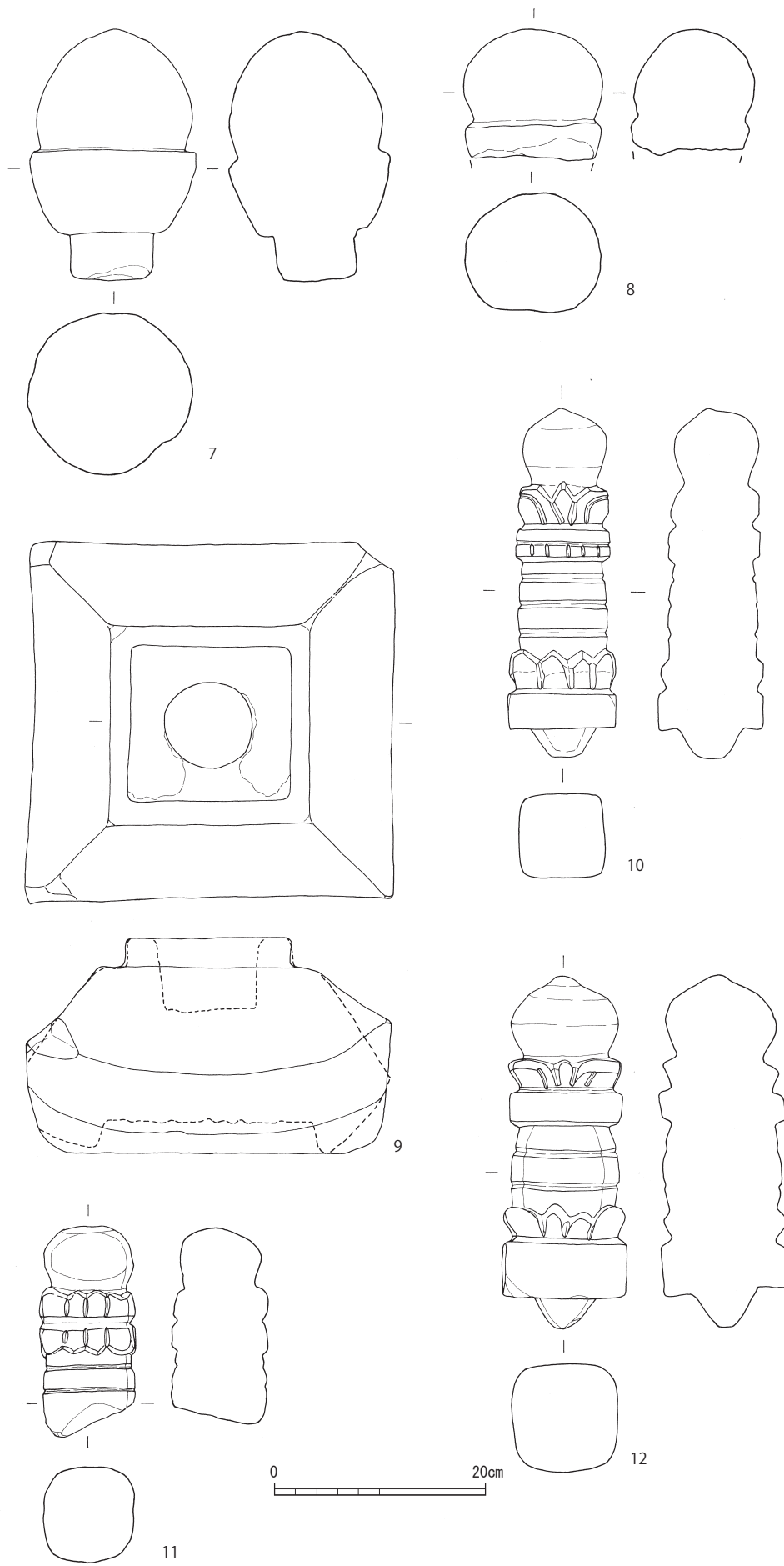


第73図 石製品実測図④(1/3)

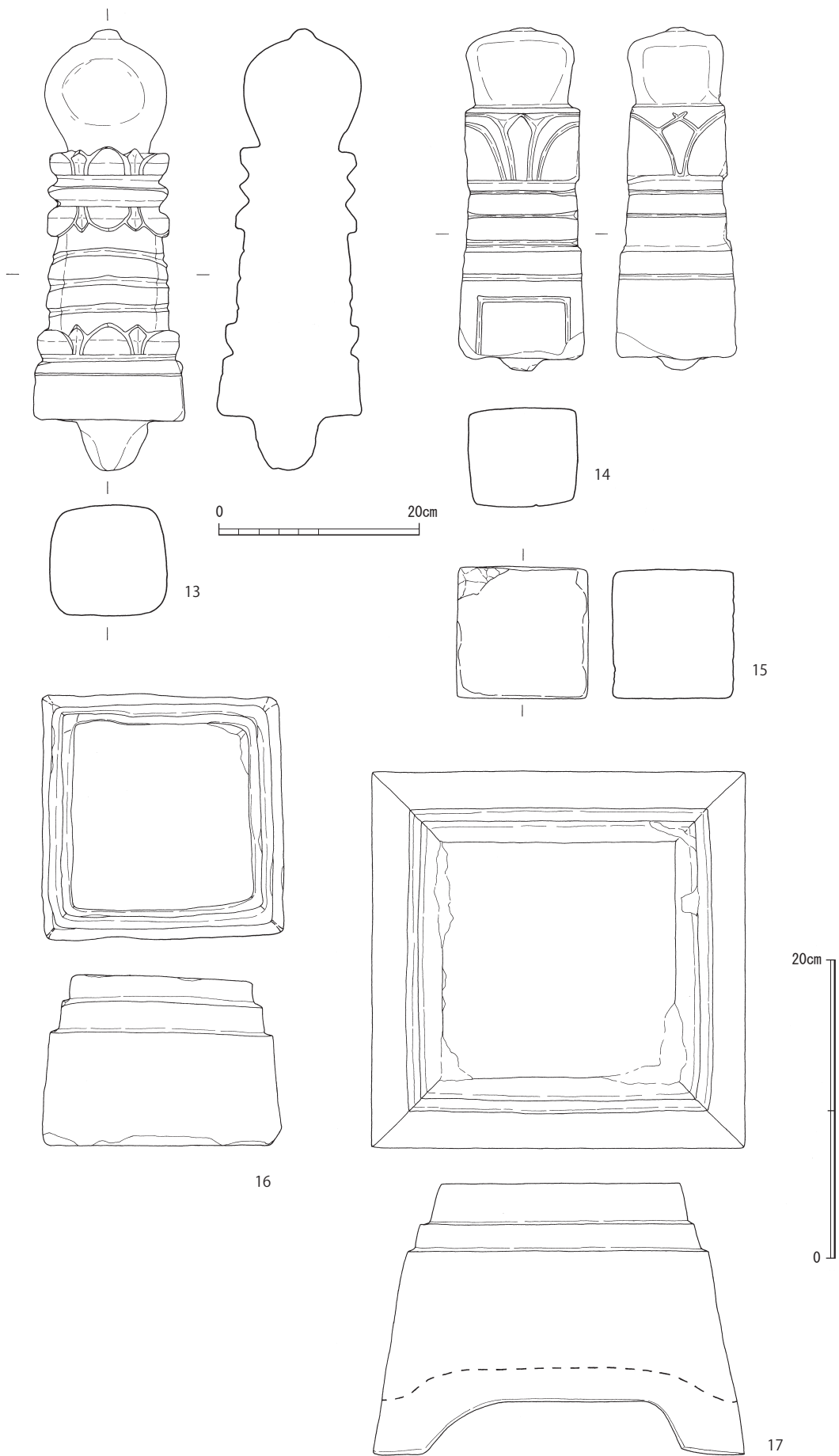
も棒状で先端は顕著な使用痕がある。安山岩製。SD-40 出土。20 も棒状で使用痕はほとんど認められない。安山岩製。SD-135 出土。21 は片岩製。使用痕は顕著ではない。SD-40 出土。22 は端部の使用はほとんど確認できないが、表面には敲打による剥離が見られる。安山岩製。SD-135 出土。23 は不整形の安山岩円礫を使用する。SD-135 出土。24 は形状の整った擬灰岩円礫を使用し、側縁に顕著な使用痕がある。SD-135 出土。25 は安山岩円礫を使用する。使用痕はほとんど認められない。SD-135 出土。26 は安山岩製。端部は研磨により平滑になる。SD-40 出土。27 は厚みのある円礫の側縁を敲打に使用しており、顕著な使用痕が残る。SK-



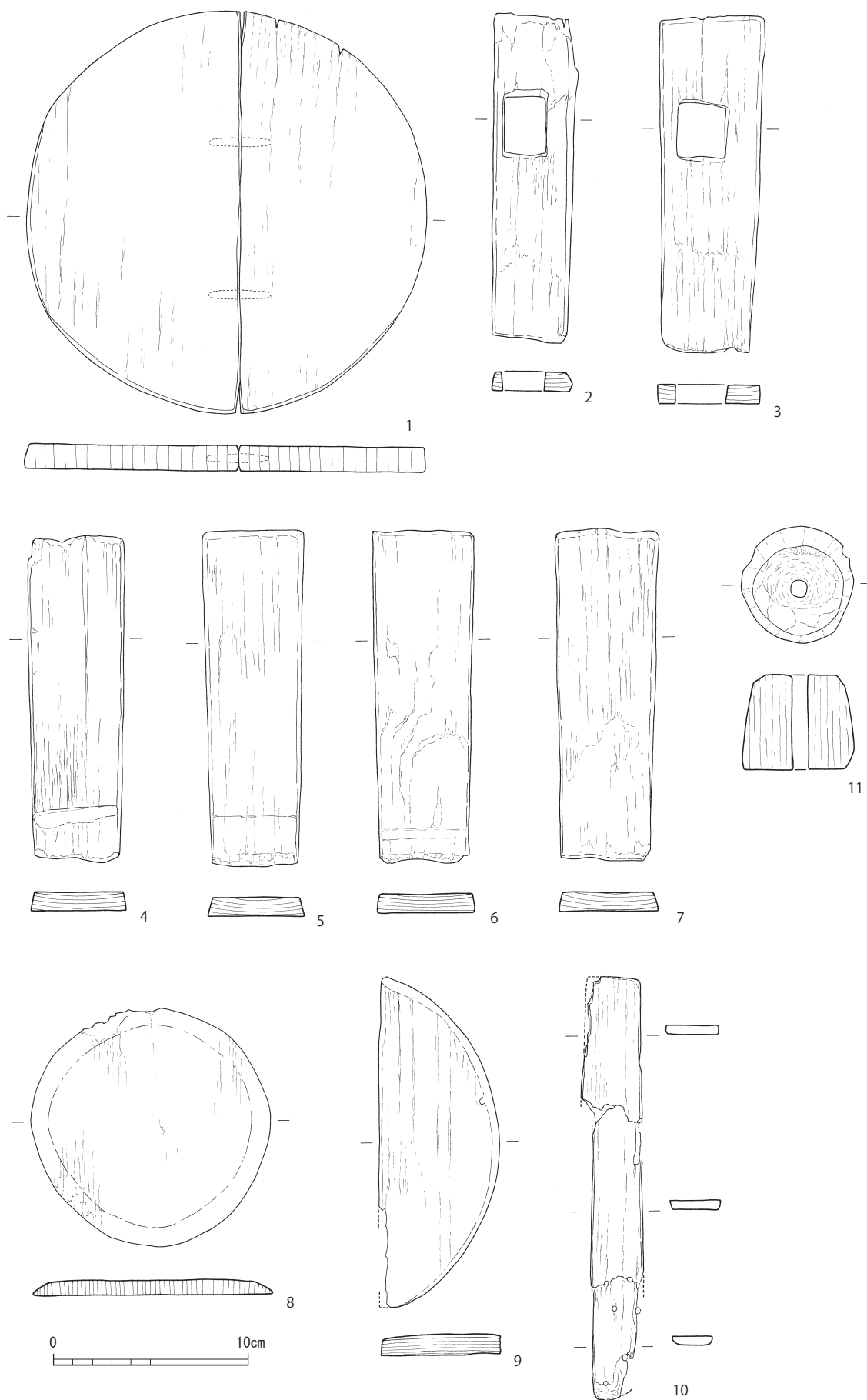
第74図 石塔類実測図①(1/6)



第 75 图 石塔類実測図② (1/6)

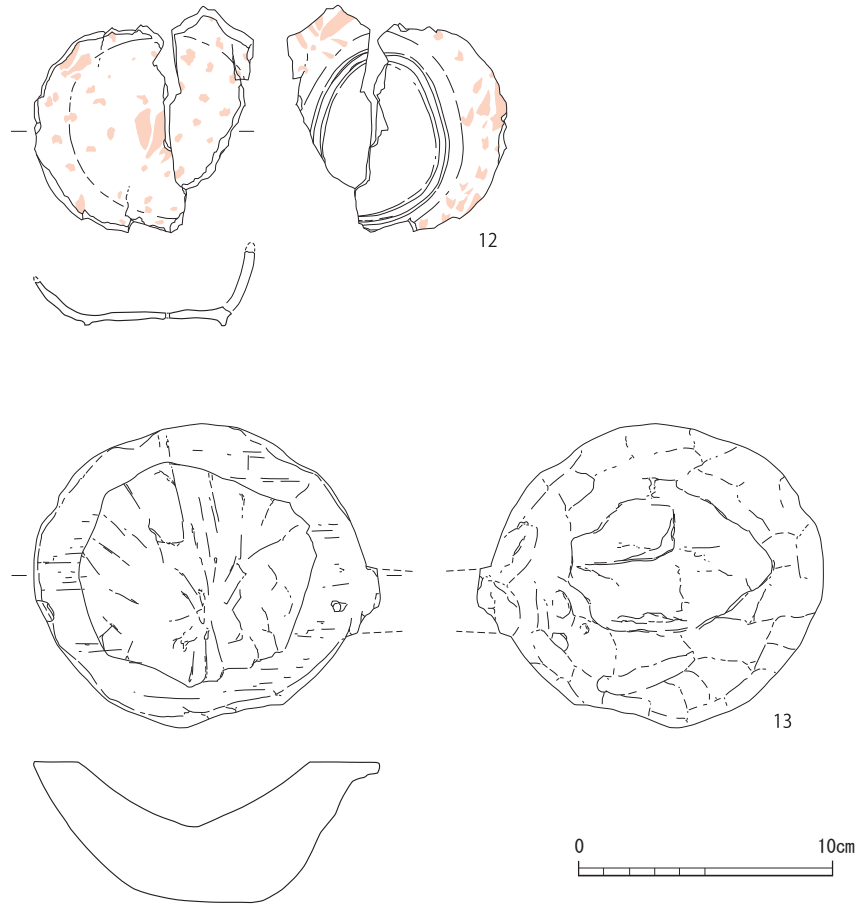


第76図 石塔類実測図③ (17は1/8・他は1/6)



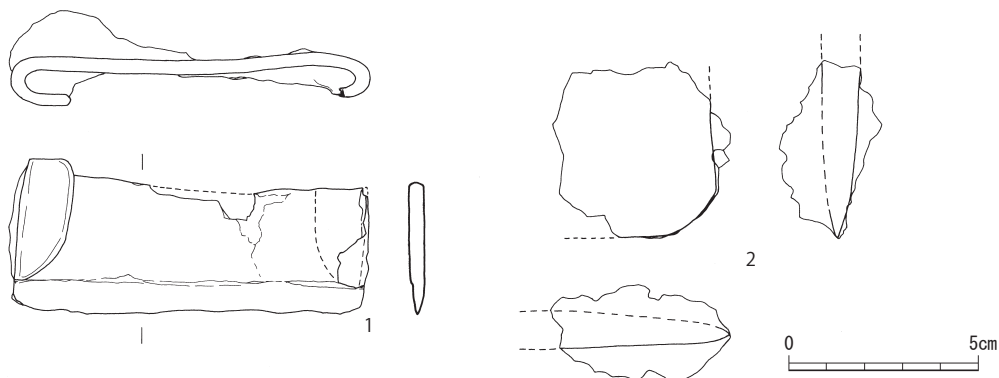
第 77 图 木製品実測図① (1/3)

111出土。28は形状の整った円礫の先端及び側縁を研磨に使用するが、使用痕は顕著ではない。SK-259出土。29は緻密で硬質な凝灰岩を使用する。表面には敲打による使用痕が顕著である。30は片岩の扁平な円礫の側縁を敲打に使用しており、剥離が見られる。SD-40出土。31は頁岩円礫を使用する。使用痕はあまり顕著ではない。SD-135出土。32は扁平な円錐状の安山岩円礫を使用する。使用痕は顕著ではない。SK-303出土。



第78図 木製品実測図②(1/3)

33~36は砥石である。33は砂岩製の砥石片で、側面と表面を使用する。SD-40出土。34は大きく欠損しており砥面は2面を確認できるだけである。細粒砂岩製。SD-40出土。35は顕著に使用しており大きく摩耗する。灰色砂岩製で少し目が粗い。SK-401出土。36もやはり顕著な使用のため摩耗が著しい。擦痕も顕著である。少し目の粗い砂岩製。SK-116出土。37~39は軽石である。37は小型で表面に孔があるが、貫通はしておらず、人為的な穿孔ではないようである。SK-



第79図 鉄製品実測図(1/2)

401 出土。38 は整った形状である。2 トレンチ出土。39 はSD-40 出土。

40～42 は滑石製石鍋片である。40、41 は縦長柱状の把手部を有し、特に外面に整形段階のノミ痕跡を明瞭に残す。40 はSK-150 出土。41 はSK-134 出土。42 は鏝状をなすもので、かすかにノミ痕が残る。SD-40 出土。

石塔類 (図版 28～30、第 74～76 図)

1～9 は五輪塔の部材である。1～8 は空風輪である。全てSD-40 の大溝からの出土で、8 の茎部が欠損している以外は大きな欠損は確認できない。火輪と連結する茎部は、7 の茎部先端が僅かに欠損しているものの、他の茎部とすれば長い。使用石材は安山岩。6 は薄いピンク色を呈す。9 は火輪で、SD-40 から出土。一部風化による剥離が目立つが、ほぼ完形である。表面は全体的に丁寧に研磨されており、上下面や側面に曲面はなくほぼ平坦に近い面で構成されている。上面の空風輪との連結用の削りは、整った平面円形で内部も丁寧に成形される。10～14 は宝篋印塔の相輪部である。砂岩製。11 が一部欠損するものの、他は全て完形。15～17 は石塔の部材である。すべてSD-40 出土。15 は表面が研磨され、正方形を呈する安山岩。16、17 は基部である。16 は上方に二段の段を設ける。17 もやはり二段の段を設け、基底部は4つの脚部を有している。

木製品 (図版 30・31、第 77・78 図)

1～9 は桶である。1～7 は同一個体。1 は底板である。二枚の板を接合しており、接合面には二対のホゾ穴がある。2、3 は恐らく把手部を差し込んだ穴であろう。4～7 は側板で、下部には底板の接地痕跡が残る。SK-1 出土。8 は1 と比べると径が小さい。下面は端部まで平坦な面を形成するが、下面は端部付近が丸味を帯びている。SK-1 最下層出土。9 も底板であろう。表面には柿渋が塗られているようで、暗褐色を呈す。SD-40 出土。

10 は細長い板状の木製品である。下部には計6つの小孔がある。上面は平坦面を形成するが、下面は端部が丸味を帯びている。SD-40 出土。11 は紡錘車か。表面には加工痕が残る。硬質の広葉樹材を使用する。SK-302 出土。

12 は漆器椀である。表面を黒漆で覆い、その上から朱漆で草花文様を描く。全体的に歪んでいる。SK-1 出土。13 は杓子未製品である。硬質の広葉樹材を用い、粗整形段階まで行っている。基部は欠損する。SK-410 出土。

鉄製品 (図版 30、第 79 図)

1 は手鎌である。内面には折り返した際の接合痕が明瞭に残る。身の厚さは5mm。刃部の幅は9.5cm。SK-161 出土。2 は板状の鉄製品で、下縁、右縁ともに刃部を形成する。身の厚さは1cmほどある。板状鉄斧か。SK-161 出土。

IV 総括

今回の調査の結果、本遺跡は弥生時代の集落跡を初現とし、中世まで断続的に形成された遺跡であることがわかった。検出した遺構は、掘立柱建物および礎盤、土坑、溝、ピットに分けられる。出土遺物の時期を大別すると、弥生時代中期初頭から中期後半、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭、古墳時代後期、古代、中・近世に区分される。ここでは調査・整理の成果について若干の所見を述べまとめとする。

1 掘立柱建物

掘立柱建物は、SB-1001、SB-1002、SB-1003 の3棟を検出した。これらは調査区中央付近に位置する。3棟のうち1棟は1間×2間、2棟は1間×1間で、柱間の間隔の相違から桁と梁が想定される。SB-1001とSB-1003は主軸を概ね東西方向にとり、SB-1002は南北方向を向く。棟の方向を揃えるような傾向はない。今回、掘立柱建物として確認することができたのはこの3棟だけだったが、周囲には多くの礎盤が確認されており、本来掘立柱建物の数はさらに多かったものと思われる。これらの礎盤は、調査区の中央付近に多く分布し、北東にも分布するが、地形が若干低い西側一帯には分布していない。

礎盤は同時期の他の遺構との重複も見られることから、集落の存続期間が比較的長期に及んだことを示唆する。また集落内に竪穴住居が存在しないことから今回検出した建物の多くは居住用の建物だったと考える。これらの礎盤は、厚さがそれほどなく、目立った挟り込みがないこと、礎盤検出面で多くの弥生時代中期の土器片を検出したことから、当遺跡の近隣に位置する蒲船津江頭遺跡で確認された事例と同様、その帰属時期は弥生時代中期と考える。

2 土坑

土坑は調査区全体に及び、特に中央から東側にかけて密度が高い。今回報告した土坑は58基ある。土坑の形状は円形に近い形状のものが多く、土坑の壁は垂直に近い立ち上がりで、一部オーバーハングするものも見られる。規模は直径1mに満たないものから2mを超えるものまで様々あり、深さは浅いものの中にはあるが、概して1m前後のものが多く、中には大型の土坑で深さ2mに達するものもある。正円形で垂直に深く掘削されたものは井戸として使用されたものであろう。また、不整形の土坑は廃棄土坑として使用されたものと思われる。中にはSK-111のように覆土に貝殻を多量に含んだものもある。

以下、時期毎に出土遺物を概観する。

弥生時代中期初頭から中期後半

この時期の土坑は、SK-90、SK-129、SK-164、SK-168がある。

SK-164は弥生時代中期初頭から前半の遺物が出土しており、今回の調査の中では最も時期が遡る。SK-129は図示できた遺物が1点のみであったが、中期前半頃のものである。SK-90はやはり図示できた遺物が1点のみであったが、中期後半頃の壺の口縁部である。SK-168は中期後半の甕口縁部が出土しており、この時期に位置付けられる。その他、他の遺構からこの時期の遺物が混入品として多く出土しており、本来はもっと遺構数が多かったのであろう。因み

に、SK-166からは口縁部の肥厚が小さく、口縁外端部と口縁部下の突帯に刻み目を巡らせる甕6が出土しており、形式的にはさらに古く位置付けられる。

弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭

この時期の土坑は、SK-110、SK-175、SK-183、SK-186、SK-238、SK-240、SK-241、SK-306、SK-401がある。

SK-110から出土した10・11の小型の巾着型壺、13のように口縁部が短く立ち上がり体部の最大径が上方にある丸底壺などは、筑後地域に特徴的な遺物である。レンズ状の底部となる甕の形状は古相を示し、外来系遺物が見られないことから弥生時代後期終末に位置付けて良いものと思われる。SK-238はレンズ状の壺、甕と尖底気味の直口壺、およびくの字口縁で内外面ハケ目調整の甕、口縁部が外反して長く伸びる高坏とが共伴し、外来系要素がないことから、形式的にはSK-110に後続する時期のものとして位置付けられる。SK-306は調整に在地的要素を残すものの、形状や胴部内面の調整に外来的要素が窺え、外来系土器を強く意識したものと言える。在来系土器の共伴に恵まれなかったが、これなどは古墳時代前期初頭として良いものである。

古墳時代後期

この時期の土坑は、SK-19、SK-51、SK-83、SK-109、SK-111、SK-141、SK-156、SK-163、SK-166、SK-170、SK-171、SK-255、SK-300、SK-303、SK-433がある。土坑の数としては最も多い時期である。

SK-170は甕や坏の形状から、他よりもやや先行する時期、5世紀後半から6世紀初頭頃のものではないかと思われる。SK-156は内面のヘラ削りの弱い甕と段を有した須恵器坏身が共伴しており、時期的に後続するものである。

SK-83は古墳時代前期の混入品と思われるものもあるが、須恵器坏身と内面黒色の模倣坏、丹塗りの長頸壺、甕、甗把手などが共伴しており、6世紀後半頃に位置付けられる。SK-111も同様で、須恵器坏、模倣坏、丹塗り長頸壺、口縁部が強く外反する甕、土師質に焼成された小型の須恵器甕が共伴する。SK-141は共伴関係に恵まれないが、完形の長頸壺が2点、小型の甕とともに出土しており、ほぼこの時期であろう。SK-255も同時期である。SK-300は完形に近い古墳時代前期の壺や甕も共伴するが、4や6は後期のものとして良いだろう。SK-303の丹塗り高坏や提瓶、SK-433の15の小型甕や16の壺もほぼ同時期である。

SK-37はあまり良好ではないが、33や34の坏蓋の形状から7世紀後半頃に位置付けられる。31の土師器皿や32の甕、35、36の平瓶などはこれに共伴する時期のものであろう。28や29も同時期であろうか。

古代

古代の土坑として、SK-16、SK-104、SK-140、SK-202がある。SK-104は黒色土器の碗と坏が共伴する9世紀の遺物である。SK-140も黒色土器が出土しており、同時期であろう。SK-202は土師器坏と甕、須恵器甕とが共伴しており、概ね同時期のセット関係として重要である。

中・近世

中・近世の土坑として、SK-1、SK-26、SK-116、SK-126、SK-132、SK-148がある。

SK-1は土師器小皿、土師器坏と瓦質焼成の火鉢、青磁鉢、李朝白磁など中世後期の遺物が出土している。他に桶や漆器椀も共伴している。SK-26は多くの弥生土器の混入があるが、11の陶器皿や15の陶器甕などは近世の所産であろう。SK-116も陶器碗が出土しており、近い時期であろう。SK-126は瓦器壙1点しか図示できなかったが、これは13世紀のものである。SK-132もおおむね13世紀の共伴遺物として良好な事例である。SK-148もほぼ同時期の土師器小皿と坏とで占められる。

3 溝

溝はSD-40、SD-135、SD-161がある。

SD-40は調査区中央から東半にかけてL字状に屈曲する大型の溝である。出土遺物は弥生時代中期、後期や古墳時代後期の遺物も混入しているが、主な時期は中世のものであり、その中心は16・17世紀に位置付けられる。溝の底部からは五輪塔や宝篋印塔を構成する石製品が出土している。特に宝篋印塔の数は注目すべきであり、付近に位階の高い墓地があったことを連想させる。

本調査区の北東には中世柳川の豪族蒲池氏の庇護を受けた同氏族の菩提寺である崇久寺が位置し、蒲池氏の居城である蒲池城も未だ場所の特定はされていないもの同寺の周辺と考えられているこのような周辺環境の状況等から、本調査において出土した当溝が中世における蒲池城に関連する施設である可能性が考えられる。また、調査区北側の遺構が複雑に密集している場所では、この大溝によって切られたと考えられる遺構が多数確認できることから、大溝以前の遺構については現在確認できる物よりも多く存在し、大溝掘削時に削平されたと考えられる。

SD-135は弥生時代中期の遺物も多く混入するが、大半は弥生時代後期終末の遺物である。小型で肩が張った器形の小型壺や内外面ハケ目調整の壺、口縁端部が明瞭な稜をなし、肩が張らず、調整には内面ハケ目、外面ハケ目または併行タタキの甕、および鉢、高坏が出土している。甕底部の資料は少ないが、レンズ状または尖底のものが出土している。

SD-161は弥生時代中期の遺物も多く混入するが、遺構の時期は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭のものである。20は内外面ハケ目調整だが器形は布留甕を意識しているようであり、古墳時代のものとして良いだろう。

この遺構で特筆すべき点として、鉄器が出土したことが挙げられる。ここからは板状鉄斧と手鎌の2点が出土しており、貴重な資料を加えることとなった。

4 まとめ

今回の調査では、弥生時代中期から中・近世までの遺構、遺物を確認することができた。掘立柱建物は明確な時期の比定を行うことはできず、また礎盤の多くは組み合わせを確認することができなかったが、周辺の土坑や溝も含めて集落構成の一端を垣間見ることができた。弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭は土坑と溝を確認することができたが、それ以外の居住施設を確認することはできなかった。これは古墳時代後期や古代も同様である。この時期の集落形態がどのようなものであったのか、今後の調査の課題である。中・近世は蒲池氏に並行する時期とみられる溝と土坑を確認することができた。文献にも登場する蒲池氏の関連遺構を確認でき

たことの意義は大きい。また、各時期の遺物は状態も良く、良好な共伴関係にあるものもあり、編年的位置付けに寄与する面も多い。

発掘調査および整理作業においては不十分な点多々あったが、今回の調査の成果は柳川市の歴史を解明する上で重要な成果となった。

—参考文献—

『角川日本地名大辞典 40 福岡県』1988 角川書店

『大川市誌』1977 大川市

『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書 第1集 2006 柳川市教育委員会

『東蒲池大内曲り遺跡』柳川市文化財調査報告書 第2集 2007 柳川市教育委員会

『徳益八枝遺跡』柳川市文化財調査報告書 第6集 2008 柳川市教育委員会

『京町遺跡』柳川市文化財調査報告書 第7集 2009 柳川市教育委員会

『上町遺跡 第1次調査』柳川市文化財調査報告書 第10集 2016 柳川市教育委員会

『柳川駅東部土地地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』柳川市文化財調査報告書 第11集 2016 柳川市教育委員会

『西蒲池池淵遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書 第239集 2013 九州歴史資料館

『西蒲池門前遺跡』福岡県文化財調査報告書 第240集 2013 九州歴史資料館

『西蒲池池淵遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書 第243集 2014 九州歴史資料館

『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 2005 福岡県教育委員会

『矢加部町屋敷遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 2007 福岡県教育委員会

『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 2009 福岡県教育委員会

『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集 2009 福岡県教育委員会

『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集 2010 福岡県教育委員会

『蒲船津江頭遺跡Ⅳ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集 2011 福岡県教育委員会

『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集 2012 九州歴史資料館